

再建主義ウォッチング掲示板 過去ログ

2004年7月21日(No.347)～9月10日 (No.535)

米国のキリスト教新右翼思想である「キリスト教再建主義」(Reconstructionism, Dominion Theology, Kingdom Now Theory, Theonomy)に対して、真剣な憂慮を表明する立場に立つ人たちのための、情報交換・意見交換・問題提起のための掲示板です。なお、この掲示板の趣旨と関係がないと管理者が判断した書き込みについては、書き込んだ方への事前の承諾を求めずに、一方的かつ独断的に削除することがありますので、ご了承ください。

[再建主義ウォッチング掲示板 現行ログ](#)

535 天使と悪鬼の区別

[山谷](#) - 2004/09/10 23:45 -

現経綸においては、キリスト頭首権に従属させられている武装解除された悪鬼的天使的諸力が、領域主権を担当している、ということです。

すると、キリストの頭首権的支配に服従している限りにおいて、諸国家・諸政府は「キリスト的である」あるいは「キリスト化されている」と言うことが出来ます。

だからこそ、ローマ書13章は、キリスト者が国家権力の法による統治に従うよう、「中間時の中間倫理」を命じることが出来るわけです。

このような世界観的パラダイムが、本当に新約聖書それ自体の世界観的パラダイムであるのか、どうか。ここが、今の議論の流れの焦点です。

これについて「しかり」と言うのが、ハインリッヒ・シュリーア、ギュンター・デーン、カール・バルト、ヘンドリクス・ベルコフ、オスカー・クルマン、ジャン・ダニエルー、ジョージ・ブラッドフォード・ケアードといった神学者たちです。いずれも、新約聖書神学者、組織神学者、歴史神学者、新約聖書言語学者、新約聖書文献学者といったひとたちです。

さて、武装解除された悪鬼的天使的諸力については、聖書正典で、次のように述べています。

1. 彼らは、キリストに仕えるしもべとして、キリストによって創造された (コロサイ1:15-16)
2. 彼らは、キリスト高挙によって打破され、武装解除された (コロサイ2:14-15)
3. 彼らはいまや、キリストの頭首権的支配の下に置かれている (エペソ1:20-23)
4. 彼らはいまや、教会を通して示される神の知恵を、驚きをもって学んでいる (エペソ3:10-11)
5. 彼らが教会を通して学ばさせられていることは：

(1) 神が、天使的諸力を助けることをしないで、ユダヤ人を助けられること (ヘブル2:16) 神が、ユダヤ人のみならず、異邦人をも助けられること (エペソ3:8)

(2) 神が、来るべき世界を、天使的諸力に従わせないで、人間に従わせることにしたこと (ヘブル2:5) そしていまや、人間としてのキリストが、神の右の座に着き、キリストの頭首権によって、天使的諸力を支配するに至ったこと (ヘブル2:6-8, エペソ1:20-23)

6. 彼らは、打破され、武装解除されたが、「かせを脱ぎ捨てて」(詩編2:3)、キリストから委任された領域主権を濫用しようとする。これが、悪鬼の性格の露見である。彼らの一部は、悪鬼的活動をして、教会に敵対する(エペソ6:12)。それゆえ、キリストは、鉄の杖で彼らを打ち砕き、すべての領域主権を、キリストの直接統治下に置かれる(詩編2:6-9、コリント前書15:24、ペテロ後書3:10)

以上の聖書箇所を読むと、「これらの箇所は古代人の神話的世界観をベースにしているものであり、現代人の世界観には適合しないものであるから、非神話化の作業を行って、実存的解釈を施す以外に、利用方法はない」と考えるのか。あるいは「天使論は、福音伝道には重要ではないので、考慮しない」と考えるのか、それとも、「可能な限り、字義通りの意味で・すなわち・歴史的文献学的意味で受け取り、それにより、わたしたちの世界観を構成すべきである」と考えるのか、で、答えがすべて、違ってきます。

わたしの立場は、もちろん、最後のものです。

さて、問題は、キリストの頭首権に由来する領域主権を、正しく用いている天使的諸力と、濫用している天使的諸力とを、どうしたら、見分けることが出来るか、ということです。

つまり、武装解除された悪鬼的天使的諸力が、国家を支配するにあたり、「キリスト的」であるか「非キリスト的」であるかを判別する指標です。

ここで、詩編第2編が重要性を持ってきます。国家権力の悪鬼化は、キリストによって課せられた「かせ」を脱しようとすることによって露見する、ということが、詩編第2編で歌われています。

この「かせ」を、国家権力の行使を限定する機能を持つもの、と考えた場合、「かせ」に相当するのは、神定法としての自然法、自然権に基づく国際法、イマゴ・デイに由来する人道と人権、キリスト者の抵抗権によって形成された「国家と市民との間の政治契約としての憲法」などである、と考えることが出来ます。

そうしますと、「天使と悪鬼を区別する」には、判断の対象となる、ある国家権力が、自然法、国際法、人道、人権、憲法を遵守しているか、どうか、によって、明快に判断することができる、ということになります。

534 再臨への希望と、キリストの内住

JOG - 2004/09/10 23:43 -

再臨は確かにクリスチャンにとって最高の希望でしょう。

しかし、そのことにだけ過度に注意が向けられて、クリスチャン生活のバランスがなくならないように、主はすばらしい恵みを今、すでに与えてくださっています。

それがキリストの内住です。

再臨においてはこの方と、直接にお会いするわけですが、その日が延ばされるとしても、この方は、今すでに私たちの内に住んでおられるのです。この方と交わり、愛し合い、エンジョイすることができます。

クリスチャンの内側におこる変化は、内側だけにとどまらず、家庭に、学校に、職場に、教会に、病院に、国会に、国家や、世界に影響を与えていきます。

再臨がおこれば最高のハッピー、しかし、再臨がのばされたとしても、その期間、主はクリスチャンとともに、世界を癒し、解放し、祝福してくださる。なにもあらゆる領域で主の御心がなされるということは再建主義の専売特許ではないはずです。

しかし、その方法は人間が律法に従うことでも、人間が作った法律に従うことでもなく、私たちのうちにおられる主がご自分のみわざをなさることだと信じます。

533 けいじさん、早速のレスをありがとうございます。

JOG - 2004/09/10 23:24 -

>そうだったのですか？そこまで過激になるとは・・・。

けいじさん、早速のレスをありがとうございます。

確かに私もすべての切迫再臨信仰の教会を知っているわけではなく、私の出身教会と似た系統の教会しか知りません。切迫再臨信仰と一言と言ってもいろいろなんでしょうね。

けいじさんの教会では、バランスがとれていて、いいですね。

今晚、再臨があって、主の身元に引き上げられるなら、私たちクリスチャンにとってこれ以上の幸いはないでしょう。私もけいじさんにつられて、久しぶりに再臨の希望を告白します。その時にはすべての疑問は消え去り、顔と顔とをあわせて主にお会いできるのですから。

しかし、明日、目が覚めて、再臨が無かったとき、この地上で旅人として生きる意味は、使命は何なんだろうと求めなくてはなりません。自分だけではなく、子供たちや、子供たちの子供たちの世代になってもなお、もしもその日がのばされるのなら....聖書はその日がいつであるかを言明することを禁じています。だから、その可能性はいくら低くても、ゼロではないわけです。

教会のある少女は、家の中で、少しでもお父さんや、お母さんの姿が見ないと、「再臨がおこって、お父さんも、お母さんもイエス様のもとに行ってしまうて、私だけ残されてしまった。私は悪い子だから、」とよく泣いていたそうです。

ここにも律法主義的信仰が侵入しています。問題は再臨の神学的問題ではなく、主との生きた関係です。

再建主義運動に参加する人の中には、切迫再臨信仰によって傷を受けた人がおり、新しい恵みを求めて参入してくるということがあるのではないかと思います。

また再建主義運動に誘う側の人も、切迫再臨信仰によって傷ついた人が、新しいパラダイムに入ってくることを待ち受けていると思うのです。

しかし、再建主義、非再建主義に関わらずに私たちを束縛しているのは「律法主義的信仰」であると思います。その背後には偽りへと誘う悪魔の働きも否定できません。奴隷の霊です。しかし、福音の恵みはそれらから解放を与えてくれるのです。

ローマ1:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。

ローマ8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。

■532 私が言いたいのは

ただのおじさん - 2004/09/10 23:20 -

聖書<神学、信条、

ではいけないということです。神学、信条にはそれなりの意義があり、非信条主義というのは、その様な神学、信条にこだわりすぎず、聖書をまず読んで、自分なりの答が与えられるようにすることが大事であるということです。神学、信条、が昔のパリサイ人の律法と同じになってはいけないということです。神学でこうだから、信条でこうだから、と言う前に、常に聖書と照らし合わせて確認し、バランスを取るべきであるということなのです。

■531 そうだったのですか！

けいじ - 2004/09/10 22:26 -

JOGさん、

> 30代~40代でクリスチャン2世か3世であればその親の世代、50代~60代のクリスチャンの切

迫再臨信仰の激しさは比べ物になりません。文字どおり、「結婚なんかするような者はおろかも。再臨はもう数年後に世まっているはずだ。」とどうどうと教えられていたそうです。

そうだったのですか？そこまで過激になるとは・・・。僕らの教会の場合は、「主が間もなく来られます」と説教壇で語られると、拍手する人もいたりして、主に間もなくお会いできる喜びにいっぱいになるのですが、普通の生活を変えたりしません。だって、1コリント7章で変えないでいなさい、と言っていますから。結婚を禁じたり、仕事をやめたりするのは、テサロニケ、テモテへの手紙などで、誤った教えとしてパウロは戒めていますよね。

ただのおじさんが言われるように、神学先行ではなく、聖書をストレートに読んで、その結果バランスを保つ必要がありますね。

☐ **530** 私にも非があるかも

けいじ - 2004/09/10 22:21 -

JOGさん、

私も同じことを思っていました。再建主義ウォッチング掲示板なのに、私の質問攻めもあってか、山谷さんが提示する図式ウォッチング掲示板にしてみました。

私も、天使のことも、エキュメニカルのことも、どうもよく分からない事ばかりで、びっくりトンデモと思ってしまう点もありました。でもJOGさんと同じく、再建主義についての問題意識を、ここの掲示板に書き込めば良いと思います。

そうですね？（>山谷さん）

☐ **529** 切迫再臨信仰の世代間の違い

JOG - 2004/09/10 22:12 -

>だから、私も今日、主が戻ってくるかもしれない、とまじで信じていますが、教会学校や英語を教えている子供たちに、主を愛する有能なリーダーとして育て欲しいという強い願いをもって、教えています。

けいじさんはおいくつくらいですかね？

私も切迫再臨信仰をもつ教会の出身です。私は30代ですが、20代～10代の小学生に対しても、私が書いた、

>「自分たちが大人になるまでに再臨は来るのだろうか？自分たちは結婚も、就職もしないのだろうか？」と悩むことがあります。

といった面は一応に観察してきました。

30代～40代でクリスチャン2世か3世であればその親の世代、50代～60代のクリスチャンの切迫再臨信仰の激しさは比べ物になりません。文字どおり、「結婚なんかするような者はおろかも。再臨はもう数年後に世まっているはずだ。」とどうどうと教えられていたそうです。

30代～40代のクリスチャンはそのような痛みを乗り越えて、次の新しい世代に対しては違った意識をもてるようになってきているのでしょうか。

☐ **528** そろそろ潮時かな。

JOG - 2004/09/10 22:02 -

私は再建主義者ではなく、再建主義は律法主義的信仰に人を束縛する面があると問題意識をもってこの掲

示板にきました。

この掲示板でそのような内容をについて共感しあえる相手と出会えるかと思ったからです。

途中から話題に入ろうとした私が悪かったのかかもしれませんが、カトリックの話題や、天使の話題ばかりでした。

私も天使の話題に関しては、つい、頭が熱くなってしまいました。しかし、正直驚きました。

私の当初の目的はここでは達成できそうにないですね。

□527 具体的には

JOG - 2004/09/10 21:57 -

>どうやらここでの文脈でも必要な

それでは、ただのおじさんは、天使も悪霊も区別せず、悪霊が中間管理職についているという教えについてどう思うのですか？

□526 信条・神学を過大視する危険性

ただのおじさん - 2004/09/10 18:34 -

まず私の過去の発言msg 3 4 4 より引用します。

『私の教会の立場は私の過去の発言を見ても分かります。そして私が前提主義の立場を取りうるのも非信条主義であるからだと確信しています。それは私の教会が「聖書のみ」の立場を重視するからであり、そうであるからこそ前提主義というものが有り得るのであると考えます。私の立場からすれば前提主義は非信条主義であるのが当然であり、信条主義に立つ前提主義には違和感を感じます。』

以前にもmsg 1 8 2において‘内なる人’という方が、「信条や神学は絶対ではない」と言って再建主義を批判していましたが、再建主義を批判する方もその危険があることは重々承知すべきでしょう。そうでなければ、他の方から、自分たちだって再建主義者と同じ間違い犯しているじゃないか、と言われるでしょう。注意すべきです。信条主義に立って神学を論じたりする時に起こしやすい誤りです。

□525 初めに聖書ありき

ただのおじさん - 2004/09/10 18:17 -

以下の文章は、他の掲示板で少し前に私が書き込んだ文章の一節ですが、どうやらここでの文脈でも必要な文章だと思うので書き込みます。

神学は信仰の結果であって、初めに神学ありきでないということです。しかし、インターネットでクリスチャンの発言を見ていて、残念ながらこのことを自覚されていない発言を見ることがあります。また逆に、体験を重視しすぎて、教理を軽視し、明らかに間違った、聖書信仰から離れた主張をするクリスチャンも見かけます。

私の体験から言えることは、聖書は読むほどに、人間の読み込みや、極端な主張を排除していくものであるということです。そして聖書の教えがいかにもバランスが取れているものか、人間がいかにもそのバランスを理解しづらいものなのかということです。

聖書を読むに当たっての理想は、聖書をストレートに読むことです。

□524 主のみこころであれば

けいじ - 2004/09/10 11:13 -

再建主義者などの人たちが誤解しているのは、切迫再臨信仰を持つと、「ただ待つだけ」というものですが、事実、ただ待つのではなく「任せる」信仰が養われます。

自分が今、主によって任されている務めをしっかりと行っていくなかで、いろいろ具体的な計画、方針、行動が生まれます。けれども、それら具体的な将来的方針は、主のみこころであれば、変更、あるいはなくなるかもしれない、となるのです。「あなたがお許しになるなら、これこれのことは行ないます。けれども、すべてはあなたのものです。」と祈れるのです。

聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう。」と言う人たち。あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。
(ヤコブの手紙4:13-15)

☐ **523** 整合性を極める必要はない

けいじ - 2004/09/10 09:23 -

下の投稿についての付記です。

下のような発言をすると、再建主義者からは、「貴方は、純粋な前説に立っていない。」と言われるでしょう。しかし、そんなこと、どうでも良いのです。神学上の整合性を考えなければいけないときもありますが、私たちが信じているのは神学ではなく、＜聖書＝神のみことば＞です。

「わたしは、すぐに来る」と言われているのだから、それを信じ、「善を行なうに熱心になりなさい」と勧められているのだから、それを行ないます。これだけ単純です。（むろん、その信仰を持つと希望と愛が心から溢れてきて、それが良い行いの原動力になりますから、整合性があります。）あまり整合性を気にすると、聖書の単純なメッセージと、そこにある力を見失う危険があります。

☐ **522** 切迫再臨は、将来のビジョンを阻害させない

けいじ - 2004/09/10 09:09 -

> 切迫再臨信仰からはこのようなビジョンは生まれにくいです。

> 切迫再臨信仰の教会で生まれ育ったクリスチャン2世は一応に、「自分たちが大人になるまでに再臨は来るのだろうか？自分たちは結婚も、就職もしないのだろうか？」と悩むことがあります。

私は切迫再臨信仰を持っているものですし、教会の人たちも同じです。けれども、ホームスクーリング運動に関わっている人たちは何人かいます。

改革派や再建主義の人たちの批判に、切迫再臨信仰は、将来的な設計や展望を阻害するというものを、しばしば聞きます。けれども、切迫再臨信仰を持っているからこそ、どんどん良い行いをして行こう、それによって、いつ主が来られても恥ずかしくないようにしておこう、という動機が働くのを、知りません。

だから、私も今日、主が戻ってくるかもしれない、とまじで信じていますが、教会学校や英語を教えている子供たちに、主を愛する有能なリーダーとして育てて欲しいという強い願いをもって、教えています。

テサロニケ人への手紙を見れば、「主がすぐに来られる」という強烈な信仰があったのと同時に、「愛による良い行い」で評判が良かったのです。両立する、いや、因果関係にさえなっています。

☐ **521** 教会の聖化は漸進的？

けいじ - 2004/09/10 09:02 -

> 教会の聖化が完成されるのは、キリスト再臨によって、キリスト者が一瞬のうちに栄光の体に変えられ、原罪から完全に解放され、キリストに似た者に完成されるときです。

分かりました、つまり「空中再臨」「携挙」のことですね。

質問を変えますが、教会やキリスト者の聖化は漸進的、あるいは進歩的なのでしょうか？言い換えれば、「より霊的」な状態というのはありえるのですか？

520 前千年期説論者の教育観

ただのおじさん - 2004/09/10 08:59 -

私（の教会）は、前千年期説の立場のグループに属していますが、以前、私の教会に属していたアメリカ人宣教師は、私たちのグループの中でもかなり強い前千期説の先生でしたが、子どもはホームスクールで育てていました。もっとも日本も米国も公教育が当てにならないからと言っていました。今では、私の教会の属するグループの教会員の子どもは、親が積極的にホームスクールです。これには創造論の問題も絡んでいます。6日間創造、6000年の歴史を肯定する（エリクソンの科学観を取らない）根本主義としては当然のことです。

[インターナショナル・チャペル・ミニストリーズ](#)

また、ここでも話に出たICM出版の母体となっている教会ICM（インターナショナル・チャペル・ミニストリーズ）は、小学校から大学までのミッションスクールを数年前京都に創設しました。

[京都インターナショナルユニバーシティ](#)

更に言えば、東京に在住のクリスチャンファミリーはもはや子どもを公教育に任せるべきではありません。それは反聖書的である可能性があります。その理由はここに集われる方なら言わずとも分かるでしょう。聖書はもともと親が子どもの教育に責任を持つべきであるという考え方であり、その典型は申命記にあります。ホームスクールの原点は聖書にあります。ですから根本主義者もホームスクールを支持するのです。前千年期説はただ再臨を待っているのだと考えるならば再建主義者と同じであります。

518 Re: 救済史上の三つの国家権力型

けいじ - 2004/09/10 08:57 -

三つの種類があるのは、その図式からもう理解しています。けれども、具体的に、キリスト前後（アダムの子孫以前は聖書以外知る由もないから）において、国家権力と一般の民との間にどんな違いが出てきたのでしょうか？

例えば、ローマ帝国が、キリスト十字架後どのように変わったのでしょうか？中国文明はどうでしょうか？その他の地域は？

517 間違った推論、によって構築された神学

JOG - 2004/09/10 06:31 -

せつり 摂理 摂理とは、万物の創造者である神の間断なき主権的活動のことであって、神は造られたすべてのものに対するいつくしみのゆえに（詩145：9）、全被造物を保持し（ヘブ1：3）、すべての出来事、状況、人間と御使いの行動を統治、支配し（参照創45：5-8）、自然界、道德界、精神界のすべてのことを御自身の目的達成のために導きかつ用いられること（エペ1：9-12）を意味する。

上記、いのちのことば社、「新聖書注解」より、

このように、「摂理」とは単に御使いを媒介にするだけに限定されるものではありません。

神様がコントロールされるのは、「すべての領域です」

また、悪魔と天使の区別無く、世界観が構築されているのはとても危険だと思います。

悪魔と天使の区別もできないのに、一体何を監視するのでしょうか？

神の摂理を天使の働きにのみ限定して理解して、全能の神の働きを小さく限定して理解して、一体どうするつもりなのですか？

□516 人間の責任

山谷 - 2004/09/10 00:12 -

わたしたちは、三項図式の世界観的パラダイムにおいては、同一のひとりの人間が「国民」であり「市民」であり「信者」であるわけです。

そうして、「国民」としての責任は、国家の公法に従うことです。

「市民」としての責任は、報道に携わる者は真実の追究を、学問に携わる者は真理の追究を、経済に携わる者は利益の追求を、政党政治に携わる者は国家権力の行使における一般的公正さの追求を、そのほか、宇宙論的な15の法領域に即した、それぞれの真理と価値を追求する責任があります。

「信者」としての責任は、キリストに結ばれて聖化のプロセスを歩み、その結果として隣人への愛の奉仕を行うことです。それと共に、キリスト者の世界的な連帯において、国家と社会の悪鬼化を監視し抑止する、という責任があります。そうして、キリストのからだなる教会が、その責任を果たすことによって、教会が携挙されるその日まで、国家と社会の悪鬼化は、必ず抑制され続けるのです。

なぜなら、国家も社会も教会も、キリストの頭首権的支配のもとで、摂理的に統治されているからです。

そうしますと、人間は「国民」「市民」「信者」という三重の責任を負っているわけで、けして、無責任でいることは、できないのです。

□513 聖化の完成と再臨

山谷 - 2004/09/09 23:54 -

>具体的にはどういうことですか？「携挙によって、教会の聖化が完成し、キリストの地上再臨によってキリストとともに地上を支配する」ということなのか、それとも、「教会が地上において聖化され、その地上での働きが完熟度に来た時点で、キリストが地上に再臨される」のどちらでしょうか？

教会の聖化が完成されるのは、キリスト再臨によって、キリスト者が一瞬のうちに栄光の体に変えられ、原罪から完全に解放され、キリストに似た者に完成されるときです。

もちろん、キリストの受肉・十字架・復活・昇天・聖霊傾注によって生み出された「教会」は、すでに聖化のプロセスを歩み始めているわけです。しかし、いまだ、聖化は完成されていません。それゆえ、<すでに・しかし・いまだ>の中間時の時制に規定されているわけです。

では、なぜ、<すでに・しかし・いまだ>の中間時が設定されているのかと言うと、それは、ユダヤ人がキリストにつまずくことによって（ゲネア）、福音が異邦人に向かって宣教されることとなり、そのようにして、すべての人が福音を聞いて救われ、聖化のプロセスに入って来ることを、神が望んでおられるからです。すなわち、「ある人々がおそいと思っているように、主は約束の実行（再臨）をおそくしておられるのではない。ただ、ひとりも滅びることがなく、すべての者が悔い改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられるのである」と、ペテロ後書3:9で言われている通りです。

教会の聖化が完成されず、教会がまだ聖化のプロセスにあるうちは、罪を犯すキリスト者を規制するため

に、教会戒規が必要とされ、また、社会の秩序と安寧の維持のために、国家権力が必要とされます。ですから、教会の聖化がキリスト再臨によって完成するまでは、教会戒規を執行する制度的教会（地上の教会）も、法による裁きを行う国家権力（地上の政府）も、存在し続けなければならないのです。

さて、キリストが再臨する以前の段階で、教会戒規と国家権力が廃止されるほどに、教会は十分に聖化されることが可能なのだろうか？

宗教改革時代の再洗礼派は、それが可能だと考えて、ミュンスター一揆によって、制度的教会と国家権力を廃止してしまいました。その結果、ミュンスターのキリスト者は誤った信仰と実行に走り、市は無法状態に陥ってしまいました。

再洗礼派の誤りは、＜恩恵・中間領域・自然＞あるいは＜恩恵・一般恩恵・自然＞という三項図式のパラダイムを、千年王国革命によって国家権力を打倒することにより、無理やり＜恩恵と自然＞という二項図式に改造してしまいさえすれば、あとは、自分たちはキリスト者として完全な恩恵を受けているのだから、＜恩恵と自然の調和＞は容易に実現できる、と勘違いしてしまったことなのです。

改革派神学では、この再洗礼派の誤りが「前千年期説」に特有のものだと誤解されてしまっているゆえに、改革派は「後千年期説」を採用するわけです。それぐらい、ミュンスター一揆は当時の宗教改革者にショックを与えたわけですね。

そうして、改革派神学は＜恩恵・一般恩恵・自然＞という三項図式のパラダイムを「安全保障システム」として堅持して来たわけです。ところが、再建主義は、中間領域と一般恩恵を否定することにより、改革派神学が忌み嫌って来たはずの再洗礼派の誤りに接近しつつあるのです。もちろん、「司法律法によって統治するのだから、無法状態には陥らない」と主張はしていますが。しかし、大量の公開処刑が行われることにならないのでしょうか？

わたしたちが行くべき道は、極端な前千年期説としての再洗礼派でもなく、極端な後千年期説としての再建主義でもありません。＜中間時＞という正しい時間と、＜中間領域＞という正しい空間によって規定された、＜救済史的な世界観のパラダイム＞あるいは＜聖化論的前千年期説＞であろうと考えます。

■511 救済史上の三つの国家権力型

[山谷](#) - 2004/09/09 23:33 -

>十字架による悪鬼的天使諸力が武装解除されたということで、かつ、国家権力はこれら天使諸力に由来するとなれば、旧約における経綸と、現経綸において、その国家権力に差異が出てくる、ということでしょうか？

国家権力は、救済史において、三つの種類があると考えられます。

第一、 アダム の 墮罪後の、天使的諸力による、摂理的な一般恩恵としての国家権力。（楽園追放から大洪水までの経綸）

創世記で、命の木への道を守る「ケルビムと剣」という表現で暗示されているものです。

第二、 洪水後の、悪鬼的天使的諸力による、摂理的な一般恩恵としての国家権力。（バベル離散からキリスト初臨までの経綸）

天使的諸力が自分の職務を放棄して悪鬼化したために（ユダ書）、地が無法状態となって大洪水を招きました。洪水後、神は悪鬼的天使的諸力の数に従って地表を分割し（申命記）、バベルから散らされた人類は、それぞれの主権領域に入って、諸国語・諸民族・諸文化・諸宗教・諸政府・諸国家が、形成されました。主権領域を支配する悪鬼的天使的諸力の具体例として、ギリシャの天使長とペルシャの天使長がダニエル書に出てきます。その悪鬼的性格は、詩編第2編で「かせを脱ごうとする」という表現で暗示されています。詩編第2編では同時に、悪鬼的天使的諸力を滅ぼして地上を直接統治する「キリスト再臨」も、暗示されています。

第三、キリスト高挙後の、武装解除された悪鬼的天使的諸力による、摂理的な一般恩恵としての国家権力。（キリスト初臨からキリスト再臨までの経緯、つまり、現経緯）

悪鬼的天使的諸力が、キリストの十字架と復活によって打破され、武装解除されたことについては、コロサイ書で述べられています。悪鬼的天使的諸力が、キリストの頭首権的支配の下に置かれたことについては、エフェソ書で次のように述べられています。

「神はその力をキリストのうちに働かせて、彼を死人の中かからよみがえらせ、天上においてご自分の右に座せしめ、彼を、すべての支配、権威、権力、権勢の上におき、また、この世ばかりでなくきたるべき世においても唱えられる、あらゆる名の上におかれたのである。そして、万物をキリストの足の下に従わせ、彼を万物の上にかしらとして教会に与えられた。この教会はキリストのからだであって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ち満ちているものに、ほかならない」（1:20-23）

なお、「摂理的な」という用語は、神が天使的諸力を仲介（intermediate）として使役して宇宙を統治している、という意味です。組織神学の一部門である摂理論では、天使論と国家論が取り扱われ、天使論の下位部門が悪鬼論となっています。

「一般恩恵」という用語の意味は、墮落した人類が、その墮落した性質にもかかわらず自滅することがないように、神が愛の配慮によって与えた「社会の秩序と安寧の維持を可能にする恩恵」です。しかし、この恩恵は、社会の秩序と安寧の維持を可能にするものの、墮落した人間を救うことまではしませんから、救いの恩恵である「特殊恩恵」とは明確に区別されます。

「摂理論的な一般恩恵」という場合、それは、天使的媒介を通して提供される一般恩恵を指しており、天使以外の被造物（自然）としての「創造論的な一般恩恵」や、聖霊による啓発としての「聖霊論的な一般恩恵」とは区別されます。

救済史は、アダムの墮罪をもって開始され、キリスト再臨をもって完了します。アダムの墮罪からキリストの再臨までの間に、上記の三つの国家権力の型態が存在するわけです。キリストが再臨すると、「自然と恩恵の分離」が解消されてしまいますので、「緩衝地帯としての中間領域」は不要になり、悪鬼的天使的諸力は滅ぼされてしまいます。このことは、コリント前書に次のように述べられています。

「主の来臨に際して・・・キリストはすべての君たち、すべての権威と権力とを打ち滅ぼして、国を父なる神に渡されるのである」（15:24）

■510 非再建主義による運動

JOG - 2004/09/09 23:20 -

現在、出発点において、再建主義から大きな影響を受け、また、ある意味においては共通するビジョンをもち、しかも、再建主義とは決定的に違いを主張し、あるときには厳しく再建主義と対決する運動に「ホーム・スクール、チャーチ・スクール運動」がありますね。

子供たちを育てる責任は親にあり、教会にある。また、何世代もの長期的なビジョンをもって教育と弟子訓練を行い、世界に派遣してゆくビジョンです。

切迫再臨信仰からはこのようなビジョンは生まれにくいです。切迫再臨信仰の教会で生まれ育ったクリスチャン2世は一応に、「自分たちが大人になるまでに再臨は来るのだろうか？自分たちは結婚も、就職もしないのだろうか？」と悩むことがあります。

一方、「ホーム・スクール、チャーチ・スクール運動」においては「将来、世界のリーダーになるんだ。」という明確なビジョンを持って育てられます。

神様が用いようとされるのは、「人」です。決して「悪霊」ではありません。

神様は決して「悪霊」を中間管理職なんかにもちいられません。

509 個人、教会と、国家

JOG - 2004/09/09 23:04 -

>個人的・教会レベルの霊の戦いにおいて、十字架による勝利を約束されたという意味で「武装解除」を理解していましたが、これを国家権力にまで解釈を広げることができる

個人や家族、小さなグループは社会の縮図であり、それらが集まって国家が形成されてゆきます。個人や、教会と国家を全く別次元のものとして考えるところに間違いがあると思います。

私が主張した武装解除の説明は何も個人や教会にのみ限定されるものではありません。個人であれ、教会であれ、国家であれ、サタンが人間を攻撃できる理由はただひとつ、人間の罪です。罪を足場にしてサタンは攻撃をすることができるのです。

それがただひとつの真理です。

山谷さんのいう武装解除は「罪」の問題について何もふれていません。

ヒトラーのことをたとえると、彼がどのような家庭で育ったか、どのような子供だったかを学ぶと、全世界を恐怖に陥れた事件の根が、家庭にあったことに気が付きます。

サタンは家庭を破壊しようとしています。家庭が破壊されると傷ついた被害者の子供たちが、やがて大人になって加害者になってゆきます。家庭を破壊できると、国家を破壊することができるからです。

現在、未成年者の凶悪犯罪の急増によって少年法が改正されつつあります。法律さえもどんどんと変わっていくのです。

個人レベルと国家レベルの関係を見失わないでください。

ましてや、まことの神を信じて、祈り、仕える、一人のクリスチャンとして、個人レベル、教会レベルのみならず、国家レベルにも影響をなすことができるという希望をもってください。

508 悪霊の定義

JOG - 2004/09/09 22:52 -

ヘンリー・シーセンの「組織神学」によると、天使の種類は「良い天使」と「悪い天使」の二種類に分類されています。それぞれに様々な分類や、組織があります。

エペソ1：21「支配、権威、権力、権勢」も

コロサイ2：15「すべての支配と権威」も

悪い天使に分類されています。

「彼らの主な役割はその指導者であるサタンが良い天使たちや神の民、また神の目的に逆らって戦うにあたり、彼を援助することである。」と書かれています。

一方、ダニエル書に出てくる天使長は良い天使のリーダーとして描かれています。

ヘンリー・シーセンの組織神学を古典的な時代遅れと扱わないでください。

何か耳に新しい、変わった教え、難しい神学をありがたがって受け入れないでください。そんな神学なんて一部のその世界の人にしか通用しません。

聖書がはっきりと語っていないことを、人間の推論でごちゃごちゃと混ぜ繰り返すことは危険です。

平凡な、クリスチャンなら誰でも知っているような、また、教派をこえて認められる、聖書がはっきりと語っていることに真理があります。真理は私たちを自由にし、平安にします。

☐507 夢も希望も、ビジョンも人間から奪う教えだ

JOG - 2004/09/09 22:28 -

> (2) であると、キリスト者が地上を直接統治するというのですから、再建主義者にならない限り、受け入れることが出来ません。

それは偏見です。別に再建主義にならなくても、普通に考えて、信仰に燃えて、御言葉と御霊に満ち溢れた政治家たちが現れて、知恵をもって、国家や世界をリードしてくれたらなんと幸いでしょう。クリスチャンならだれでもそのことを喜ぶでしょう？それとも靖国参拝している指導者のほうがいいんですか？確かに難しいことだけど、初めから無理と決めてかかったんじゃ、夢も希望もないじゃないですか？

再建主義が正しいとは思いませんが、このような視点が今のクリスチャンに欠けていることを指し示しているのではないのでしょうか？

> (3) ですと、罪に支配された墮落した人間が地上を統治して社会の秩序と安寧を維持する、というのですから、全的墮落の教理を否定するのでもない限り、妥当性を持ちえません。

これはおどろいた、「一般恩恵」という再建主義との論争の中で山谷さんが繰り返し主張した、主張が上記の論理がおかしいことを証明してくれると思います。

全的墮落した人間に、救いにいたらないが、社会の秩序と安寧を維持するために、一般恩恵は与えられているのではないですか？

また、2) と 3) は教会やクリスチャンの聖化や成長のプロセスによって明確に分類できるものではなく、混在するものでしょう。

だからと言って、悪霊が国家主権を統治するなんて、まったくばかげています。

まさに人間の責任放棄、夢も希望も、ビジョンも人間から奪う教えだ。

☐506 質問

けいじ - 2004/09/09 11:43 -

二つあります。

> このキリストが、王として御座から地上を支配しておられるのが、キリストの頭首権的支配・王権的支配です。そうしますと、悪鬼的天使的諸力は、キリストに従属する限りにおいて、キリストから委任された権力を用いて、地上を統治することが出来る、ということになります。

十字架による悪鬼的天使諸力が武装解除されたということで、かつ、国家権力はこれら天使諸力に由来するとなれば、旧約における経綸と、現経綸において、その国家権力に差異が出てくる、ということでしょうか？

創世記9章に、「人のいのちを取る者は、人によって血が流される」とのころから、国家権力が暗示されているように思えるので、私は今まで、JOGさんが言及されていたように、個人的・教会レベルの霊の戦いにおいて、十字架による勝利を約束されたという意味で「武装解除」を理解していましたが、これを国家権力にまで解釈を広げることができる、根拠は何ですか？

> しかも、それには期限が設けられており、キリスト再臨によって人類の聖化が完成して、人類がキリストと共に地上を支配することが可能な状態になったならば、・・・

具体的にはどうということですか？「携挙によって、教会の聖化が完成し、キリストの地上再臨によってキリストとともに地上を支配する」ということなのか、それとも、「教会が地上において聖化され、その地上での働きが完熟度に来た時点で、キリストが地上に再臨される」のどちらでしょうか？

...

山谷さまの図式をじっくり見ますと、読み方によっては、単純に千年期前再臨説の世界の見方ではなく、再建主義的な神の国建設の見方も混ざっているように見えてきたのですが・・・、教えてください。

■505 悪霊の定義（3）

山谷 - 2004/09/09 00:40 -

では、十字架によって打破された悪鬼的天使的諸力が、どのように、中間時における国家権力を担当するのでしょうか？

1. 悪鬼的天使的諸力は、キリストの十字架によって打破され、武装解除され、キリスト頭首権に対して、従属させられている。つまり、ファン・ルーラーの用語で言うところの「キリスト化された」存在、ローマ書で言うところの「神のしもべとして人間に益を与える」存在となっているのです。
2. 悪鬼的天使的諸力は、アダムの墮罪以来、権益として保持してきた「地の支配権」（ドミニオン）を、キリストの十字架の勝利によって、キリストに奪い返されてしまいました。それゆえ、悪鬼的天使的諸力は、地上と人類に対する支配権を、もはや、有していないのです。地上の支配権は、いまや、ダビデの末・人の子として王座に着かれた「王キリスト」の手中にあるのです。このキリストが、王として御座から地上を支配しておられるのが、キリストの頭首権の支配・王権的支配です。そうしますと、悪鬼的天使的諸力は、キリストに従属する限りにおいて、キリストから委任された権力を用いて、地上を統治することが出来る、ということになります。しかも、それには期限が設けられており、キリスト再臨によって人類の聖化が完成して、人類がキリストと共に地上を支配することが可能な状態になったならば、悪鬼的天使的諸力による統治の仲介は不要ということになりますから、再臨によって悪鬼的天使的諸力は、滅ばされてしまうことになるのです。
3. 悪鬼的天使的諸力は、十字架によって打破されて、武装解除され、また、キリスト再臨に際して滅ぼされることが、すでに決定されてしまっています。そうして、宇宙的な勝利者であるキリストが、打破された悪鬼的天使的諸力を使役して、地上のみならず、万物を支配しておられる、という図式が成り立つこととなります。
しかし、武装解除されたとは言え、天使は自由意志を与えられた理性的被造物であるわけですから、なおも、神に反抗することがあり得るわけです。その反抗しようとする潜在的な悪鬼的傾向を、テサロニケ後書は、「不法の秘密の力」と呼んでいるのでありましょう。しかし、それを抑える別の力が地上で活動しているゆえに、不法の秘密の力は現れることが出来ないでいる、とも、テサロニケ後書は言っています。この「抑制する力」をどう釈義するかは、通常は、ローマ帝国の官憲と考えるか、キリスト教会と考えるか、二つしかないわけです。
前者を採用すると、悪鬼的天使的勢力が反抗するのを、別の悪鬼的天使的勢力が抑制する、という図式になります。これは、おそらく、国家の絶対主権としての領域主権（位・主権・支配・権威）の悪鬼化を抑制する、社会の分散主権としての領域主権（ストイケイア）という図式、つまり、「国家と社会の組み合わせ」による抑制でしょう。
後者を採用すると、悪鬼的天使的勢力が反抗するのを、キリスト教会が抑制する、という図式になります。これが、「国家と教会の組み合わせ」による抑制でしょう。

おそらくは、国家と教会だけの組み合わせでも、国家と社会だけの組み合わせでも、悪鬼化の抑制は十分出来ないのであろうと思います。

そこで、国家の悪鬼化をまず社会が抑制し、国家と社会の一体化による悪鬼化を教会が抑制する、というような、図式。そういう図式が、本当に必要だとキリスト者が自覚したきっかけが、第二次世界大戦であったのだらうと思います。

■503 悪霊の定義（2）

山谷 - 2004/09/09 00:14 -

では、悪鬼的天使的諸力と見られる位、主権、支配、権威、ストイケイアは、十字架で打破されて、滅亡し、存在することを止めてしまったのだろうか？

しかし、コリント書を見ると、キリストが再臨するときに、その再臨の輝きによって、位、主権、支配、権威が滅ぼされる、と言っています。

そこで、これらの悪鬼的天使的諸力は、＜十字架によってすでに打破されたが・しかし・いまだ滅ぼされていない＞という、＜すでに・しかし・いまだ＞の「中間時の時制」に規定されていることになります。

この状態を表現する言葉が、コロサイ書の「武装解除された」という表現なのであると思います。

では、武装解除された悪鬼的天使的諸力は、初臨と再臨の間の＜メシア的中間時＞において、いったい、何をしているのだろうか？

まず、中間時においては、キリストのからだなる教会の聖化が進行中であるものの、いまだ、その聖化が完成されていないために、聖化のプロセスから脱落する人々が、出てきてしまいます。また、世界宣教が、いまだ、全人類に到達していないために、聖化のプロセスにまだ入っていない人々が、多数存在しています。

この状態ですと、人間が、その罪のために、自滅してしまう可能性があります。そこで、社会の秩序と安寧を維持し、墮落した人間が、その墮落した状態にあるにもかかわらず、自滅することがないように保障する「国家権力」が必要になるのです。

では、中間時における国家権力は、だれが担うのであろうか？

後期ユダヤ教と新約聖書神学は、悪鬼的天使的諸力が、国家権力を担っていた、と見ているわけです。そうして、中間時においても、国家権力の存在が、必要とされるわけです。そうすると、中間時における国家権力の存在様式の選択肢としては（１）キリストが地上を直接統治するか、（２）キリスト者が地上を統治するか、（３）墮落した人間が地上を統治するか、（４）悪鬼的天使的諸力が従前通り地上を統治するか。

選択肢は、論理的に考えて、この四つしかないわけです。

そうしますと、（１）であつたら、キリストの地上再臨を意味することになってしまいますから、フルブレテリストになって、中間時という時制を捨て去るのでない限り、妥当性を持ちえません。

（２）であると、キリスト者が地上を直接統治するというのですから、再建主義者にならない限り、受け入れることが出来ません。（３）ですと、罪に支配された墮落した人間が地上を統治して社会の秩序と安寧を維持する、というのですから、全的墮落の教理を否定するのでない限り、妥当性を持ちえません。

そうすると、残った選択肢が、（４）の、悪鬼的天使的諸力が、引き続き中間時において、国家権力を担う、ということになるのです。

■502 悪霊の定義（１）

[山谷](#) - 2004/09/09 00:13 -

新約聖書神学や後期ユダヤ教において、領域主権を担っていると考えられているのは、天使的諸力です。

新約聖書では、位、主権、支配、権威、ストイケイア、という名前と呼ばれています。ダニエル書では、ペルシャの天使長、ギリシャの天使長、と呼ばれています。

コロサイ書を見ると、これらの天使的諸力を創造したのは、キリストです。キリストが、御自分に仕えさせる「しもべ」として、キリスト御自らが、これらの天使的諸力を創造なさいました。

そうして、コロサイ書は、キリストが十字架によって、位、主権、支配、権威を打破した、と宣言しています。

もし、天使的諸力が、すべて神に対して従順であつたのなら、十字架で打破されなければならない必然性

が存在しません。

それゆえ、十字架に打破されたというコロサイ書の宣言から推論すると、これらの天使的諸力は、悪鬼の性格を有するものであるのだろう、ということになります。

■501 悪霊のせいにはかりしないで

JOG - 2004/09/08 22:35 -

>その意味では、「政治を支配しているのはキリストである」のです。これが、キリストの王権的支配です。

だから、何で、キリストの王権的支配の下にあるものが、そむくことができるんですか？

キリストの王権的支配を担うのは悪霊ではなく、人間のはずです。
悪霊が、キリストに従って善をなしたり、翻って悪鬼化したりしません。

悪霊は、悪霊、はじめからうそつきです。ヨハネ8：44

悪霊は主が許可された範囲でしか活動できないので、主に従っているように見えるかもしれませんが、それはただ、悪霊の限界を示していることと、主の絶対的な主権をあらわしているだけです。

サタンはルカ4：6で権力は自分にまかされており、自分が自由に人に与えることができるとうそぶいている。それで、人間に自分を礼拝させようとしている。まさに詐欺師の親玉だ。

実際は、アダムに主が与えようとされた被造物を支配し、治める権威を、サタンがアダムに罪を犯させ、自分の影響下にしたにすぎない。

>なぜなら、国家権力を監視し、預言者の声を挙げ、抵抗権を行使して、国家の悪鬼化を抑制するよう使命を与えられている

悪魔に対して預言者の声を挙げるんですか？そんな馬鹿な？
預言の声は人間に対して語られるんでしょう。
人間が悔い改めるなら、赦しと救いが与えられるんでしょう？

悪魔、サタン、悪霊どもは最初から、最後まで、偽りと悪をなしています。

国家権力は確かにその影響を強く受けています。しかし、なぜ、影響を受けるんですか？それは人間に罪があるからでしょう？罪を足がかりとして、悪魔が影響力を発揮しているんでしょう？

主は、サタンではなく、パロに、ネブカデネザルに、クロスに、
それぞれの国家を治める力を与え、また、時がくれば滅ぼし、
ご自身の栄光と力を証しされているではありませんか？

ヒットラーとナチスの登場に関して、確かに悪霊の影響が背後にはあることでしょう。しかし、責任はあくまでもヒットラーとその支持者、また、彼に独裁的な力を与えてしまった国民一人一人だと思うのです。
悪霊のせいにしてしまうのは、人間の責任放棄です。

日本にも同じ事がいえます。

たとえば、今年の参議院選挙のためにどれだけ祈りましたか？
どこのどの政党に投票しましたか？
アメリカの専制攻撃主義に手放しで賛成する小泉政権に、クリスチャンとしてどのような声をあげますか？

たしかに911の惨事は理不尽です。テロリストは裁かれなければならないでしょう。

しかし、だからと言って専制攻撃によって流された、無関係の市民の人々の血の責任は誰が負うのですか？

悪霊のせいにはばかりしないで、一人一人のクリスチャンが目覚まして、自分の責任として受け止めるべきです。

>国家の公法が命じることは、それがどのような法であれ、わたしたちは服従する義務を持っているのです。

服従することなど、わざわざ論じなくても当然のことです。信者・不信者に関わらず、みんな服従しているじゃないですか？

憲法にしる、法律にしる、行政にしる、単に服従するということではなくて、もっと積極的に創造してゆく、創りあげて行く、主の命と、霊によって、主の栄光があらわされるようにという積極性は無いんですか？

服従したり、警告したりといった、受身的な役割だけではなく、もっと、積極的に国づくり、街づくり、地域社会や、家族、小さな単位から、国際的な面にいたるまで、自らが主体であるという意識が必要だと思います。

キリストが世界を支配するのに、悪霊を中間管理職に用いてるなんてこと、とうてい信じる事が出来ません。

主は人間を用いられるということを私は信じています。

■500 重要な点 (4)

[山谷](#) - 2004/09/08 00:13 -

さて、下記の<国民としての責任>と<市民としての責任>だけで、悪鬼的天使的勢力によるキリスト頭首権の濫用を、十分に阻止できなかった、というのが、第二次世界大戦のドイツにおける教訓であったわけです。というのは、国家と社会が一体化して悪鬼化するという<準バビロンの事態>に直面したナチス統治下のドイツにおいては、普通選挙・議会制民主主義・首長選挙制・行政審査制・裁判官審査制・政党政治といった「悪鬼化抑止システム」が機能しなかったからです。

そこで、第二次世界大戦後、国家とも社会とも異なる<第三の法領域>としての「教会」が、世界的なキリスト者の連帯による監視によって、国家と社会の悪鬼化を抑止すべきであるという、「世界教会協議会」や「第二バチカン公会議」「世界福音同盟」などの動きが、<反省>として、起きてきたわけです。

この場合には、キリストのからだなる教会に従属する主体としての「信者」であるわたしたちが、世界のキリスト者と連帯し、世界的なキリストの教会として、共にとりなしの祈りをささげ、国家権力と社会の悪鬼化を監視し、キリスト者の抵抗権を行使し、預言者的声を挙げ、また、国家と国家との対立を調停し、国家と社会との対立を調停する、など、和平プロセスの仲介を行うのです。

世界の地域紛争や国家間紛争、部族間対立、内戦などに、世界教会協議会もバチカンも、世界及び現地のルートを通じて、和平調停を行っています。最近では、イラクのシーア派の聖地ナジャフに立てこもったサドル師とその一派が、バチカンに調停の仲介を求め、バチカンもそれに応じる用意があると表明した、という例があります。

このようにして、わたしたちは、国家の絶対主権に従属する主体としての「国民としての責任」、社会の分散主権に従属する主体としての「市民としての責任」、キリストのからだなる教会に従属する主体としての「信者としての責任」という、三重の責任を負っていることになります。そうしてこの三種類の責任はすべて、頭首権者であるキリストに対する責任であるわけです。

498 重要な点 (3)[山谷](#) - 2004/09/08 00:12 -

社会の分散主権としての領域主権においては、人間は、従属する主体としての「市民」です。ですから、それぞれの法領域において、真理・真実・善・美とされることがらについて、わたしたちは服従する義務を持っているのです。

たとえば、学問の領域において真理を追究し・報道の領域において真実を追究し・芸術の領域において美を追求し・スポーツの領域において健康を追及し・政治の領域において一般的公正さを追求する、といった責任です。

この、社会の分散主権に対して服従する義務は、社会に対する義務ではなく、キリストに対する義務であるのです。なぜなら、社会の分散主権は、キリストの頭首権に由来するものだからです。

ところで、「政治の領域において一般的公正さを追求する」という、わたしたちの責任は、国家の絶対主権と社会の分散主権が隣接する場所において、国家の側ではなく、むしろ、社会の分散主権に寄った地点に存在しているのではないかと考えることができます。

というのは、「分裂した教会」が、国家の悪鬼化を抑止する責任を十分に果たせなくなったために、教会に代わり「社会」と「市民」が国家の悪鬼化の抑制のつとめを代行するようになり、その結果として、国家権力を制限するブレーキとしての〈国家と市民の間の政治契約としての憲法〉が制定されることになったからです。

現代諸国家の憲法は、信教・言論・集会・出版・結社・学問の自由など、市民的な諸自由を保障すると共に、普通選挙・議会制民主主義・首長選挙制・行政審査制・裁判官審査制・政党政治などによって、「社会」あるいは「市民」が、国家権力を制限する、というシステムになっているのです。

この精緻なシステムは、法学では「統治システム」としてひとまとめに扱われるのであらうと思いますが、三項図式の世界理解にあてはめた場合は、上記のシステムはむしろ、国家権力を抑制するために、〈社会の分散主権としての領域主権〉のカテゴリー内に位置していると考えられるのです。

そうしますと、人間は、従属する主体としての「国民」として、「国家の公法をすべて遵守する責任」を、国家に対して負っています。そうして、その同じ人間が、従属する主体としての「市民」として、「政治の一般的公正さを追求する責任」を、社会に対して負っているのです。

それゆえ、現代の諸国家の人間は、法を遵守しつつも、市民としてあらゆる市民的自由を享受し、それら市民的自由を防衛し・かつ・政治の一般的公正さを確保するために、普通選挙・議会制民主主義・首長選挙制・行政審査制・裁判官審査制・政党政治を通して、行動する責任を負っているのです。

497 重要な点 (2)[山谷](#) - 2004/09/07 23:09 -

>また、国家権力の本質が超自然的な天使的諸力だとしてしまうことは、人間の神様から与えられた責任をないがしろにしてしまわないですか？

決して、責任をないがしろにしてよいではありません。

むしろ、積極的に責任を、果たさなければならないのです。

国家の絶対主権としての領域主権においては、人間は、従属する主体としての「国民」です。ですから、国家の公法が命じることは、それがどのような法であれ、わたしたちは服従する義務を持っているのです。

この、国家の絶対主権に対して服従する義務は、国家に対する義務ではなく、キリストに対する義務であるのです。なぜなら、国家の絶対主権は、キリストの頭首権に由来するものだからです。

だからこそ、国家権力が、キリスト者の良心に反する命令を行う場合には、キリスト者は抵抗権を行使し、非暴力不服従を貫くことが出来るのです。なぜなら、国家権力がキリストの頭首権を濫用する場合には、キリスト者である国民は、その濫用されている点に関してのみ、国家への服従の義務を解かれるからです。

それで、きちんと納税もし、道路法規も守り、官憲の命令に服従しつつも、良心的兵役拒否を貫く。あるいは、きちんと納税もし、道路法規も守り、官憲の命令に服従し、兵役の義務を果たしつつも、神社参拝を拒否する。というような行動が、＜キリスト者としてまったく矛盾しない行動＞として可能になるのです。

□495 重要な点

山谷 - 2004/09/07 22:02 -

>それとも結局は政治は悪霊が支配しているから、政治のことなど考えるだけ時間のむだでしょうか？

そうではないのです。

諸国家・諸政府・諸文化・諸民族・諸言語・諸宗教といった、国家の絶対主権としての領域主権も、社会の分散主権としての領域主権も、共に、キリストが王座から支配しているのです。

その意味では、「政治を支配しているのはキリストである」のです。
これが、キリストの王権的支配です。

新約聖書は、異教国家すら、キリストの王権的支配の下にある、と観ています。それゆえに、ローマ書13章の「中間倫理」を、キリスト者は命じられているわけです。

しかし、キリストの王権的支配は、無媒介的な直接支配ではなくて、十字架によって打破された悪鬼的天使的勢力を「キリストのしもべ」として使役して、「媒介的な支配」を行っているのです。

これが、中間時の中間領域です。

このような世界観から出てくる生き方は、けして、「政治は悪霊が支配しているから絶望するしかない」というような悲観論ではなく、「政治はキリストが支配しておられるのだから希望がある」という楽観論なのです。

国家権力が、キリストの頭首権に由来する権威を濫用することがあるとしても、なお、わたしたちは、希望を持つことが出来るのです。

なぜなら、国家権力を監視し、預言者的声を挙げ、抵抗権を行使して、国家の悪鬼化を抑制するよう使命を与えられている「教会」は、＜地獄の門に打ち勝つ権威＞を神から授けられているゆえに、必ず国家の悪鬼化の抑止に成功し、逸脱した国家を、再び、キリストの王権的支配の中に連れ戻すことが出来るからです。

もちろん、この「連れ戻す」という意味は、旧約聖書の司法律法に連れ戻すということではなく、神定法としての自然法・政治契約としての憲法・人間の尊厳に由来する人権と人道・自然権に由来する国際法へと、連れ戻す、ということなのです。

□493 ありがとうございます

けいじ - 2004/09/07 08:56 -

ただのおじさん、

日本語訳のを、いのちのことば社のサイトで探しましたが、なぜか書籍目録に出てきませんね。絶版か、買取になったのでしょうか？

けれども、Amazon.co.jpで、彼の本を入手することができるので、時間が出来たときにでも購入してみたいと思います。

<http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/search-handle-url/index=books-us&field-author=Frame.%20John%20M./250-8491964-5006662>

☐492 けいじさんへ

ただのおじさん - 2004/09/06 23:35 -

日本語で出ているのは、

「キリスト教弁証学入門 ～神の栄光のために～」 (ジョン・M・フレーム著) (いのちのことば社発売)

だけであり、この本は、

Apologetics to the Glory of God (1994)

の翻訳です。

ヴァンティル師の思想の分析と、自らの思想との対比をしているのが、

Cornelius Van Til: An Analysis of his Thought (1995)

日本語では、コルネリウス・ヴァンティル～その思想の分析～、という訳になるそうですが邦訳はないようです。ヴァンティル師の生誕100年を記念して出された本です。

フレーム師の主著は、

The Doctrine of the Knowledge of God (1987)

であるそうです。

☐491 ネット上にもありました

けいじ - 2004/09/06 22:39 -

ジョン・M・フレーム師の記事が、下のリンク先にもありました。これから読んでみたいと思います。

<http://www.vantil.info/byauthor.html#Frame>

☐490 ジョン・M・フレーム師

けいじ - 2004/09/06 22:27 -

ただのおじさん

ジョン・フレーム師のどの書物が、一番お勧めですか？

Van Til, the Theologian (1976)

The Doctrine of the Knowledge of God (1987)

Medical Ethics (1988)

Perspectives on the Word of God (1990)

Evangelical Reunion (1991)

Apologetics to the Glory of God (1994)

Cornelius Van Til: An Analysis of his Thought (1995)

Worship in Spirit and Truth (1996)

Contemporary Music: a Biblical Defense (1997)

<http://www.rts.edu/info/faculty02.cfm?FacId=19>

☐489 けいじさん、ありがとう

JOG - 2004/09/06 17:23 -

説明不足をすみませんでした。
けいじさんのおかげで本を読みたくくなりました。

☐488 結論

ただのおじさん - 2004/09/06 12:25 -

再建主義に対してはやはり、

ジョン・M・フレーム師、

か、

アルバート・M・ウォルターズ

あたりの著作を読めば、わざわざ再建主義にしなくても、前提主義は成り立つし。キリスト者の世界観も成立するというのが結論となるでしょう。
ただし、カトリックを持ち出した時点で再建主義には何の反論にもならなくなることは間違いありません。再建主義のカトリック観を見れば自明で分かることであります。

☐487 本の内容はきわめて基本的

けいじ - 2004/09/06 07:50 -

>そして「必要以上に他教派に対して異端宣告をする。」＝「自分たちの信仰こそが唯一の正統派」と言うことに関して、再建主義と同じなにかを感じまして、この掲示板に投稿した次第です。

本書は、ペンテコステの教会のことも、異言や他の聖霊の賜物などについても触れられません。「信仰による義」「神とキリストのみへの礼拝」「聖書の権威」など、新しくクリスチャンになったばかりの人がならう教理だけです。これらの教理に逸脱しているので、カトリックに異教的、異端的要素が多分に含まれている、というのが本書の立場です。

JOGさんの最初の投稿だけ読めば、だれか反論しなければ、カトリックの正当化のために本書の信憑性を引き落とす巧妙な方法とも、誤解されなねないものでした。異端宣告などの問題提起そのものの意味は分かりますが、もっと説明していただきたかったです。

☐486 ねずみと生ごみの関係

JOG - 2004/09/06 06:23 -

>この議論は、いまだ決着がついていません。

つまり、正しいかもしれないし、
間違っているかもしれないということですよね。

また、信仰においては、使徒信条やニケア信条などで表現される内容と比べると、中心的でない、枝葉的な内容ですよね。つまり、どちらを信じようと、異端ではなく、クリスチャンであることには変わらないわけですよね。

山谷さんが博識で、勉強熱心なのは尊敬に値します。

しかし、もし良かったらもう少し、神学的に素人でもわかるようにレベルを下げていただいて、472の質問に答えていただけませんか？

また、国家権力の本質が超自然的な天使的諸力だとしてしまうことは、人間の神様から与えられた責任をないがしろにしてしまわないですか？

すなわち、責任を悪霊のせいにして、人間の選択や罪に直面することが弱くなりませんか？

私はニール・アンダーソンの著書を愛読しています。
悪霊の働きについて様々と述べられていますが、
悪霊を「ねずみ」に、罪を「生ごみ」にたとえています。

つまり「生ごみ」がなければ「ねずみ」は来ないというわけです。

だから「ねずみ」を追い払おうとするのではなく、「生ごみ」を処理することを勧めています。「生ごみ」がきれいに掃除されてなくなれば、自然とねずみは住めないと。

「生ごみ」を処理する方法は、人間の努力では無く、ただイエスキリストの十字架の赦しの力です。そこで得られるのは悪霊に対する、完全な勝利であり、まさに悪霊は何も出来ない、何の武器も持っていない武装解除された状態と同じです。

「ねずみ」は確かに様々な影響を与えているとは思いますが、結局罪を犯すのは「生ごみ」を抱えた人間なのでは？

私は、再建主義は巧妙に人を「律法主義的信仰」に導いてしまうのではないかと危惧していますが、「律法主義的信仰」に陥らないように注意しながら学ぶと、政治に無関心なクリスチャンに健全な政治への関心をむけさせる役割があるのではないかと思います。

再建主義にならなくとも、クリスチャンはもう少し、政治に関する関心を持ってもよいんじゃないでしょうか？

それとも結局は政治は悪霊が支配しているから、政治のことなど考えるだけ時間のむだでしょうか？

485 国家権力の悪鬼化について

[山谷](#) - 2004/09/06 01:11 -

国家権力の本質は、超自然的な天使的諸力である、とする世界観的パラダイムは、後期ユダヤ教において顕著に見られるものです。

リベラルな神学者は、後期ユダヤ教の影響を受けて成立した申命記やダニエル書に、＜国家権力である天使的諸力＞という概念が見られる、と言います。

しかし、わたしは、ファンダメンタリストですので、＜国家権力である天使的諸力＞という概念は、後期ユダヤ教において初めて成立した概念ではなく、聖書啓示に本来的な概念である、と受け取っています。

国家権力の本質を悪鬼的天使的諸力であると見る新約聖書神学が注目されるようになったのは、1930年にドイツのマールブルク大学のハインリッヒ・シュリーアが『新約聖書における権威と勢力』という論文を書いたことによります。ドイツの神学者、ギュンター・デーンも同様の視点から論文を書きました。

それらから影響を受けたカール・バルトが『義認と法』という論文を書き、この論文は、ナチスに対する抵抗活動を行っていたドイツ告白教会にとって、＜キリスト者の抵抗権の行使のための神学的基礎付け＞となりました。

ナチスが、ドイツのキリスト者に対して、憲法に対する服従の誓約に代り、総統に対する服従の誓約を行うよう要求し、また、州教会の公会議（シノッド）が州教会監督を任命するのに代わり、ナチスの任命する帝国教会総監督が州教会監督を任命するよう要求したときに、ドイツ告白教会のキリスト者は、事態を

<国家権力の悪鬼化>と認識して、<非暴力不服従>による抵抗を行ったのです。これは、シュリーア、デー、バルトの神学的基礎付け作業の、ひとつの成果でありましょう。

この抵抗権の行使のため、告白教会からは、多くの殉教者が出ました。しかし、ナチスは打倒され、第二次世界大戦後、<国家の悪鬼化>への深い反省に立った、新生ドイツが建国されたわけです。

<国家権力である天使的諸力>という新約聖書神学の概念は、第二次世界大戦後、オスカー・クルマンやヘンドリクス・ベルコフといった神学者によって継承され、『キリストと時』『キリストと諸権力』といった古典的論文が著されました。

これに対し、ゲルハルト・キッテルやパウル・アルトハウスといった神学者が、<国家権力を天使的諸力とみなすことは出来ない>という反対論を、新約聖書神学の立場から展開しました。

この議論は、いまだ決着がついていません。

しかし、オックスフォード大学聖書学教授で、新約聖書言語学者であり新約聖書文献学者であるジョージ・ブラッドフォード・ケアードの『主権と諸力』（1954）を読みますと、言語学的に見ても、文献学的に見ても、<国家権力である天使的諸力>という概念が、相当な妥当性を持っているということがわかります。

484 恵みの信仰と律法主義

JOG - 2004/09/05 22:12 -

「必要以上に他教派に対して異端宣告をする。」
＝「自分たちの信仰こそが唯一の正統派」

これは律法主義的信仰の特徴ではないでしょうか？

恵みの信仰からはこのような発想は出てこないのではないのでしょうか？

自分から他の教会や信仰を見て、教理的な間違いや、未熟さが見えたとしても、主の恵みの中にあって、主が矯正し、整え、てくださることを信じ、必要なら、自分たちが何か助けになれるかもしれない。また、違った面では、何か学ぶべきところがあるかもしれないと考えるのではないのでしょうか？

483 ICMについて

JOG - 2004/09/05 22:09 -

本は読んでいません。本に対して意義もありません。
ICM出版の本ではニール・アンダーソンの本を愛読しています。

エキュメニカルに関してはよく知りません。

ICMについて、以前にこんなうわさを聞いたことがあります。
ペンテコステ派を異端視して、トラクトに「モルモン教、エホバの証人、ペンテコステ教会とは関係ありません。」といった文章を掲載していたそうです。

必要以上に、他教派に対して異端宣告をする教会なのかなと感じていました。

もしICMの関係者がおられて、このことが根も葉もないうさだということでしたら教えてください。

そして「必要以上に他教派に対して異端宣告をする。」＝「自分たちの信仰こそが唯一の正統派」と言うことに関して、再建主義と同じなにかを感じまして、この掲示板に投稿した次第です。

もし違うなら教えてください。

☐482 悪霊は最初から最後まで悪霊

JOG - 2004/09/05 22:02 -

>悪霊どもは不法に活動しており、恵みの時代において、あえてその刈り取りを行なわれず、悔い改める者を望んで忍耐しておられる、と考えています。

>そして終わりが近づくほど、黙示録12章にあるように、悪魔と悪霊が終わりが近づいているのを知って、最後のあがきをする、と考えています。

けいじさんのこのご意見では、悪霊は十字架後も活発に悪の仕業について働いていて、終わりが近づくにつれ、ますます活発に働いていくということですね。

この見解は一般的なプレミレの見解だと思います。

そして、山谷さんの天使的勢力がキリストの十字架によって武装解除され、いやいや、キリストに従って善をもって国を従えているが、時々悪鬼化するという見解とはかなり異なりますよね。

悪霊は、エデンの園の最初からうそつきで人間をだまし、十字架以後もだましつづけていますよね。最後の裁きにあうまで悪霊は悪霊です。

ただ人が主を見上げることによってのみ、キリストあることによってのみ、悪魔の攻撃は何も意味をなさない。武装解除されたと理解します。

☐481 ついでに、著者については

けいじ - 2004/09/05 00:51 -

その教会出身の友人は、著者のことは、調査をしっかりとする方でとても尊敬していると言っています。

☐480 確かに、著者の背景は大切です

けいじ - 2004/09/05 00:45 -

> そのように本を読むときに著者や著者が所属する教会の背景についてすることは有益だと思います。

そうですね、私も大切だと思います。ただ、このカトリック検証の本については、その大意において、福音主義の信仰を持っている人ならだれでも受け入れられる、基本的教理にしか触れていません。そして、元々、日本人向けに書かれた本なので、その文意も欧米系のものより、かなりマイルドに感じました。(他の英語のカトリック検証の本も何冊か読みましたが、それより穏やかです。)

僕は単純に、カトリックの公式教理と、聖書の基本教理を比較している学習書として、大変気に入りました。

☐479 実際に本は読んだのですか？

ただのおじさん - 2004/09/05 00:44 -

本の推薦者から一言。

「プロテスタントとカトリックの団結ですか？」

はどういう出版社が出そうが関係ない内容です。

なぜそこに異議があるのでしょうか？

本を読んだ上での異議であれば、エキュメニズムの立場の人によくある、根本主義に対する反感でもなければ出てくることのあり得ない筈です。

本は読みましたか？

ただ、エキュメニズムに賛同している出版社からは出されることだけではないでしょうね。カトリックがキリスト教としておかしいことは、エキュメニズムに賛同していなければ誰でも言うことができますよ。

おまけですが、私の所属する教会ではこの出版社の本は計3冊あります。

□478 僕も分かりません

けいじ - 2004/09/05 00:40 -

> 私が472で質問したのはそのような信仰を惑わす悪霊の働きのことではなく、「国々を支配するのは悪霊（天使的勢力？）であって、キリストの十字架によって武装解除させられ、中性化されているため、いやいやキリストに従って、神の御心に従って国を治めている」といった意味のことを書いているからです。

> 歴史上の様々な悲惨な事件、たとえばヒトラーによるユダヤ人迫害などが普段は武装解除されキリストに従っている悪霊が、急に悪鬼化したというわけなんですよ？

もともと、管理人・主催者の山谷さまがお書きになったことに私が横槍を入れたので、ご返答は山谷さまにお任せします。

僕は、「十字架において、世界の所有権はキリストによって神のものとなったけれども、その所有権の行使は、地上再臨のときに行なわれる」と信じています。黙示録5章にある小羊が、七つの封印の巻物を受け取られるところ等が、その根拠です。

したがって、悪霊どもは不法に活動しており、主は今すぐにでも、この者どもの仕業を滅ぼすことはおできになるはずです。けれども、マタイ13章の天の御国のたとえにあるように、恵みの時代において、あえてその刈り取りを行なわれず、悔い改める者を望んで忍耐しておられる、と考えています。

そして終わりが近づくほど、黙示録12章にあるように、悪魔と悪霊が終わりが近づいているのを知って、最後のあがきをする、と考えています。

□477 教理的間違いと、異端宣告

JOG - 2004/09/04 18:00 -

「あなたは（もしくはあの教会は）教理的に間違ったところがあるね。」

というのと、

「あなたは（もしくはあの教会は）異端ですね。（もしくはバビロニア化、もしくは悪鬼化）」

というのとはかなり大きな違いがあると思うのです。

人や教会に後者のような表現をする場合、なにか聖書的な教理論争以外の要因が働いているように感じるのです。

再建主義者が様々な教派を色々と批判していると思いますが、結局は「再建主義以外は異端」と言っているように感じてくるのです。

□476 書物と著者、教会の関係

JOG - 2004/09/04 17:44 -

書物と著者、教会の関係について、私は無関係だとは思えません。

たとえば、アメリカでも日本でもベストセラーになった「七つの習慣」という本があります。とても感動的な本です。

プロテスタントの牧師で説教の例話に引用している人を何人も見えました。そしてこの本と著者がいかにアメリカ社会に良い影響を与えたかをも紹介しました。

私もこの本を読んで涙を流して感想しました。

しかし、どこかしっくりしない気持ちが残っていました。その後、この本の著者が熱心なモルモン教の信者でモルモン教信者からみるとこの本はモルモンの教えを一般向けにわかりやすく紹介したものだと言うことです。

私の今この本に対して、「人間的には感動的な話が盛り込まれているが、クリスチャンに対しては巧妙に律法主義的信仰に導くものではないか？」と感じています。

この本は人間の可能性や人と人との関係に対してわくわくするような希望をもたらしてくれますが、いつのまにか「イエス様に目を向けなくても、やってゆけるんじゃない。」と思わせていくのではないかと思います。

人がイエスさまに目を向けたときに与えられる恵み、解放の力はこの本で語られているような内容とは比べ物になりません。

そのように本を読むときに著者や著者が所属する教会の背景についてしることは有益だと思います。

☐475 けいじさんへ

JOG - 2004/09/04 17:30 -

けいじさん。レスをありがとうございます。

できますよ（テモテ第一4:1）十字架後に、悪霊や惑わす霊が、人々の心を信仰から引き離す教えを持っていることを伝える聖書箇所です。

これは人の心が信仰から離れるということに惑わす霊と悪霊の教えが心を奪っているということですよね。

確かに第二コリント4:4には「この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。」とあります。

それでは、キリストの十字架の力は中途半端なんですか？

第二コリント3:16には「しかし、人が主に向くなら、そのおおいを取り除かれるのです。」とあります。つまり悪霊の働きがどんなにあっても、主の十字架の力は私たちを完全に守るのです。その意味で武装解除されているということが出来ます。悪霊がどんなに私たちを惑わそうとしても、人が主に向くなら、悪霊は打ち勝つことができないのです。悪霊の力は人に何もすることが出来ないのです。まさに武装解除、何の武器も持っていないのと同じ事です。

私が472で質問したのはそのような信仰を惑わす悪霊の働きのことではなく、「国々を支配するのは悪霊（天使的勢力？）であって、キリストの十字架によって武装解除させられ、中性化されているため、いやいやキリストに従って、神の御心に従って国を治めている」といった意味のことを書いているからです。

歴史上の様々な悲惨な事件、たとえばヒトラーによるユダヤ人迫害などが普段は武装解除されキリストに従っている悪霊が、急に悪鬼化したというわけなんですか？

なんで急に悪鬼化するのかわからないし、予防法も治療法もないんですよ？

□474 まとめて

けいじ - 2004/09/03 10:29 -

JOGさん

> 武装解除されて従属されているはずの悪霊がなんで
「その悪鬼的性格を露見させ」ることができるんですか？

できますよ。「しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。」（テモテ第一4:1）十字架後に、悪霊や惑わす霊が、人々の心を信仰から引き離す教えを持っていることを伝える聖書箇所です。

> この本を出してるICMって教会もだいぶん変わった教会みたいですね。

私の友人がこの教会出身ですが、確かに、結構がちがちところであるそうですが、本の中身の真偽とは無関係でしょう。そして中身は、単純に現在のカトリックの公式な内部資料と、聖書の教えを比較しているものです。

□473 ICM

JOG - 2004/09/03 00:21 -

「プロテスタントとカトリックの団結ですか？」

この本を出してるICMって教会もだいぶん変わった教会みたいですね。

□472 武装解除について

JOG - 2004/09/03 00:14 -

武装解除されてキリスト頭首権に従属させられた悪鬼的天使的勢力が、その悪鬼的性格を露見させて、キリストから与かっている<国家の絶対主権>と<社会の分散主権>を濫用した場合です。

武装解除されて従属されているはずの悪霊がなんで
「その悪鬼的性格を露見させ」ることができるんですか？

十字架による武装解除の力ってそんなに不完全なんですか？

□471 世界における悪霊の活動とその現象及び神の摂理的支配について

[山谷](#) - 2004/08/28 01:13 -

悪霊の潜在的な活動と顕在的な活動を考える小論を作成しました。お読み下されば幸いです。

[世界における悪霊の活動とその現象及び神の摂理的支配について](#)

□470 補足

ただのおじさん - 2004/08/27 17:07 -

プロテスタントとカトリックの団結ですか？

は私の教会の図書でいつでも借りられますのでどのような主旨のことが書いてあるかはお答えが可能です。

■469 超教派運動に関しては論じる価値もない

ただのおじさん - 2004/08/27 17:04 -

あまり新掲示板には興味がないなあ。

もともと再建主義への関心は、カルバン主義＋自然恩恵否定型の前提主義でなければスタートラインに立てないという再建主義者の強い主張に対し、私自身が根本主義＋自然恩恵承認型（フレーム師流）前提主義でなぜいけないのかという関心からであり、もともとガチガチの根本主義者である私にとって、わざわざ超教派の動きの是非など論じる価値もないほど否定的なのです。山谷さんが出した図式に対しても、別に認めた覚えも発言ありません。私はロイドジョーンズの見方で別におかしいところはないと思います。それはその後に出た「プロテスタントとカトリックの団結ですか？」においても同様（もっと詳しくカトリック自身の文書で出ています）の問題点が書かれているのですからね。ロイドジョーンズの「キリスト者の戦い」に関して、「プロテスタントとカトリックの団結ですか？」に関して、真っ当な反論がない限りこの問題には関心が強く持てません。

カトリックがサタンの最高傑作とは再建主義者も引用していますね。

[再建主義者のカトリック観](#)

なお私が超教派運動にあらためて危惧を抱いたのは、下の書籍で日本語のカトリック批判の参考文献が全て絶版であることです。これはゆゆしき事態であり、聖書信仰に立つクリスチャンにとって憂慮すべき事態です。

[プロテスタントとカトリックの団結ですか？](#)

■468 新掲示板の開設のお知らせ

[山谷](#) - 2004/08/27 10:17 -

国家権力の悪鬼化に対する監視と抑止の機能としての＜キリスト者の世界的な連帯＞について、具体的には、「第二バチカン公会議」「世界教会協議会」「世界福音同盟」「その他（ローザンヌI・II・IIIなど）」について考える掲示板を、新設しました。

今後、カトリック・リベラル・福音派を含めたく広義のエキュメニズム＞についての議論は、そちらの掲示板に移行して下さるよう、お願いいたします。

[＜全地公会議への道＞ウォッチング掲示板](#)

■467 今、ようやく気づきました

けいじ - 2004/08/27 09:47 -

山谷さま、掲示板の管理を含め、いろいろとご苦労さまです。

なぜ話が噛み合わないのか不思議に思いながら、今、ざっとこれまでの掲示板の書き込みを読みましたが、ようやく、ただのおじさんの書き込みを読んで、分かりました。

> 繰り返しますが、霊の働きは現象面のみを見て判断してはいけません。あなたは悪魔の働きである、神の主権によって認められた悪鬼化、＜バビロンの状況＞に至る諸霊の働きを陰謀論と退けています。それは非聖書的です。諸霊の働きなど、現象面のみから見れば陰謀論でしかありません。再建主義の陰謀論を意識しすぎて、逆に霊的な面を全て陰謀論として退けているのではありませんか？

もうそうなら、山谷さんから見れば、私なんかも陰謀論者なのではないでしょうか？陰謀論者が悪魔の策略のみに焦点を当てているのに対し、私はその仕業をも圧倒的な神の主権の中にある、という＜含み＞を持たせて信じているところで、自分は陰謀論者ではないと思っておりましたが。

いずれにしても、新しい掲示板を開設までして下さるようですから、その時まで議論を待ちたいと思います。

ところで、以前、再建主義ウォッチングとして、富井氏の反ネオコンの主張は、再建主義とどのような関

連があるのか、という質問をさせていただきましたが、もしお分かりでしたらご教授ください。（話題を変えます。）

■466 新掲示板への移行を予定します

[山谷](#) - 2004/08/27 01:25 -

このところ、＜全地公会議＞と＜第二ヴァチカン公会議＞＜世界教会協議会＞＜世界福音同盟＞の問題が議論されて来ています。

この議論が、だんだん、再建主義ウォッチング掲示板の本来の趣旨から外れて、WCCウォッチングになりつつありますので、この際、新しい掲示板を設置し、議論をそちらに移したいと思います。

開設まで数日を要すると思いますが、関係諸氏のご協力をよろしくお願いいたします。

■464 世界的なキリスト者の連帯による監視について

[山谷](#) - 2004/08/27 00:48 -

全世界のキリスト者が、キリスト者の世界的な連帯によって、国家権力の悪鬼化を監視し、共同で預言的な声を挙げる、ということに、重要な意義があるわけです。

そこに＜意義がある＞ことについては、これまでの議論を通して、ご理解いただけたことと思います。

しかし、たとえ＜意義を認めない＞と言われるのだとしても、現実問題として、今のカトリック・プロテスタント・正教会は、＜世界的に連帯したキリスト者が、社会正義のために、預言者的な声を挙げていく＞という方向性で、進んでいるわけです。

これは、現状として、現代教会史がその方向で動いているわけですから、＜意義を認めない＞と言われるとしても、それで、消えてなくなってしまうわけではありません。キリストが再臨する日まで、世界の教会は、この線で、使命を果たし続けて行くであろうと、わたしは思っています。

そもそも、聖書の世界観的パラダイムは、聖書に基いて、世界や歴史や社会の進行を整合的に説明出来ることに、主眼があるわけです。

そうして、＜三項図式の世界理解＞と＜キリスト者の世界的連帯による国家権力の悪鬼化の抑止＞という図式を考えた方が、古代から現代までの歴史の動きについても、わたしたちの社会の政治や文化の成り立ちについても、憲法や司法や立法といった統治システムについても、さらに、第二バチカン公会議や世界教会協議会についても、「なぜ、そうならなければならなかったか」ということが、上手く説明できる、と、わたしは思っています。

しかし、世界観的パラダイムとして、他に説明の方法を求めたいのであれば、別にそれは、「再建主義」であっても「陰謀論」であっても、よいわけです。ただし、＜新約聖書神学を考慮した場合＞には、「再建主義」も「陰謀論」も、退場しなければならないことになる、と、わたしは思っています。

もちろん、＜キリスト者の世界的な連帯の意義を一切認めない＞という立場の地域教会や個人としてのキリスト者は、自分の信条や信仰理解に反してまで、そうした＜世界的な連帯＞に加わる必要はないわけですし、また、強制的に加えられることも、あり得ないわけです。

なぜなら、＜意義を認めない＞教会や個人は、単に、自分たちの方針として、NCCや福音同盟に加入しない、という立場を採り続けてさえいれば、「こうした世界的な連帯に関するすべてのことがら」から、完全に距離を置いて、一切無関係でいることが出来るからです。

そうして、ファンダメンタルな地域教会の中には、＜一切無関係＞を貫き通しているところも、相当あるであろうと思います。ビリー・グラハムを「非聖書的」として問題視するわけですから、そういう教会は、当然のことながら、ローザンヌIとIIや、この9月に開催されるローザンヌIIIについても、＜一切無関

係>という立場を取ることになるわけです。

わたしは、別に、みなさんを強いてNCCやWCCやカトリックや世界福音同盟やローザンヌとの交わりに加入させようとしているわけではありません。＜世界的な連帯の意義を認めない＞のも、立派な信仰の在り方であり、そうした孤立主義というのも、ひとつの霊性のタイプであろうと思います。

■463 日本語の資料、見つけました

けいじ - 2004/08/26 12:47 -

エキュメニカル運動についての紹介が、以下のリンク先にあります。

この用語の説明

「歴史的な経緯から多くの諸教派に分かれているプロテスタント教会が、一致を目指そうという運動で、「世界教会一致運動」と訳される。20世紀初頭にこのような考えをもったプロテスタント各派の指導者らは1910年、エディンバラにおいて世界宣教会議を開催、その流れから1948年、「世界教会協議会」(WCC)が生まれた。WCCを基盤とした「エキュメニカル運動」は、信仰的にはリベラル(自由主義的)な傾向が見られたため、福音派の多くは加わらず、別に聖書的な福音信仰に立った一致の道を求めて世界福音同盟やローザンヌ運動に加わった。WCCにはプロテスタント以外に東方正教会も加盟しており、ローマ・カトリック教会とはエキュメニカルな交流・対話を続けている。冷戦時代に旧共産圏諸国の政府寄りの政策をとったWCCの政治的傾向、他宗教との対話路線の行き過ぎ、フェミニズム神学への傾倒などに対し、批判の声も内部にあり、正教会は脱退の動きを見せている。一方でWCCは、従来関係の薄かった福音派、カリスマ・ペンテコステ派とも交流の道を探っており、一部のペンテコステ教会には加盟の動きもある。」

(<http://csd-news.gospeljapan.com/databook/term/9.html>)

それから正教会による、WCC脱退の動きを示す、具体的な声明文。

<http://www.geocities.jp/fnagaya2002/Hp/Trans.htm>

プロテスタント教理史講義の一部

<http://members.jcom.home.ne.jp/tamach/watanabe/21B.html>

(下の方、「VI. エキュメニカル運動の限界と問題性」に注目。)

以上はいわゆる普通の福音派関連(または正教会)のサイトであると思われますが、みな一応に、ファンダメンタル伝道協会が指摘している点と、同じことを述べています。

■461 福音は、議論の言葉ではなく力

けいじ - 2004/08/26 09:42 -

ただのおじさん

> ファンダメンタルな教会、クリスチャンは言うに及ばず、保守的な教会、クリスチャンならファンダメンタル伝道協会が反対しているとそちらが指摘した点に対しての批判は当然出てくるよね。エキュメニカルイズムにファンダメンタルな教会が反対なのは当然のことだけど、単なる保守的な教会もエキュメニカルイズム運動には距離を置いているケースは幾つもある。自分たちの教理を曲げてまでエキュメニカルイズムでやろうという気がない教会はいくらでもあるんだよ。ファンダメンタリストは、キリスト教の教理に、聖書の教えに忠実たろうとしたところから始まったわけだから、エキュメニカルイズムで、聖書の教えを曲げてまでやろうという気はないのだよ。でもごく普通の教会でも、エキュメニカルイズムでやろうとすれば、自分たちの教理は曲げなければならないからね。

そうですね、私が気になっていたことの一つはこれでした。下のリンクのトラクトの中にも、「WCC傘下の地域教会のクリスチャンたちの多くは、おそらく自分の教会がその傘下に入っていることさえ、知らないかもしれない。そして何が行なわれているか、知る由もないだろう。」というようなことが書かれていました。

一般信者はもちろんのこと、地域教会の牧師がエキュメニカル運動を自分のところで地で行っていきこうと

する人は、あまりいないんじゃないかな？牧師は、その信者一人一人の魂の健康を気にしているから、福音のことばを明白に語っていくことが、その人を救うこと肌身で知っているからね。だから、上層部ではいろいろな議論が交わされていても、最前線にいる人たちの信仰は、結構ファンダメンタルになっていると思います。

それに、これまでのキリスト教会史を見ると、迫害されてもなおかつ信仰を否まなかった人たちの信仰もまた、ファンダメンタルですね。エキュメニカル運動で僕が支持できるのは、例えばナチスによって政治収容所に入られた人々が、国教会であろうが、カトリックであろうが、改革派であろうが、イエスの御名によって極秘の祈祷会をやっていた、というような証言を聞くときですね。組織じゃなくて、信仰と祈りそしてキリストに基づく証しですね。

そして日本の教会でも、美濃ミッション、ホーリネス教会とも、どちらもファンダメンタルな教会で、唯一神への信仰（美濃ミッション）、地上再臨（ホーリネス）が理由で迫害されましたね。他のドイツ神学に影響された多くの教会は、国の方針とほぼ完全に一体化してしまいました。

福音は、議論で納得するものではなく、救いをもたらすく力です。

□460 論旨がおかしい

けいじ - 2004/08/26 09:04 -

山谷さん

私が書いたことを、ご理解いただけなかったようです。ファンダメンタリスト伝道協会という団体が、かりにイデオロギー的に偏った団体であろうと、そこに具体的に示されたWCC内の資料、大会の様子の報告などの真偽は確かめることはできますよね？事実確認の問題であり、その団体の是非の問題ではありません。

私は基本的に反陰謀論の立場であり、かつファンダメンタル伝道協会ほど戦闘的ではない、穏健的根本主義者であると思っています。ですから、かつて山谷さんが、富井氏からいろいろなレッテルを張られて、それらに反論されていましたが、私も同じように、「そんなわけないでしょ！」という反論をさせていただきます。

山谷さんの論旨をひっくりかえすと、WCCの決議を支持している団体の中に、マルクス主義志向の団体のサイト、左翼反戦団体のサイトにも掲載されています。そして彼らが行なっていることをこの掲示板で列挙し、それで山谷氏のエキュメニカル論は左翼、過激派である！というレッテルを貼ったら、どう思われますか？単にそのような決議が彼らの政治的目的に利用されているだけですよね？私はそのぐらいの良識は持っています。

たまたまサーチエンジンでキーワードを入れたらファンダメンタル伝道協会からの資料が出てきただけです。そして穏健的（一つは、religious toleranceなんというサイト名にさえなっている）サイトからのソースへのリンクも貼らせていただきましたが、それを読んでいただくことすらできないのでしょうか？山谷さんが精査していただくことにご協力していただければ、せっかく有意義な議論が終わってしまうので、残念でなりません。

私が問題にしたいのは、繰り返しますが、WCCがカトリックで、すでに＜明示的に＞行なっていることに非聖書的部分があるのではないかと指摘です。（今はWCCに焦点を当てましたが、今度はカトリックに当てることもできます。もっと、たくさん変なことを行なっていることが、普通のソースからも出てきますよ。）だから、キリスト者の世界的監視としての機能という目的と噛み合うのか？という質問です。

そのようなものがあって、なおかつ、それでもカトリックやWCCが行なっている大まかな方向性は間違っていない、という反論を、山谷さんからの言葉から聞いたかったです。

けれども山谷さんが、一点のみ接点がかみ合う反論をされていますので、それにお答えします。

> そうして、教派や地域が異なるにせよ、少なくともキリスト教会と名乗るのである限り、三位一体論と正統的キリスト論を保持しないのであれば、それはもはやキリスト教とは見なされない・あるいは・異端である、という態度を、今なお取っているわけです。

(かの、ファンメンタリスト伝道協会が世界教会協議会を論難する理由は、まさに、そこにあるようすが)

> これは、プロテスタントの言うく地方教会主義・地域教会主義>が、絶対的な地方教会主義・絶対的な地域教会主義ではなくて、相対的な地方教会主義・相対的な地域教会主義であるに過ぎない、ということの意味しているのです。

まさに、これが私が信じていることです。すでにお答えしましたが、ニカイア公会議など、キリスト論を中心にした公会議の力を私も信じています。そして現在においても、世界的な集まりをして声明を出す程度でしたら、良い働きだと思えます。けれども、そうした基本教理に反する信仰を持っている教会も取り入れて、それで公会議を取り戻そうという動きには、断固として反対します。いや、キリスト教系集まりとか、すくなくとも「教会」という名称を使わないで活動していただきたいです。誤解されますから。

もし、こうしたエキュメニカル運動に反対の立場が、この掲示板にふさわしくなければ、もう書きません。教えてください。

□459 けいじさんの発言を受けて

ただのおじさん - 2004/08/26 08:47 -

話が噛み合わない理由なんて誰でもわかるよ！

かたやエキュメニカルイズム賛成で、かたやエキュメニカルイズムに批判的なんだからね。話が合うわけじゃない。

でもこれじゃあ駄目だろうなあ。再建主義相手に通る理屈じゃないからね。今ファンダメンタル伝道協会が反対しているとそちらが指摘した点は、再建主義者もほぼ反対でしょう。

ファンダメンタルな教会、クリスチャンは言うに及ばず、保守的な教会、クリスチャンならファンダメンタル伝道協会が反対しているとそちらが指摘した点に対しての批判は当然出てくるよね。エキュメニカルイズムにファンダメンタルな教会が反対なのは当然のことだけど、単なる保守的な教会もエキュメニカルイズム運動には距離を置いているケースは幾つもある。自分たちの教理を曲げてまでエキュメニカルイズムでやろうという気がない教会はいくらでもあるんだよ。ファンダメンタリストは、キリスト教の教理に、聖書の教えに忠実だろうとしたところから始まったわけだから、エキュメニカルイズムで、聖書の教えを曲げてまでやろうという気はないのだよ。でもごく普通の教会でも、エキュメニカルイズムでやろうとすれば、自分たちの教理は曲げなければならないからね。

今言ったことは、けいじさんの、

>エキュメニカルイズムに対する警鐘は、米国右翼や陰謀論に凝り固まった人の専売特許ではなく、ちょっと保守的な教会の指導者や、健全な福音主義の信仰を持つapologetist（護教論者）であれば、指摘していることです。

という発言を私なりに言い換えたものです。

そもそも私のグループはガチガチの戦闘的ファンダメンタリズムから生まれていて、私自身もエキュメニカルイズムに対する批判はさんざんやっている。昨晚も祈祷会の始まる前に、牧師も含めてその話をしたばかりだった。私なんかその中じゃ一番穏健だから会話が成り立っているんだ。本当の戦闘的ファンダメンタリストなんかエキュメニカルイズムなどキリスト教であるかどうかすら疑っているよ。会話なんか成立しないね。私でもリベラル視されるくらいだから。

いつも私が言われていることを裏返したただけけど。

□458 異議あり！

ただのおじさん - 2004/08/26 08:09 -

>相当に右翼的な傾向を持った原理主義的キリスト教の団体、と見るべきではないかと思われます。

この場で原理主義という言葉을キリスト教に対して使うことに異議を立てます。今後一切使わないで下さい。
それにこれらの立場を批判する教会、教団、教派は別に少数でも、特殊な考えでもありません。
あなたのその発言自体が陰謀論に聞こえますよ！

欽定訳以外のすべての現代英語訳聖書→欽定訳に比べれば他の訳には疑問の余地があるというのも私たちのグループのスタンスです。改訂は改善ならず。これを地でいっているという評価です。
たとえば私の教会は去年の春まで口語訳でした、以後新改訳に変えました。新共同訳は私の知る教会、クリスチャン、批判的で、一切使っておりません。これは改訂＝改善でない例と言えましょう。
ビリー・グラハム→超教派反対のためペケと考えていると思われる。
カリスマ刷新運動→単純に聖書の根拠が薄弱なのでペケと考えていると思われる。
コンテンポラリー・ゴスペル・ミュージック→讃美は神をほめたたえるものなのに、この音楽は神をほめたたえることにならないから非聖書的であると判断できる。
教会成長運動→教会はわざわざ人間が策を弄しなくても成長するのが本来あるべき姿。人間が策を弄することは神の力を認めていないので非聖書的と考えていると思われる。
新福音主義→私は新福音主義の牧師と話をしました。新福音主義についても調べました。あれのどこがキリスト教なのでしょう？
リック・ウォレンの「目的指向の教会」→情報不足（けいじさん知っていますか？）。敢えて言えば私の教会の属するグループは、グループの規模以上に宣教師、開拓伝道を行っています。それが教会の存在理由であり、本当に目的思考の教会をつくりたければやることは1つ、国内に、海外に、バンバン宣教師を送って熱心に伝道すべきです。私のグループは宣教主義とでも言うべき立場なので、宣教しない教会にはそれこそ存在の理由も、目的もありません。
女性教職者→女性は人の上に立つべきではない、これ聖書の教えです。
ペンテコステ教会&現代における異言の使用→コリント書に合致していないと判断していると思われる。
ペンサコラ・リバイバル→他にも批判者あり

457 ファンダメンタリスト伝道協会について

[山谷](#) - 2004/08/26 00:32 -

ご紹介くださったファンダメンタリスト伝道協会のサイトを見てみましたところ、このグループは単にWCCを批判しているだけでなく、次のものについても「非聖書的」「反聖書的」「反キリスト的」として批判を加えていることが判りました。

欽定訳以外のすべての現代英語訳聖書
ビリー・グラハム
カリスマ刷新運動
コンテンポラリー・ゴスペル・ミュージック
教会成長運動
メル・ギブソン監督作品「パッション」
新福音主義
リック・ウォレンの「目的指向の教会」
女性教職者
ペンテコステ教会
ペンサコラ・リバイバル
現代における異言の使用

これに加えて、NAE(米国福音主義協会)が「われわれは、極端で攻撃的なファンダメンタリストからは距離を置きたい」という声明を出し、NCC(米国キリスト教協議会)との一定の協力関係を持とうとしていることに、このファンダメンタリスト伝道協会は、激しく反発しています。

以上を見ますと、この団体は、普通の福音派の団体ではなく、相当に右翼的な傾向を持った原理主義的キリスト教の団体、と見るべきではないかと思われます。

■456 全地公会議について（3）

山谷 - 2004/08/26 00:16 -

では、何に対して＜相対的＞なのか？と問うならば、それは、＜ローマ教皇至上主義＞に対して相対的なのだ、ということです。つまり、＜ローマ教皇を・キリスト教世界における・あるいは・キリスト者の信仰と実行に関する・最高権威・最終権威とみなす立場＞を固執するような過去の公会議については、その見解を批判し・否定するけれども、それ以前の公会議、つまり、古代に聖書正典・三位一体論・正統的キリスト論を決定し・世界信条を形成した公会議については、プロテスタントは、それを承服するのです。

さて、現代社会において＜全地公会議＞が開催されるのであるとしたら、そこには、＜ローマ教皇の至上権を認める共同体＞と＜ローマ教皇の至上権を認めない共同体＞とが、参加することになるでしょう。

カトリックが、ローマ教皇の至上権に関する立場を絶対に譲らないのは、明白です。また、プロテスタントが、それに反対する立場を絶対に譲らないのは、明白です。

そうである以上、現実問題としては、＜全地公会議＞を開催するのは、困難であるわけです。そこで、現状としては、第二バチカン公会議、世界教会協議会、世界福音同盟という、三つの世界大の教会会議が、キリスト者の＜信仰と実行＞の一致のために、活動して来たわけです。

そうして、全世界のキリストの教会（世界のすべての地方教会・地域教会）が、教義と教会政治と礼拝について世界的な見解の一致を形成するのは困難であるとしても、＜国家権力の悪鬼化及び社会の悪鬼化に対する監視と抵抗権の行使＞という議題に関してであるならば、カトリックもプロテスタントも福音派も、相違を越えて連帯し、共同の行動を取ることが可能であると考えられます。

なぜなら、社会正義の問題については、教会の果たすべきミッションは明確であり、社会的な不正・国家と社会の悪鬼化についての＜指標＞は、具体的かつ明示的なものであるからです。

つまり、過去における国家の露骨な悪鬼化という歴史においてキリスト者が抵抗権を行使して形成して来た＜憲法＞や、自然権に基いて形成された＜国際法＞、神定法としての＜自然法＞、神の似姿として創造された人間の尊厳に基いて形成された＜人権・人道＞といった、具体的・かつ・明示的な判断基準に拠って、国家の悪鬼化の程度を判断し、その上で、世界的なキリスト者の連帯の力（公会議の力）により、「預言的な声」を挙げ、非暴力不服従という形態における「キリスト者の抵抗権の行使」を行うことが、出来るからです。

■455 全地公会議について（2）

山谷 - 2004/08/26 00:16 -

ところで、もし仮に、＜地域教会主義＞だけで事足りるのであれば、わざわざ＜全地公会議＞を開催して、「キリスト者の世界標準としての信仰と実行」について議論し、正統的見解をまとめる、というような作業を行う必要は、全然ないわけです。

つまり、各地域教会が、聖書を自由に読み、自由に解釈し、それぞれの地域・地方で、それぞれ独自の＜信仰と実行＞をやって行けば、それで良いわけです。

しかし、カトリックに対して抵抗して分離改革を行った＜プロテスタント＞ですら、三位一体や神人二性一人格というような正統的神論・正統的キリスト論を、今なお「世界標準」として掲げているわけです。

そうして、教派や地域が異なるにせよ、少なくともキリスト教会と名乗るのである限り、三位一体論と正統的キリスト論を保持しないのであれば、それはもはやキリスト教とは見なされない・あるいは・異端である、という態度を、今なお取っているわけです。

（かの、ファンメンタリスト伝道協会が世界教会協議会を論難する理由は、まさに、そこにあるようすが）

これは、プロテスタントの言う＜地方教会主義・地域教会主義＞が、絶対的な地方教会主義・絶対的な地域教会主義ではなくて、相対的な地方教会主義・相対的な地域教会主義であるに過ぎない、ということの意味しているのです。

なぜなら、もし絶対的な地方教会主義・絶対的な地域教会主義に立つのであれば、全地公会議で形成された合意をすべて反古にして、三位一体論や正統的キリスト論をもはや採用しなくてもよい、ということになるからです。

そうして、実際に、プロテスタントの自由主義神学からは、過去の全地公会議で形成された三位一体論や正統的キリスト論に拘泥されない、＜信仰と実行＞に関するリベラルな行き方も実際に出て来たわけですよ。

しかし、大方のプロテスタントは、いまなお、ニカイア・コンスタンティノポリス信条や、アタナシウス信条を重視し、公会議において決定された聖書正典リストに従い、公会議において決定された三位一体論と正統的キリスト論を保持し、それらの世界標準に従って聖書を読み・解釈し・生活しているのである以上、その立場は、＜相対的地方教会主義・相対的地域教会主義＞でしかあり得ないのです。

■454 全地公会議について（1）

山谷 - 2004/08/26 00:15 -

最初の全地公会議であった使徒会議を見ると、そこには、ユダヤ教の価値観を軽視する異邦人キリスト者中心の共同体が参加しており、また、ユダヤ教の価値観を重視するユダヤ人キリスト者中心の共同体が参加していたわけです。

つまり、＜信仰と実行＞に関して、「キリストをどう信じるか」、という内容についても、「キリスト者はどう生きるべきか」、という内容についても、二つの共同体（異邦人共同体とユダヤ人共同体）の間では、相違点が存在していたわけです。

このような相違が存在していたがゆえに、＜全世界的なキリスト者の「信仰と実行」に関する見解の一致＞を形成するために、使徒会議が開催されなければならなかった必然性があるわけです。

その後の全地公会議においては、三位一体論とキリスト論が集中的に議論され、三位一体論とキリスト論をめぐる世界信条が形成されることになります。その背景にあったのは、世界各地のキリスト教共同体が、それぞれの地方・それぞれの地域において、相互に異なった＜信仰と実行＞についての見解を保持していた、という状況が存在したことですよ。

つまり、ある地方の教会では、＜キリストには神としての性質と人間としての性質があるが、人格はひとつである＞、と考えられていたのに対して、別の地方の教会では、＜キリストには神としての性質と人間としての性質があって、人格はふたつである＞、と考えられていた。あるいは、ある地方の教会では、＜キリストは父なる神の実子であり、本当の神である＞と考えられていたのに対し、＜キリストは父なる神の養子であり、神ではないが、神的存在である＞と考えられていた・・・というような、神論とキリスト論をめぐる見解の相違が存在したわけですよ。

■453 Re: 情報の識別の必要性

けいじ - 2004/08/25 17:16 -

山谷さま

> この文章を読みますと、「けいじ」さまが指摘されたような情報が、ファンダメンタリスト伝道協会の手でまとめられているのがわかります。

> さて、上記文章をアップしているAPFN（アメリカ愛国的同志ネットワーク）という団体は、どういう団体であるのか？

これはちょっとおかしいのではないですか？この情報のリソースである、ファンダメンタリスト伝道協会の立場を検証するなら分かりますが、そのリソースをただ、米国右翼団体によって利用されているにしか過ぎません。このような論法で別の情報を抹殺するのは、逆に私は危険だと思いますが。

そして大事ななのは、仮に怪しい団体であろうと、WCCが実際に行なったことなのかどうかその真偽を確かめるべきで、信憑性への疑義は出てくるものの、情報そのものとは無関係なはずです。

オリジナルであれば、次のサイトになりませんか？

<http://www.fundamentalbiblechurch.org/Tracts/fbcwcc.htm>

そして、そのトラクト内容全般については私は個人的に、ちょっと戦闘的すぎるという感想がありますが、具体的にWCCの資料から、"Some very conservative churches judge the basis not biblical enough; some liberal churches DO NOT ACCEPT THE TRINITARIAN FORMULA."という文があることを指摘しています。

また別のトラクトでは、バンクーバーで行なわれた大会でインディアンの儀式が行なわれた、ともあります。

(<http://www.fundamentalbiblechurch.org/Tracts/fbcwcc1986.htm>)

具体的な大会の場所と日時が記されているのですから、他のソースを調査して、実際に本当かどうかを確かめることができるわけで、この伝道協会が自分の信条に相容れなかったとしても、利用できるわけです。

このようなサイトもあります。

<http://logosresourcepages.org/wcc.html>

これも、具体的な大会を指摘していますから、その真偽を調査しようと思えばできるはずですよ。

私は、このようなファンダメンタルな信仰を持った団体だけでなく、トラクトだけでなく、他の穏健的、またキリスト教系ではないサイトからも、いくつか読んで、それで下のような状況がある事を書きました。例えば同性愛についていえば、

<http://www.lifesite.net/ldn/1998/sep/98093005.html>

http://www.religioustolerance.org/hom_wcc.htm

の二つを読みました。

エキュメニカルイズムに対する警鐘は、米国右翼や陰謀論に凝り固まった人の専売特許ではなく、ちょっと保守的な教会の指導者や、健全な福音主義の信仰を持つapologetist（護教論者）であれば、指摘していることです。

ですから、私は、山谷さまと情報の共有が出来た後、次にお聞きしたいのは、

「すでに宇宙的なキリストのからだにおいて、一つにされている教会を、現経緯の中で、カトリックやWCCが求めているような、組織的な一つの教会において具現化しなければいけないものだろうか？」

ということです。けれども、この質問の前に、情報の共有がなされる必要がありますね。

宜しくお願いします。

☐ 452 情報の識別の必要性

[山谷](#) - 2004/08/25 16:01 -

グーグル検索で、World Council of Churchesを検索しますと、上位から11番目に「WCCの真実」と題するサイトが出て来ます。

<http://www.apfn.org/apfn/WCC.htm>

この文章を読みますと、「けいじ」さまが指摘されたような情報が、ファンダメンタリスト伝道協会の手でまとめられているのがわかります。

さて、上記文章をアップしているAPFN（アメリカ愛国的同志ネットワーク）という団体は、どういう団体であるのか？

トップページに行って調べてみますと、米国右翼団体・白人分離主義団体・武装民兵団体（ミリシア）の、インターネット上のネットワーク組織であることがわかります。

とくに、古いトップページを見てみますと、白人分離主義者・ミリシア特有の、陰謀ネタで満載されているのが、よくわかります。

<http://www.apfn.org/old/apfncont.htm>

たとえば、米同時多発テロにおける世界貿易センター崩壊や、オクラホマ・シティーでの連邦ビル爆破事件は、連邦政府の陰謀である。クリントン政権時代の副大統領アル・ゴアは、世界統一宗教を擁立しようとしている。新世界秩序（NWO）が国連を掌中に収めている。エリザベス二世女王が国連安保理を裏から支配している。合衆国は実はいまだに密かな植民地統治の下に置かれている。インプラント（電子機器を人体に埋め込むことによる、人格の遠隔操作）が実行されている。電磁波を使ったマインドコントロールが行われている。イラク戦争は、ブッシュ大統領とチェイニー副大統領の石油企業が仕掛けた・・・など、これらは、ほんの一部をご紹介します。

これらの主張を読みますと、APFNが、アメリカの典型的な反連邦主義のミリシア団体であることが、よくわかります。こうした団体は、フリーメーソン・イルミナティー陰謀論をも唱えており、ビリー・グラハムすら、反キリストの手先という扱いになってしまうのです。

このような団体のサイトを、一般的には「ヘイト・サイト」（悪意ある中傷の情報を流すサイト）と読んでおり、そのようなサイトが流す情報については、けっして鵜呑みにしてはならず、慎重な姿勢で臨む必要があります。わたしでしたら、全く信用しない、という態度をとります。

当、再建主義ウォッチング掲示板におきましては、再建主義と米国右翼団体・新右翼運動・白人分離主義・陰謀論との関連性をも念頭に議論をしております。そうして、基本的スタンスとして、＜陰謀論否定＞でやっておりますので、そのところをご了承ください。

現在、インターネットには、あらゆる情報が流れておりますので、福音派・ファンダメンタリストのキリスト者は、特に、情報の適切な識別・見分けをして行くことが、重要であると思います。

■450 具体的事象に対する見解の相違

けいじ - 2004/08/25 09:37 -

おっしゃることは、よく分かります。山谷さまのパラダイムのご説明は納得いくのですが、私は逆に、具体的にバチカン、WCCの評価が、その同じパラダイムの理解から反対の評価をしている、ということです。

> むしろ、国家と社会の一体化による悪鬼化でありましょう。

あるいは、グローバル社会が個々の国家をアトム化する形で次々と飲み込んで行くという、＜社会と国家の一体化＞という事態であるでしょう。

> さらにまた、教会が単なる宗教として＜社会の分散主権＞のひとつ・あるいは＜宇宙論的な15の法領域のひとつ＞へ還元されてしまい、教会としての独自の法領域が見失われる結果、教会の＜信仰と生活＞が自然科学の批判というフィルターを経なければならない、とみなされるような、＜社会と教会の一体化＞という事態でありましょう。

昨日、World Council of Churchesというキーワードでサーチエンジンにかけてみました。私が予想してた通りの現状が書かれてあるサイトが沢山出てきました。

キリスト教の基本教理を受け入れていない人々も、そのメンバーになれること、キリスト教内のエキュメニカルではなく、他宗教を含めるエキュメニカル運動が進んでいること、同性愛者の聖職者の是非で正教

会などが参加の辞退をしたこと。共産ゲリラに資金援助をしたこと、などです。

バチカンでは、例えば、ローマ教皇が平和のために、あらゆる宗教者を集めて（その中には、蛇を拝む信者もいた）、それぞれの宗教形態で祈らせた、という報告も聞いたことがあります。

世界の潮流は、グローバル社会が個々の国家をアトム化し、そしてキリスト教が単なる宗教の一つとして還元される時代になっていると、私も強く感じます。そして、上の二つの団体は、これらの潮流への歯止めになるのではなく、むしろ飲み込まれてしまっている状況の中にあるのではないかと、というのが、私が受けている感触です。

山谷さまが言われる、地域教会での抵抗では、当事者同士の相違の中で埋没してしまう、という現状も強く感じています。しかし、それへの解答が公会議の力なのか？、少なくともバチカンやWCCによる公会議ではないでしょうか？というのが私の意見です。

■ 449 教会改革・宗教改革・国政改革・公会議の力（2）

[山谷](#) - 2004/08/25 00:34 -

さて、国家と教会の一体化については、過去に＜宗教改革＞が行われて、国家と教会の間に二度と抜くことの出来ないくさびが打ち込まれ、＜教会は聖書正典の権威にのみ服する＞、そうして、＜国家と教会は分離する＞、というプロテスタンティズムが確立されたわけです。

そうして、プロテスタントが地上から携挙されない限りは、もはや二度と再び、国家と教会が一体化するということは、起こりえないわけです。たとえ、部分的に悪鬼化が起こったとしても、直ちにキリスト者が良心に基く抵抗権を行使して、国家と教会の一体化に対して「ノー！」を突きつけるわけです。ナチス統治下のドイツ的キリスト者教会に対する告白教会が、そのような「ノー！」でありました。

そうして、第二次大戦後の60年の歴史を経て、わたしたちは、国家と教会の一体化による悪鬼化が、キリスト者の抵抗権の行使によって、戦いの末に見事に阻止され続けて来たことを、見ているわけです。

21世紀に立つわたしたちが今目にしているのは、そうではなく、むしろ、国家と社会の一体化による悪鬼化でありましょう。

あるいは、グローバル社会が個々の国家をアトム化する形で次々と飲み込んで行くという、＜社会と国家の一体化＞という事態であるでしょう。

さらにはまた、教会が単なる宗教として＜社会の分散主権＞のひとつ・あるいは＜宇宙論的な15の法領域のひとつ＞へ還元されてしまい、教会としての独自の法領域が見失われる結果、教会の＜信仰と生活＞が自然科学の批判というフィルターを経なければならない、とみなされるような、＜社会と教会の一体化＞という事態でありましょう。

このような状況に対してキリスト者が有効に抵抗権を行使するためには、＜宗教改革＞によって失われてしまった＜公会議の力＞を、21世紀において回復させることが、是非とも必要であるわけです。

なぜなら、＜公会議の力＞すなわち＜キリスト者の世界的な連帯による監視と抵抗＞というポテンシャルを持たないのであれば、地方教会・地域教会はいとも簡単に＜社会の分散主権＞のひとつコマとして「社会」に還元されてしまい、国家と社会の一体化の動きに流されてしまうからです。

だからこそ、教会は、＜公会議の力＞を取り戻そうとしているわけです。

しかし、それは、これまでの歴史において聖霊の導きにより行われてきた多くの＜教会改革＞、特に＜宗教改革＞を無視したり、無効にするようなかたちでなされるものではありません。

むしろ、＜宗教改革＞が、国家と教会の間に打ち込んだくさびとしての「聖書主義」や「政教分離」を不変の土台とした上で、＜公会議の力＞を取り戻そうとしている。それが、世界教会会議や、第二バチカン公会議や、世界福音同盟の動きに共通した方向性であるわけです。

この方向性は、世界教会協議会においては、各々の教派の違いを保持しつつ、エキュメニカルな教会とし

での信仰・職制・社会正義のための行動を一致させる、という、エキュメニズムの動きとなっているわけです。

また、同じ方向性が、カトリックにおいては、プロテスタント側の聖書学の成果の積極的導入、プロテスタント各教派との共同及び個別の対話、信仰・職制・社会正義のための行動についての世界教会協議会との共同作業、という動きになっているわけです。

その意味では、＜教会改革＞は、現在も、進行中であるわけです。そうして、そのような＜教会改革＞は、現実の歴史が＜救済史＞のラインに何度も何度も連れ戻されるために、絶対に必要なことでありますし、教会が携挙され、キリストが再臨される日が来るまでは、何度でも＜教会改革＞が繰り返されて、その都度、＜バビロン化＞という事態は阻止されることになるであります。

448 教会改革・宗教改革・国政改革・公会議の力（1）

山谷 - 2004/08/25 00:33 -

確かに、教会の歴史において、教皇権の腐敗や、公会議の権能の過度の強調など、問題が存在しました。

これらの過ちは、＜国家・社会・教会＞という各法領域が、各々相互に対して「正しい自立」を行うのに失敗し、国家が教会の法領域に踏み込んだり、あるいは、教会が国家の法領域に踏み込んだりした結果であると考えることが出来ます。

新約聖書神学の世界観的パラダイムに基く三位一体的統治の概念図に拠るならば、国家の領域と、社会の領域は、いずれも、＜位・主権・支配・権威・ストイケイア＞という、キリスト頭首権に服する悪鬼的天使的勢力の支配領域（ドミニオン）であるわけです。現在は、中間時であるわけですから、キリスト頭首権による支配領域（ドミニオン）が、同時に、キリストに打破された天使的諸力の支配領域（ドミニオン）でもあるわけですね。ここに、問題の複雑さがあります。

ですから、教会が、経綸を読み間違える・法領域を踏み越える・聖書の世界観的パラダイムから逸脱する、などして、教会と国家が一体化したり（中世の教皇権）、国家と教会が一体化したり（ナチス統治下におけるドイツ的キリスト者教会）した場合に、教会が、悪鬼的天使的諸力の支配化に入ってしまう、という事態が起きてしまうわけです。

もちろん、教会と言う場合に、＜見えざる教会＞としての、宇宙的なキリストの教会・あるいは・宇宙的なキリストのからだ、というものがあり、これは＜恩恵と自然の完全調和＞であって、かしらなるキリストにおいて、神との無媒介的な結合を保持しているわけです。

これに対して、＜地上の教会＞あるいは＜可視的な教会＞あるいは＜人間の集団＞としての教会があり、これは、聖化がいまだ完成していない＜途上の教会＞あるいは＜旅する教会＞＜巡礼の教会＞、さらにまた、＜制度としての教会＞＜組織としての教会＞と言うことも出来るでしょう。

神学的に考えた場合、神との無媒介的な結合を持つ教会が、悪鬼的天使的諸力の支配下に入ることは、あり得ないわけです。これは、パウロが、ガラテヤ書やコロサイ書で論じている通りです。

しかし、現在は＜すでに・しかし・いまだ＞の中間時であるわけですから、いまだ聖化が完成していないキリスト者たちが、その罪性のゆえに判断を誤り、人間の組織・制度としての教会が、本来守るべき現経綸における法領域を踏み越えて、国家と一体化したり、社会と一体化したりした場合に、＜聖化の未完成の部分＞としての人間集団において、国家や社会の悪鬼的天使的諸力の影響や支配を受けてしまう、ということが、あり得るわけです。

しかし、＜国家・社会・教会＞が、各々の守るべき法領域を踏み越える事態が起きた場合には、必ず、＜教会改革＞の運動が歴史において起こって来るわけです。これは、現実の歴史のコースを、新約聖書神学の世界観的パラダイムのラインに引き戻そうとする、聖霊の働きであるわけです。言い換えれば、現実の歴史は、＜救済史＞というアンダーラインを引かれていて、そこから逃れ出すことは出来ず、逃れようとしても、神の力によって常に、＜救済史＞のラインへと、軌道修正されてしまうのです。これは、網の中の魚たちがどれほど暴れようとも、地引網が岸边に向かって着々と進むコースを少しも動かすことが出来

ないのと、似ています。

<国家・社会・教会>が、各々の法領域を踏み越えた場合に、必ず<教会改革>が起こり、内部改革としての教会改革が目的達成を出来なかった場合には、分離改革としての<宗教改革>が起こり、さらに、宗教改革を完成するものとして<国政改革>が起こるわけです。こうして、現実の歴史は、新約聖書の世界観的パラダイムのラインへと連れ戻され、<国家・社会・教会>が、各々自立した法領域として、キリスト頭首権による地上の支配領域（ドミニオン）を三分する、という三位一体的統治が回復されて来るわけです。

□447 一部理解できました

けいじ - 2004/08/24 11:19 -

> もちろん、宗教改革によって確立された<聖書正典に対する公会議の従属>という立地点（「われ、ここに立つ」）は、プロテスタントとしては、絶対のものであるわけです。

> しかし、「われ、ここに立つ」という行き方の最終形態としての<われ、ここに立つ、ゆえに、われ、他に関せず>という「地域教会主義」であっては、国家権力の悪鬼化を抑止する教会のミッションを果たすことは、不可能なのであり、・・・

このことについては理解できますし、公会議の必要性は認めますが、けれども、それを目指している動きの中にすでに、真理の妥協や、預言的ではなく政治的になっている徴候を見ますと、この動きを手放して賛美できない状況です。

> これは、すでに、歴史において実証されているのです。

とのことですが、これも教会の中だけでなく<国連>という形で世界的連帯の動きがありましたが、現況を見ますと、しばしばUNable（無能）・腐敗が指摘されています。教会も、同じ道を辿らないと断言できるでしょうか？

公会議と聖書の間のバランスを取る作業は本当に難しいと思います。そして、時代の逆戻り、つまり、公会議主義による個々のキリスト者への迫害が起こり得る可能性もあります。実に聖書には、形骸化した教会が聖徒たちを殺害することが預言されています。

もちろん携挙後にこの状況が全開するわけですが、すでに「不法の秘密」は働いているわけで、<徴候>はあるわけです。また、ヨハネもすでに多くの反キリストがいる、と第一の手紙の中で述べており、<終わり>はすでに始まっています。このような切迫した状況であることを認識した上で、初めて、<引き止める>働きをすることができるのではないのでしょうか？

□446 公会議か、聖書か（4）

山谷 - 2004/08/23 22:38 -

こうなりますと、ひとつの地域教会が決定した<信仰と実行>の在り方は、その隣接する別の地域教会と相違していたとしても、何ら問題にはならない、ということになります。なぜなら、ひとつの地域教会は、聖書正典の権威にのみ服しており、それをどのように解釈し、実行するかは、その地域教会が独自の判断で決定すべき事柄であると考えられることになるからです。

このような状況においては、たとえば、国家がある悪鬼的状况に陥ったとしても、主権領域の中において、多くの地方・地域に分割されて在る教会は、この地域教会では、国家権力の動きに賛成する決定をし、あの地域教会では、国家権力の動きに反対する決定をし、あそこの地域教会では、国家権力の動きにまったく無関心であり、あちらの地域教会では、国家権力を恐れて、何も言わないでいることを選ぶ、というように、ばらばらの対応になってしまうわけです。

そうして、<公会議の力>を認めていないのである以上、そのような、ばらばらの対応をすることこそが、むしろ、正しい対応、ということになってしまうわけです。

このような、ばらばらの対応が、国家権力の悪鬼化という事態に直面した場合に、抑止の力とはもはやなり得ないために、教会は国家の悪鬼化の抑止というミッションを、＜社会の分散主権＞に移行させる道を選択したわけでした。この移行の過程が、宗教改革に続いて行われた国政改革であり、具体的には、清教徒革命やアメリカ独立革命などの市民革命であったわけです。これは、＜キリスト者の抵抗権＞が＜市民的抵抗権＞と一体化したかたちで実行され、さらに、＜キリスト者の抵抗権＞が＜市民的抵抗権＞へと移行する、という結果をもたらしました。その果実が、近代国家の要件である＜憲法＞＜三権分立＞＜議会政治＞＜首長選挙制度＞＜国家権力の監視と抑止としてのマスメディア＞であるわけです。つまり、キリスト者の抵抗権が、＜公会議の力＞を失って、弱体化したために、それに代わるものとしての＜市民的抵抗権＞が、国家の悪鬼化の抑止の中心を占めるようになったのです。

ところが、＜国家の絶対主権＞と＜社会の分散主権＞が一体化して悪鬼化した、という20世紀前半の全体主義の悲劇においては、＜憲法＞＜三権分立＞＜議会政治＞＜首長選挙制度＞＜国家権力の監視と抑止としてのマスメディア＞という抑止機構が、まったく役に立たなかったわけです。ドイツ、イタリア、日本、共産主義諸国、アジア・アフリカ・南米の独裁諸国の国民は、このことを、死の痛みをもって思い知らされたわけです。

では、20世紀の悲劇を、どう反省すべきなのだろうか？

その反省が、プロテスタントにおいては、世界教会協議会を生んだわけであり、カトリックにおいては、第二バチカン公会議を生んだわけであり、福音派においては、世界福音同盟の＜社会正義の問題への関与＞を生んだわけです。

もちろん、宗教改革によって確立された＜聖書正典に対する公会議の従属＞という立地点（「われ、ここに立つ」）は、プロテスタントとしては、絶対のものであるわけです。

しかし、「われ、ここに立つ」という行き方の最終形態としての＜われ、ここに立つ、ゆえに、われ、他に関せず＞という「地域教会主義」であって、国家権力の悪鬼化を抑止する教会のミッションを果たすことは、不可能なのであり、これは、すでに、歴史において実証されているのです。

そこで、各地域教会が、それぞれの聖書正典の＜読み＞と、そこから導き出される＜信仰と実行＞という、それぞれ固有の「伝統」に忠実でありながら、しかも、現代世界において＜公会議の力＞を取り戻して行くには、どうしたらいいのか、という問題。これが、クローズアップされて来るわけです。

この困難な課題をなし遂げるために、世界教会協議会は、プロテスタント諸派、正教会が中心となって、カトリックとも提携し、福音派・ペンテコステ派、カリスマ派に対しても働きかけをし続け、＜公会議の力＞を取り戻そうとしているわけです。

そうして、カトリックもまた、第二バチカン公会議に、プロテスタントと正教会の代表をオブザーバーとして招くことによって、＜公会議の力＞を取り戻そうとしているわけです。

■445 公会議か、聖書か（3）

[山谷](#) - 2004/08/23 22:37 -

ところが、その一方で、プロテスタントの分裂に次ぐ分裂、という事態が、起きざるを得ませんでした。

というのは、聖書正典をどのように読み、どのように解釈し、そこから、どのような＜信仰と実行＞を導き出すかについて、プロテスタントの神学者間、聖職者間で見解が分かれてしまい、それらの見解の相違を整理調整しなければならない段になったときには、＜すでに宗教改革によって、公会議は正典に対して従属させられ、公会議の力が相対化されてしまっていた＞ために、たとえ教会会議が多数票をもって決定を下したとしても、その決定に不服を抱くキリスト者は、決定を拒否し、分派を形成することが、むしろ＜正しいこと＞とみなされるようになってしまったのです。

なぜなら、聖書正典に対する自分の読みと解釈の正しさを確信するのであれば、その確信に反する教会会議の決定を拒否し、教会会議が聖霊に導びかれているとはみなさず、分派を形成することこそが、キリスト者として選択すべき正しい道である、ということになるからです。

このようにして、分裂に分裂を重ねたプロテスタントにおいては、キリスト者の信仰と実行についての＜キリスト者の世界的な見解の一致＞を形成する制度としての＜公会議の力＞は、決定的に失われることになり、＜地方教会・地域教会が、地方教会・地域教会の権威において、信仰と実行の在り方を決定する＞という、「地域教会主義」が進展して行くことになったわけです。

□444 公会議か、聖書か（2）

[山谷](#) - 2004/08/23 22:36 -

さて、中世においては、ローマ教皇権と公会議と間で、西ヨーロッパ世界における最終権威がどちらにあるかを巡り、論争が加熱したために、公会議が＜聖霊によって導かれている＞ということが、強調され過ぎてしまいました。

この行き過ぎを是正する＜教会改革＞として、＜最終権威はあくまで聖書正典であって、公会議の権威は第二であり、教皇の権威は第三である＞という主張が行われました。その主唱者が、イギリスのオックスフォード大学神学教授のウィックリフであり、ボヘミアの教会改革者であるヤン・フスでありました。

ヤン・フスは、聖書正典の権威を第一とし、公会議の権威を正典に従属させるという改革の主張を携えて、コンスタンツ公会議に出席したわけですが、公会議至上主義者が多数派を閉めていたコンスタンツ公会議は、フスを異端として破門し、世俗の官憲に引き渡されたフスは、処刑されてしまいました。

このようにして、内部改革としての＜教会改革＞は頓挫することとなり、その結果、分離改革としての＜宗教改革＞が行われることが、西ヨーロッパ世界において、不可避的状况となってしまったのです。

16世紀に＜宗教改革＞が断行されて、キリスト者の信仰と実行の唯一の規範としての聖書正典という＜聖書主義＞が確立されることになりました。

□443 公会議か、聖書か（1）

[山谷](#) - 2004/08/23 22:33 -

使徒会議については、使徒会議開催当時、まだ新約聖書の諸文書が書かれていなかった、あるいは、書かれている途中であったわけですから、＜使徒会議は開かれた新約聖書を前にして集まったわけではない＞ということになります。

それでは、＜使徒会議は開かれた旧約聖書を前にして集まった＞ということになるのだろうか？

もし、旧約聖書の教え＜のみ＞を根拠として使徒会議が開催されたのであれば、異邦人キリスト者に対して、ノアの四戒ではなく、モーセの十戒と律法全体の遵守を要求する決議をしたはずなのです。

ところが、そうはならなかった。

使徒会議は、単なる人間の集まりに過ぎなかったのにもかかわらず、神の言葉である旧約聖書の絶対性を軽んじ、異邦人に与えられた一般恩恵としての自然法を是認していると見える、「ノアの四戒を守れば、それでよい」という決定を、下したわけです。

それでは、使徒会議は、いったい何の権威によって、そのような決定を下したのだろうか？ 旧約聖書の権威＜だけ＞によって下したのではないことは、明らかです。では、新約聖書の権威によって、そのような決定を下したのだろうか？ しかし、新約聖書は、使徒会議開催の時点では、まだ、存在していなかったのです。

まさにそのゆえに、使徒会議は、＜聖霊によって導かれる＞と言われることになったのです。

そうして、古代教会においては、全地公会議もまた＜聖霊によって導かれる＞と信じられるようになったのです。

新約聖書正典を決定するにあたって、どの文書を入れ、どの文書を外すべきかについては、いろいろ議論があったわけですが、最終的には、全地公会議が＜キリストのからだなる教会の世界的な見解の一致＞として、正典リストを決定したわけです。

公会議が正典リストを決定することが出来たのは、公会議が＜聖霊によって導かれている＞と信じられていたからにほかなりません。

そう信じられていなかったのなら、むしろ、各地方教会・地域教会が、それぞれ異なる正典リストを保持して、異なる信仰と、異なる実行をする、というのが、キリストの教会の行き方になったはずなのです。

□442 富井氏のアメリカ批判

けいじ - 2004/08/23 09:03 -

また別の内容の質問になります。

富井氏のホームページに、ネオコンを中心とする米国批判が前面に掲げられていますが、これと、再建主義に基づく彼の信仰や思想とは、どのような関係があるのでしょうか？再建主義がネオコン否定につながる、その関連性が分かりません。

□441 公会議の有効性

けいじ - 2004/08/23 08:59 -

リンク先の小論「キリスト者の世界的連帯による監視について」を読ませていただきました。

> 最初の全地公会議は、エルサレムとアンティオキアの二つのキリスト教共同体が、異邦人の律法遵守問題についての当時の激しい論争に決着をつけるため、エルサレムにおいて開催した使徒会議だと考えられています（使徒言行録15章参照）。

使徒職に与えられた権限は、聖書の中で、主ご自身から授けられたものであることが書かれていますが、「異邦人もそのままで、信仰により救いにあずかることができるのか？」という議題のために集まった出来事が、使徒時代後の公会議の正当性を語ることに、どれだけの根拠になるのかが疑問でした。

むしろ、聖書の中の公会議に有効性を持たせるなら、使徒たちの教え、つまり聖書を最高権威とし、それによってキリスト者生活全般への物差しにすることではないか、つまり聖書主義に立った吟味が最も有効なのではないか？と思いました。

そうした立場から、小論に書かれているローマカトリックの歴史を読み、果たして、教会の第三者としての権力行使が適切に行なわれていなかったのではないか、と思いました。例えば、教会における破門が、イコール社会追放になるというのは、むしろ再建主義に通じるものではないか？と思いました。

□440 プロGRESSIV・DISPENSATIONISMについて

山谷 - 2004/08/22 23:58 -

PROGRESSIV・DISPENSATIONISMについて調べてみましたが、一番簡潔にまとめられていたのが、次のサイトです。M.ヴラークが、懐疑的な視点から、小論を書いています。

<http://mb-soft.com/believe/txh/progdisp.htm>

概略をまとめますと、PROGRESSIV・DISPENSATIONISMは：

1. 米国ジョージア州アトランタの福音主義神学協会のDISPENSATIONISM主義研究会において、1986年11月20日に提唱された。
2. 主唱者は、クレイグ・ブレイジング、ダレル・ボック、ロバート・ソウシー、ケネス・バーカー、デヴィッド・ターナー、ジョン・マーティン等。
3. 現経綸において、イエスが＜ダビデの王座＞に着座し、地上を統治している、と見る。

4. 現経綸において、神の国が、地上に「すでに到来している」が、「いまだ完全に顕現していない」という、＜すでに・しかし・いまだ＞の時制にある、と見る。
5. 現経綸の中心である教会は、諸国家・諸民族から贖い出された人々によって構成されているものであるが、教会は、諸国家・諸民族のカテゴリーに属さない、＜別のカテゴリー＞である、と見る。
6. 現経綸における啓示（新約聖書の啓示）は、すでに、ある程度、旧約聖書においても明らかにされている、と見る。
7. 現経綸において、アブラハム契約やダビデ契約は、＜その霊的局面＞については、すでに教会において成就しているが、＜その物質的側面＞については、いまだ成就しておらず、それが成就するのはキリスト再臨後である、と見る。
8. 各経綸を、＜神の・人類に対する・段階を追った・相互に異なった取り扱い＞と見るだけでなく、＜漸進的な啓示の発展＞、＜贖いのみわざの進展＞として捉え、＜神が・民族の差別なく・すべての人類のうちに・聖霊によって宿り・政治的に統治する＞という最終目標に向かっている、と見る。
9. 神の救いは、人間の＜人格的・文化的・社会的・政治的＞な、全存在領域に及ぶ、と見る。
10. 患難期前携挙説を奉じる。
11. 歴史的・文法的聖書解釈法を採用する。
12. 古典的ディスペンセーションナリズムよりは、むしろ、契約神学に近似している。

以上を見て、＜新約聖書神学の世界観的パラダイムに基づく三位一体的統治の概念図＞と比較してみますと、似ているところが、（3）（4）（5）です。

（3）は＜キリスト頭首権によって、現経綸において「国家の絶対主権」「社会の分散主権」「キリストのからだなる教会」が統治されている・つまり・すでにキリストが地上を統治している＞ということになります。

（4）は＜すでに・しかし・いまだ＞という＜メシア的中間時の時制＞ということになります。

（5）は、それぞれ全く別々のカテゴリーである＜諸国家・諸政府＞、＜諸民族・諸文化・諸言語・諸宗教＞、＜キリストのからだなる教会＞ということ。つまり、三つの法領域としての＜国家・社会・教会＞ということになります。

微妙なところが、（9）です。＜神の救いが、キリスト高举によって打破され従属させられた天使的諸力の仲介を経て、文化・社会・政治の領域にも及ぶ＞と見るのであれば、「似ている」ということになります。しかし、＜神の救いが、キリスト再臨の前に、天使的諸力の仲介を経ずに、無媒介的に、文化・社会・政治の領域にも及ぶ＞と見るのであれば、「似ていない」ということになり、むしろ、「再建主義に近似している」ということになります。

■ 439 ミレニウム新着情報「日本に関する仮説8」を読んで
思う

めじろ - 2004/08/22 21:31 -

富井氏は本当に支離滅裂な人だ。
聖書信仰に堅く立っていると言いながら、
こんな突拍子もないことを言い出すのだから。

「天照大神とスサノオノミコトの物語は、日本に
やってきた弟子たちが伝えたキリストの犠牲の
物語の変形ではないだろうか」
こんな推論は荒唐無稽で冒涇的ですからある。
富井氏は聖書信仰の看板を外すべきだろう。

■ 438 プログレッシブ・ディスペンセーション主義とはどう
いう主張なのですか？

ただのおじさん - 2004/08/21 23:56 -

プログレッシブ・ディスペンセーション主義

ってなんですか？

再建主義との論争で出てきたディスペンセーション主義者はこの立場だったそうです。しかし、私の巡回しているディスペンセーション主義の教会では反聖書的な立場と明言していました。どうなんでしょ。私はファンダメンタリズムに立つ立場からのディスペンセーション主義なので少々古い立場だと自覚しており、この様な新しい動きにはとんと疎いのでご説明ねがえればと思います。
他のディスペンセーション主義と対比した場合、この立場は再建主義に対してどういう違いが出てくるのでしょうか？

■437 キリスト者の世界的連帯による監視について

山谷 - 2004/08/19 23:46 -

キリスト者の世界的な連帯による監視について、小論を作成しました。お読み下されば幸いです。

[キリスト者の世界的な連帯による監視について](#)

■436 人間、人類の数、人口

* - 2004/08/19 15:56 -

つまらないことを書いてすみません。現在世界の人口は60億を超えたのですよね。歴史始まって以来の人間、人類の数よりも多いとのこと。男と女がSEXすることによって簡単に増えてきたのですよね。こんなに簡単に造れる人間は神の御心なのでしょう。神の意思は働いているのでしょうか。造るのは簡単でも人間を人間として教育し育てるのは大変なことです。いい社会、国にするには人口調整、SEX調整が絶対に必要です。今この地球上で生きている人間は生まれたてのホヤホヤの0歳児から一番長生きしている人で110何歳でしょう。この人たち全てが天国か地獄か知らないがとにかく神としては登録することになるのでしょうか。
何を言いたいかと言うと神が神ならばもっと責任を持って地球、宇宙を管理してくれと言うことです。人間をバカにしているのではないのかと言うことですよ。

■435 みことばの二面性

けいじ - 2004/08/19 07:29 -

> そうであるのに、悪鬼化傾向を識別して、ある一定の判断を行おうとするのですから、そこには、当然、何らかの判断基準が要請されることになります。「なんでもいいから、とにかく悪鬼化していることにせよ」という姿勢で行ったら、取り違えが起こってしまいます。

はやまったさばきをしてはならない、という戒めとともに、聖書には、「すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。（テサロニケ後5:21）」ともあります。

また、先に、不法の秘密は引き止められている、という真理があることが述べられましたが、と同時に、

人々が勝手気ままに教師たちを寄せ集め、空想話にそれていく時代になること（テモテ後4章）

終わりには、見えることは敬虔でもその実を否定する者が現われること（テモテ後3章）

教会の中に、にせ教師が現われること（ペテロ後2：1）

キリストの受肉を否定する多くの反キリストが、すでに現われていること（ヨハネ第一2：18）

などが書かれています。

「律法の破棄」が書かれているみことばだけでなく、再建主義者らが使う「律法の成就」について言及されているみことばがあります。けれども、「律法の成就」また完成の意味を、キリストの十字架の御業によって説明できます。同じように、バビロン化についての話題も上記の二面性があります。この点については、どうぞ説明なさいますか？

434 早まったさばきをしてはならない

けいじ - 2004/08/17 17:43 -

山谷さま

ご回答大変ありがとうございます。地引網と毒麦のたとえからの説明で理解できました。コリント第一４章にも、はやまったさばきをしてはならない、との言葉がありますがその通りですし、地域的なキリスト者の抵抗としての行動も、当事者同士の問題に次元に引き下げられる、という成り行きも理解できます。

私も、ただのおじさんと似たように、美濃ミッション事件を中心に戦前・戦中のキリスト教会の歴史をひとかじり勉強した者ですが、日本での時局の特徴は、「真綿で首を締める」ということだな、という認識を持っています。気づいたときは、すでに遅い、という事実がありました。

そこで、「はやまった判断は、取り違える危険がある」というのもうなずける一方で、「目をさましていなければ、罪を犯す」というもう一つの聖書的原則にも注目してしまうのです。

そして、キリスト教会が抵抗権を行使できたか？というと、国家と教会の一体化がこの日本においてなされた現実を見ると、楽観的になかなかかなりずらいところがあります。

そして質問ですが、この「世界的連帯による監視」が、現在、WCCや世界福音同盟によって具現化されているとされていますが、この考えは教会の誕生以来存在していなければいけなかったはずのものです。具体的に、教会史において、どのような組織や動きがあったのでしょうか？列挙していただけると幸いです。

433 キリスト者の世界的連帯による監視について（３）

山谷 - 2004/08/16 00:12 -

東京都教育委員会による公教育現場での日章旗への一礼・君が代斉唱の罰則を伴う命令については、現在、市民的抵抗・市民的抗議が一部で行われていますが、どうしても、都教委と教職員との間の＜当事者間同士の問題＞という次元で片付けられてしまう傾向にあります。これに対して、日本のリベラル派、福音派双方のキリスト者が抗議の声を挙げておりますが、日本人キリスト者は、日本国民であり同時に日本社会の市民でもあるわけですから、キリスト者の抵抗権の行使とて、＜当事者間同士の問題＞という次元で扱われて終わり、ということになってしまいがちです。

ところが、上記問題について、世界教会協議会と世界福音同盟の双方が現在一定の関心を寄せつつあり、情報を収集中であると共に、この問題についての準備的な分析と評価を行っています。ことが、国旗と国歌の公教育における使用義務、という問題ですから、世界教会協議会と世界福音同盟が＜悪鬼化＞という判断を出すかどうかは、はなはだ微妙なところではありますが、結果として＜預言者の声を挙げる＞ということになるならば、領域主権を超越した世界大の第三者（世界の第三項）からの意見表明が行われる、ということになるわけです。

それでは、世界的なキリスト者の連帯による監視によって、とにかくどんな問題でもいいから口実に使って、諸国家を批判攻撃していさえすれば、それでよい、ということになってしまうのだろうか？

そんなことは、ないのです。

なぜなら、＜網が岸辺に引き上げられておらず、良い魚と悪い魚が混在している＞あるいは＜穂が熟していない状態で、良い麦と悪い麦が混在している＞という現経綸においては、判断を誤ると、取り違いが容易に起きてしまうからです。

そこで、過去における国家の露骨な悪鬼化という歴史においてキリスト者が抵抗権を行使して形成して来た＜憲法＞や、自然権に基いて形成された＜国際法＞、神定法としての＜自然法＞、神の似姿として創造された人間の尊厳に基いて形成された＜人権・人道＞といった、具体的・かつ・明示的な判断基準に拠って、国家の悪鬼化の程度を判断すべきなのです。

432 キリスト者の世界的連帯による監視について (2)

山谷 - 2004/08/16 00:12 -

＜悪が極まる＞という意味での完全な悪鬼化が起きるのは、終末が到来してから、すなわち、教会が携挙されてからのことなのであって、だからこそ、＜抑えているものが取り去られると、不法の者が姿を現す＞と、テサロニケ後書で言われているのです。

しかしながら、いまだ終末が到来しておらずとも、＜国家＞の露骨な悪鬼化は、これまでの歴史において何度か起きて来ました。キリスト者は原則的に、ローマ書13章において、国家権力に服従するように、また、ペトロの手紙において、人間が立てた全ての政治制度に服従するように、と、＜中間時の中間倫理＞を命じられています。それにもかかわらず、過去の歴史において、＜国家＞の露骨な悪鬼化に際しては、キリスト者はその良心に基く抵抗権を行使して、＜国家＞の悪鬼化の抑制に努めて来たのです。その結果、国家権力を抑制し、国家に対する社会の自由を保証し、国家権力と教会とを分離する、という、＜国家と国民との間で締結された、明文化された政治契約としての憲法＞が、歴史的に形成されて来ました。

悪鬼的天使的勢力である国家権力は、この＜憲法＞によって、かせをはめられて、その行動を規制されているわけです。しかし、かせを脱ぎ捨てて露骨な悪鬼化を試みようとする場合には、順序として、＜国家＞に対してまず＜社会＞が抵抗するわけです。なぜなら、国家の悪鬼化は、＜国家と国民との間で締結された、明文化された政治契約としての憲法＞を破るかたちで起こって来るからです。この場合の＜社会の抵抗＞が、市民的監視、市民的抗議、市民的抵抗であって、その中に、報道による監視と抗議も含まれています。

これに加えて、世界の第三項としての＜教会＞が、国家と社会との間の闘争に対して、第三者の立場から＜預言者の声＞を発するわけです。

なぜ第三者かと言えば、国家と社会との間の闘争が、ひとつの主権領域内における統治者と住民との間の闘争という、直接当事者同士の問題という性格を持つものに対して、＜教会＞は、諸国民・諸民族・諸言語から集められた人々から構成される＜宇宙的キリストのからだ＞として、単一の主権領域を超越しているがゆえに、直接当事者という立場を超えた＜第三者的存在＞であるのです。ここに、教会の預言者の声の力があると考えられます。

それゆえに、「預言者の声は、キリスト者の世界的な連帯による監視に基くものでなければならない」ということになります。それは、キリストのからだが宇宙的なものであることと関連しており、また、現地のキリスト者＜だけ＞の監視と抵抗であるならば、それは、国家と社会との間の闘争という＜直接当事者間同士の問題＞としての次元に、容易に引きずりおろされてしまうことになるからです。

431 キリスト者の世界的連帯による監視について (1)

山谷 - 2004/08/16 00:10 -

様々に解釈し得る諸現象が次から次へと起こりながら、歴史は、終末という一点に向かって進行しているわけです。

この歴史は、＜救済の歴史＞であって、墮落した人類の救済と聖化という単一のベクトルへによって、すでに決定付けられてしまっています。なぜなら、キリストが十字架にかかり、復活し、天に昇り、栄光を受けられ、そうして、再臨されるからです。

福音書の中に見られる、主イエスの「地引網のたとえ」を、もう一度思い起こしていただきたいと思うのですが、漁師（神）が網（歴史）を岸边（終末）へと引っ張り上げてしまう時が、やがてやって来ます。そうしますと、漁師（神）は、地面に座り込んで、網の中から良い魚（栄化されたキリストのからだ）と悪い魚（悪鬼的天使的諸力）を選び分けて、別々の器に移してしまうのです。

この時点が、教会の空中携挙の時であろうと、わたしは考えています。つまり、教会が地上から取り去られてしまうと、地上には、神に反抗する勢力のみが残されることとなり、これが、＜国家・社会・宗教＞

の世界規模の完全一体化と悪鬼化を行って、＜バビロンの状況＞を作り出す、ということになるのだろうと思います。

網（歴史）が、まだ岸边に引き上げられていない現時点においては、良い魚も、悪い魚も、混ざり合っていて、それほど狭められてはいない水中の網の中で、ある程度自由に泳ぎまわっているのです。

そうしますと、網が岸边に引き上げられていない時点において、漁師（神）ではない、魚（人間）に過ぎないわたしたちが、良い魚と悪い魚とを判別するのは、至極困難であろう、ということになります。

そうであるのに、悪鬼化傾向を識別して、ある一定の判断を行おうとするのですから、そこには、当然、何らかの判断基準が要請されることになります。「なんでもいいから、とにかく悪鬼化していることにせよ」という姿勢で行ったら、取り違えが起こってしまいます。

これは、良い麦の種を蒔いた畑に、夜中に敵が来て、悪い麦の種を蒔いて行っただが、畑の主人はく収穫が来るまで待つことにしよう。そうでないと、悪い麦と一緒に、良い麦まで抜いてしまうかもしれないから＞と言った、という、主イエスの、もうひとつの例え話しとも関連しています。

□430 言い換えると

けいじ - 2004/08/14 23:28 -

山谷さま

下の投稿の疑問を言い換えますと、

「何をもって、キリスト者の監視と言えるのだろうか？」

という質問になります。いろいろなレベルでの悪鬼化があり、それらを区別することについては理解しましたし、厳密な意味でのバビロン化は起こっていないことも理解しましたが、現場において、我々は、どのような監視の声を上げるのでしょうか？具体的に、ローマ教皇、WCC、世界福音同盟の名をあげてくださいましたが、それではその組織による声明に対して、我々個々人のキリスト者が影響されればそれで良い、ということでしょうか？また他にあるなら、具体的にどのような方法が考えられますか？ご教授お願いします。

□429 う～ん、論旨が難しいです

けいじ - 2004/08/14 23:10 -

山谷さま

さらなるご説明、大変ありがとうございました。今回は非常に難しかったです。

確かに、現象面だけで、かつ厳密な定義では、世界においてバビロン化は認めることはできません。そして現象として、私も陰謀論者のように水面下でのバビロン化はなされているとは決して思いません。

しかし、＜霊の動き＞として、その方向に進んでいるのではないか？その徴候は認めることができるのではないか？という問題提起です。

警鐘を鳴らすキリスト者の存在、また単純に福音の中に生きているキリスト者によって、それら悪魔、悪霊どもの働き、不法の秘密の全開には歯止めがかけられている、と信じています。

そして、この警鐘を鳴らす営みが、逆に陰謀論であるとして批判の対象にされてしまうと、「こういえばああ言い、ああ言えばこう言う」の議論になってしまいます。どう接点をあわせれば良いかが分からなくなります。

あと、カトリックの第二公会議について触れておられましたが、私は、宗教多元主義なように見せながら、なおかつカトリック教会による救いを見せていない、ところが、非常に危険だと指摘させていただき

ました。キリストのみによる救いが、他宗教への寛容と、儀式などの行為による救いの両面において、台無しにされているのではないかと危惧しています。

■428 カトリック問題の議論について

山谷 - 2004/08/14 23:04 -

議論が平行線で、まったく接点が見られない状態です。

ですので、今後、この掲示板において、＜カトリック教会が現時点においてバビロンの状況にあるかどうか＞についての議論は、行わないことにいたします。

＜カトリック教会はバビロンの状況にはない＞というわたしの判断の根拠については、過去ログで繰り返し説明しましたので、これ以上繰り返す必要はないと思います。

また、「ただのおじさん」さまの、カトリック教会は悪魔の最高傑作であるという判断については、何をもって悪魔的と言うのか、その判断の根拠については、ロイド・ジョーンズの『キリスト者の戦い』に典拠していることが明言されていますので、関心のある方は、その本をお読み下さればと思います。

なお、悪鬼化という現象は、なんでも十把一絡げにして扱われるべきものではなく、＜個人レベルの悪鬼化＞＜地域レベルの悪鬼化＞＜国家レベルの悪鬼化＞＜世界規模の悪鬼化＞というように、レベルがあります。さらにまた、複合的な悪鬼化の構造についても、＜国家と社会＞という組み合わせでの悪鬼化、＜社会と教会＞という組み合わせでの悪鬼化、＜国家と教会＞という組み合わせでの悪鬼化、＜国家と社会と教会＞という組み合わせでの悪鬼化、というように、違いがあります。

そうして、上記のレベルの違い、組み合わせの違いについては、悪鬼化している状態を、具体的な現象に即して、正確に判断することが可能なものであると、わたしは考えています。

個人レベルの悪霊憑依現象の場合は、人格交代、神聖冒流行為、古代語使用、身体変化などで、判断することが出来ます。

超個人レベルの悪鬼化現象の場合は、社会的不正、憲法違反、国際法違反、国家と社会と教会の完全一体化、などによって、判断することが出来ます。

キリスト者は、世界の現象を、聖書の世界観に照らして解釈し、判断した上で、取るべき行動を決定しなければなりません。

現象を正しく判断するためには、聖書の世界観に即した判断基準が必要になります。そこで、今後もこの掲示板では、＜個人レベルの悪鬼化＞＜地域レベルの悪鬼化＞＜国家レベルの悪鬼化＞＜世界規模の悪鬼化＞をきちんとわけて考えて行きたいと思います。あるいはまた、超個人的な悪鬼化の現象についても、その構造的な組み合わせの違い（国家と社会、社会と教会、国家と教会、国家と社会と教会）を、きちんとわけて考えて行きたいと思います。

■426 そこに人はいない

ただのおじさん - 2004/08/14 07:08 -

いろいろと発言を読んでみてやはり悪魔の働きをあまりに軽視しすぎていると考えざるを得ない。悪魔は今も働いている。もちろん、悪魔が神に代わっているわけではない。が、その働きを軽視すべきではない。そのゆえに、1人1人の人間に注意が払われなさ過ぎる、という事態が起きているのだ。

大きな物語を語る前に、1人1人の人間にもっと注意を払うべきだ。

これは他の神学でも何例も見た神学を語る人の問題点である。

彼らは神学を語る。話はパズルのように整合する。しかしそこに本当の意味で1人1人の人間がいない。人間のいない場で神学を語っている。その様な神学が本当に人間の世界を表現しているとは考えることができない。

神学に人が接近せず、非合理的なほど体験的な信仰に走る理由もそこにある。

合理的な神学には人がいないと感じているからである。

この思いは日を重ねるほどに強くなり、もはや確信となっている。

人のいない教えに人は惹かれないのだ。

□425 美濃ミッション事件の時

ただのおじさん - 2004/08/14 02:34 -

美濃ミッションを最後まで擁護した教派はどのくらいあったのでしょうか？
その時代の日本には救世軍も存在していたはずですが。

□424 美濃ミッションの話が出発点だった

ただのおじさん - 2004/08/14 02:31 -

私は、1人の人間が、聖書にその存在が明記されている悪魔の策略に対してどうすべきなのかを問題としてきたのです。これがロイドジョンズの「キリスト者の戦い」のテーマ（エペソ6：10～13）でもあるのです。それに対して国家とか政府とかの問題は、最初に論ずべき問題ではないのです。ロイドジョンズはこの本の中でカトリックを悪魔の策略の道具と断定し、その中での最高傑作と呼びました。その様な悪魔の策略に対してクリスチャンはどう対処すべきかも書かれています。今でも通用する手厳しいカトリック批判です。この様な問題を考えたいのであり、そうであれば他の問題など二の次三の次なのは当然のことなのです。法領域も三項図式も、論じる対象ではないのです。個人的な問題なのです。陰謀論批判は、この手の論議を封じ込める禁じ手です。ある人にとっての悪魔の策略は、ある人にとってはただの陰謀論としか見られなかったことは何度も体験しました。そしてその論議は終わってしまいました。他の人はmsg414の内容を真剣に危惧しているのでしょうか。そうでなければその危惧は本当になりますよ。美濃ミッション事件は今の日本の状況では再現されますね。これは判断の問題です。

□423 あなたの定義は適切でないので使っていません

ただのおじさん - 2004/08/14 00:52 -

結局、私の過去の発言を読んでいないのですね。
あなたはmsg409を承認せず、私はmsg409を前提として話を続けている。

あなたの定義を使っているのはmsg407だけだと思いますが、それはmsg414に書かれている状況を想定して使っています。それ以外はあなたの定義に対してはmsg409で疑問を出し、使っていません。第1、15の法領域など全く想定しておりません。そのようなものを全く想定しておりません。そこから違っているのです。

私は神学の話などしていません。もっと素朴に考えて下さい。もっと普通の人のレベルで考えて下さい。普通の人はあなたのようなことをいちいち考えてクリスチャン生活を送っていないし、悪魔や諸霊に関しても、信仰を通して見ているのであって、神学の理屈を通して見ているものではありません。

□421 諸霊の働きと陰謀論について（2）

[山谷](#) - 2004/08/13 23:53 -

ところで、今問題となっているのは、＜国家・社会・教会の一体化による悪鬼化＞が、現象として、現時点において、確認されるか、どうか、ということです。

そうして、世界の大多数の国において、国家・社会・教会の一体化という現象が観られない以上、＜バビロンの状況＞は、カトリック教会においては、起きていない、というのが、わたしの主張なのです。

ところが、フリーメーソン・イルミナティ陰謀論者の中には、秘密結社が世界の国家・社会・教会を秘密裡に掌握して支配しているのだから、すでに＜バビロンの状況＞は、表立って観測はされていないが、水面下ではすでに、存在している、と言うのです。

さて、もし、＜国家の絶対主権＞に関わる諸霊が、バビロン化を目指すなら、憲法を改悪せずには、一歩も事が進まないはずなので、彼らが事を起こせば、それは、必ず現象として確認されるはずなのです。なぜなら、キリスト者が目を光らせて注視しているからです。

さらにまた、＜社会の分散主権＞に関わる諸霊が、バビロン化を目指すなら、信条・言論・出版・集会・結社・学問の自由といった社会の自由を放棄して、事前検閲と報道規制を導入しない限り、一步も事が進まないはずなのですから、彼らが事を起こせば、それは、必ず現象として確認されるはずなのです。なぜなら、キリスト者が目を光らせて注視しているからです。

さらにまた、誘惑者であるサタンが、キリスト教会の指導者を誘惑して、教会の進むべき道を誤らせ、バビロン化を目指そうとするならば、政教分離という、宗教改革によって確立された原則を放棄して、国家と社会と教会を統合しない限り、一步も事は進まないはずですから、彼らが事を起こせば、それは、必ず現象として確認されるはずなのです。なぜなら、キリスト者、特に、プロテスタントが目を光らせて注視しているからです。

では、そのような、キリスト者の注視をすべてくぐり抜けて、すでに秘密裡に国家と社会と教会の一体化に成功していると言われているフリーメーソン・イルミナティとは、いったい何者なのだろうか？

わたしの立場から言えば、フリーメーソン陰謀論も、イルミナティ陰謀論も、「均衡した勢力を持つ二大政党制・強力な大統領権限を持つ大統領制・論拠不明の非難中傷を手法として容認する選挙戦」というくアメリカ合衆国特有の政治環境＞が生み出した、ひとつの文化的現象です。それは、空想の中にのみ存在するものであり、白人分離主義者の反ユダヤ言説の中で強化され、白人分離主義者のニュースレターによって、愛好家の内輪で流布されているものです。

このような、反ユダヤ言説は、当然のことながら、＜社会の悪鬼化＞の一現象として、キリスト者による批判を受けることとなります。

つまり、国家と社会がバビロン化を目指すなら、それは、必ず、注視しているキリスト者によって、それとわかるような仕方で、確認されるはずなのです。

そうして、国家と社会と教会が、陰謀によってすでにひそかに、目に見えて確認は出来ないような仕方で、すでにバビロン化されている、と主張するのであれば、そのような陰謀論そのものこそが、＜社会の悪鬼化＞の一現象として対象化されて、キリスト者による批判を受けることとなるのです。

■ 420 諸霊の働きと陰謀論について (1)

[山谷](#) - 2004/08/13 23:53 -

わたしは「諸霊の働きは、すべて、陰謀論だ」と言っているのではありません。むしろ、諸霊の働きが、国家であり社会である、というのが、新約聖書神学の世界観的パラダイムなのです。

諸霊の働きは、次のカテゴリーに分類することが出来ます。

(1) 位の霊、主権の霊、支配の霊、権威の霊

これらは、諸国家と諸政府の超自然的本質を成すところの悪鬼的天使的諸力であり、キリスト頭首権に由来する＜国家の絶対主権＞を主権領域において行使しています。

(2) ストイケイア、あるいは、宇宙の構成に関わる諸霊

これらは、パウロの用語で言うところの「この世を支配する諸霊」であり、キリスト頭首権に由来する＜社会の分散主権＞を、宇宙論的な15の法領域において行使しています。15の法領域のひとつである「信仰的領域」には、非キリスト教の諸宗教・ユダヤ教・律法主義に退落したキリスト教が含まれます。まさにそのゆえに、「キリスト者が律法主義に帰ることは、この世を支配する諸霊のもとに帰ることだ」とパウロは言っているのです。

(3) 人間を誘惑し、罪を犯させ、罪人を神の法廷に対して告発する、＜告発人＞としてのサタン

これは、ヨブ記に見られる概念で、サタンは、罪人を発見して神に報告する告発者としての役務を帯びて

いると共に、また、人間を誘惑して罪を犯させるという活動も行っています。

(4) 罪を犯した人間に、その罪を足がかりとして憑依し、苦しみを与える「悪霊」としての諸霊

これは、新約聖書に見られ、主イエスは、悪霊に憑依された人間から悪霊を追い出し、また、イエスの弟子たちも、イエスから委任された権威（エクソーシア）を行使して、悪霊追い出しを行っています。

以上が、わたしが新約聖書神学に基づいて想定している「諸霊」です。

■ 419 中立について (2)

山谷 - 2004/08/13 23:04 -

ところが、キリストが十字架において、全宇宙の悪鬼的天使的諸力を打破して、＜国家の絶対主権＞を司る位・主権・支配・権威も、＜社会の分散主権＞を司るストイケイア（宇宙の構成に関わる諸霊）も、キリストに対して従属させられ、キリストに奉仕する「しもべ」とされてしまったのです。このことは、コロサイ書において、＜武装解除され、キリストの勝利の行進において引きずりまわされ、さらしものになれた＞という表現で、触れられています。

そうして、これらの悪鬼的天使的諸力は、十字架によって打破されて、キリスト頭首権に対して服従させられ、キリストに仕えるしもべとして、＜国家の絶対主権＞と＜社会の分散主権＞を預かっているわけです。ただし、永遠に預かっているわけではなく、キリスト再臨の日まで国家と社会を統治するように、と、期限付きで委任されているわけです。

そうしますと、＜国家＞も＜社会＞も、＜武装解除されて／中性化されて、キリスト頭首権に従属している天使的諸力＞が支配しているわけですから、その意味では、国家も社会も＜キリスト的＞なのです。

まさにこのゆえに、キリスト者は、国家権力の命令に服従しなければならない、と、ローマ書13章で言われているのです。

そうしますと、国家は神に対して自立していないが、社会に対しては自立してる。なぜなら、国家は、位・主権・支配・権威が治める＜国家の絶対主権＞という法領域だからです。そうして、社会は、ストイケイアが治める＜社会の分散主権＞という法領域だからです。ここから、「社会は国家に対して自由であり、国家は社会の自由を侵害しない」という法領域不犯の原則が導き出されることとなり、こうして、憲法は、信条・言論・出版・集会・結社・学問の自由という＜国家に対する社会の自由＞を保障するものとなっているのです。

そうして、国家は神に対して自立していないが、教会に対しては自立している。教会は神に対して自立していないが、国家に対しては自立している。なぜなら、国家が、天使的諸力が統治する法領域であるのに対して、教会は、キリストをかしらとする＜宇宙的なキリストのからだ＞であるからです。ここから、国家は教会に介入せず、教会は国家に介入しない、という、政教分離原則が導き出されることとなります。

こうして、国家は教会に対して中立であり、教会は国家に対して中立であり、国家は社会に対して中立であり、社会は教会に対して中立であり、社会は国家に対して中立であり、教会は社会に対して中立である、という、三位一体的統治の概念図が導き出されることとなります。これは、カルヴァンの政治神学とも一致しています。

では、教会が国家と社会を支配していないのならば、キリストは何も支配していないことになるのだろうか？ 「教会が国家と社会をも完全に支配しなければ、キリストがすべてを支配していることにはならない」というのが、中世の教皇権の考え方であり、再建主義の考え方であり、さらにまた、＜バビロンの状況＞そのものの考え方であるわけです。

そうして、新約聖書神学の世界観的パラダイムにおける三位一体的統治の概念図は、＜キリストが十字架の勝利によって、キリスト頭首権により、武装解除された天使的諸力を使役して、国家と社会を「すでに」統治しておられるゆえに、教会が国家と社会を統治しなくても、キリストはすべてを・すでに・統治しておられる＞と観ているのです。

ですから、国家と社会が、教会に対して中立であっても、一向に問題はないわけです。

しかし、この状態が永続するわけではなく、キリスト再臨をもって、国家と社会の使命は終焉させられることとなります。

ですが、現時点においては、「神はすべての人が救われるのを願って、忍耐して、待っておられる」わけですから、その忍耐の期間である＜中間時＞の最中に、人類が滅亡してしまうことがないように、国家と社会という一般恩恵を提供することによって、社会の秩序と安寧の維持をしていくくださるわけです。

もちろん、天使的諸力は、ときどき悪鬼的本性を現すことがありますから、その都度、教会が「抑えるもの」として、国家と社会の悪鬼化を抑制するつとめにあらなければならないのです。

しかし、国家と社会と教会が、神に対して中立ではないが、各々に対しては中立であるというパラダイムが前提主義に照らして許されないのであれば、＜教会が国家と社会を征服して統治しなければならない＞ということになります。

そのラインで行けば、中世の教皇権、再建主義、そうして、＜国家と社会と教会の一体化＞という＜バビロンの状況＞の方向に進むことこそが、正しい方向、ということになってしまうのです。

■418 中立について (1)

山谷 - 2004/08/13 23:03 -

中立という言葉は、＜中性化された＞ともく武装解除された＞とも言うことが出来ます。これは、コロサイ書に見える、キリストの十字架の勝利によって、位・主権・支配・権威といった天使的諸力が＜武装解除された＞という概念から来ています。

新約聖書神学の世界観的パラダイムにおいては、＜国家の絶対主権＞（位・主権・支配・権威）と＜社会の分散主権＞（ストイケイア＝宇宙の構成に関わる諸霊）は、本質的に、悪鬼的性格を持ったものであるわけです。その由来は、人類墮落後に分裂した＜恩恵＞と＜自然＞との間に、神が＜緩衝地帯＞としての中間領域を設定したことに始まります。これが、エデンの園に至る道を守るために置かれた「ケルビム」（天使的諸力）と「剣」（国家権力）と言われているところのものです。

「神の子たち」と呼ばれる天使的諸力は、洪水前の世界において墮落し、悪鬼化しました。このことは、ユダの手紙において触れられています。

洪水後、神は、地表を分割して「神の子たち」の数に従い、割り当てました。これが＜領域主権＞の起源で、申命記において触れられています。バベルの塔から散らされた人類は、各領域主権に入って、従属する主体としての「国民」となり、こうして、諸国家が誕生しました。

＜領域主権＞を支配する悪鬼的天使的諸力については、ダニエル書で触れられており、「ギリシャの天使」とか「ペルシャの天使」と呼ばれています。

これらの天使的諸力は、悪鬼的でありながらも、神から＜国家の絶対主権＞としての領域主権と、＜社会の分散主権＞としての領域主権を委任されて、地上を統治しているわけです。なぜなら、人類が墮落したことによって、地の支配権が、人間の手から、天使的諸力の手に移されてしまったからです。このことについては、荒野の誘惑において、サタンが地上の諸国の栄華を見せて、「これらはすべて、わたしに任されているものです」と述べている通りです。

■417 中立があると思っているんだ！

ただのおじさん - 2004/08/13 22:15 -

>悪鬼化

中立の立場があると思っているからその様な表現が出るんだ。

だから私には違和感があったんだ。
中立の立場などないという前提主義の人間から見たら、悪鬼化、＜バビロンの状況＞などという発想自体出てこないんだ。
そうだ、そういうことなんだ！
ずっと違和感を感じていたその理由が今分かった！

□416 悪魔ってどういう存在と思っていますか？

ただのおじさん - 2004/08/13 22:11 -

現象面のみから見れば全ての目に見えない霊の働きなど陰謀論で全て片が付きます。
それを否定するには、悪魔に対する共通認識が必要です。

それにしても、現象面で見えないものは聖書に山ほどあるのに、それらを全て陰謀で片づけてしまっ
ては、聖書自体、キリスト教自体が陰謀論となってしまいます。それは非キリスト教徒からさんざん聞か
されたことです。
キリスト教なんて、信じない人間から見たら陰謀論なのです。霊とか神とかいった目に見えないもの
の存在を信じているわけですからね。ですから目に見えないものを現象面で見ると言ってしまうば、未
信者と変わりがありません。
どうも話がずれると思ったら、悪魔に対する考え方が違っているようですね。

>中国

>国家と社会と一体化して悪鬼化している

と見なして私の教派は中国に伝道しています。
他の国に対しては、山谷さんが異常なほど狭く悪鬼化、＜バビロンの状況＞を定義しているのであれば
山谷さんの定義ではその様な現象はあり得ないことになります。

>フリーメーソン・イルミナティ陰謀論を採用するしかない

これはもう神学の違いであり、どうしても見解のすりあわせようがありません。そちらの見解がど
う見ても決して聖書＜のみ＞に根拠した世界観によってなされた見解ではなく、特定の神学に依存
した見解であると判断せざるを得ません。霊の働きは現象だけを見て判断してはいけません。あな
たは悪魔の働きなどの諸霊の働きを全て陰謀論と退けています。それは非聖書的です。

>「国家の悪鬼化」「社会の悪鬼化」「国家と社会の一体化による悪鬼化」「国家と社会と宗教の
一体化による悪鬼化」「国家と社会と教会の一体化による世界規模での悪鬼化」を、すべて区別
して判断する必要があります。

なぜでしょうか？

それはあなたの神学にとっては必要でも、他の神学の人間にはそこまで厳密に分ける必然性はあ
りませ

ん。
繰り返しますが、霊の働きは現象面のみを見て判断してはいけません。あなたは悪魔の働きである、
神の
主権によって認められた悪鬼化、＜バビロンの状況＞に至る諸霊の働きを陰謀論と退けていま
す。それは
非聖書的です。諸霊の働きなど、現象面のみから見れば陰謀論でしかありません。再建主義の陰
謀論を意
識しすぎて、逆に霊的な面を全て陰謀論として退けているのではありませんか？

現象面のみから見れば、諸霊の働きなど陰謀論でしかないのは当たり前のことであり、何ら聖書
に反して
はおりません。

その考えでいけば、聖霊の働きの陰謀論と行うことができるでしょう。現象面のみから見れば、
聖霊の働
きだって、陰謀論と言って終わらせることができます。

発言を読んだ感想としては、結局、現象面で具体的に見えない諸霊の働きは、陰謀論でしかないと考
えているなということです。でも、具体的に現象面で見えてからでは遅いのです。

悪魔の働き、というのが神の主権の範囲内で認められており、それは人間の目から見ればとても神が承認

されたこととは思えないようなことも起こり得ます。それもあなたの観点から見れば陰謀論でしかありません。私たち信徒に神は、耐えられる範囲で、相当酷い訓練も課すことがあります。それも悪魔を使った神の主権による主の弟子としての訓練です。その訓練もまたあなたから見れば陰謀論でしかありません。それらの訓練という観点から見れば、

>「国家の悪鬼化」「社会の悪鬼化」「国家と社会の一体化による悪鬼化」「国家と社会と宗教の一体化による悪鬼化」「国家と社会と教会の一体化による世界規模での悪鬼化」

は区別することなどできるはずはないのです。
これも繰り返しですが、再建主義の陰謀論を意識しすぎて、現象面で見えないものを全て陰謀論で片づけているように判断できます。

それにしても他の人は悪魔をどのような存在として考えているのでしょうか？
これについて意見が聞けなければこれ以上の対話は無意味ですね。

415 カトリック問題

[山谷](#) - 2004/08/13 20:09 -

この掲示板で定義した厳密な意味での<バビロンの状況>は起きていない、というのが、わたしの不動の立場です。

これは、現象を観て判断した場合でも、聖書のテキストに参照した場合でも、そうなのです。
現象を観た場合、少なくとも、日本のカトリック教会は、国家と社会と一体化して悪鬼化しているような様相は、皆無です。
そうして、これは、台湾を観た場合でも、韓国を観た場合でも、北朝鮮を観た場合でも、中国を観た場合でも、同じく、皆無なのです。
<バビロンの状況>とは、世界規模のものなので、世界の諸国で、少なくとも極東の国々が該当しないのであれば、現在においてバビロンの状況は観られない、とすべきであろうと思います。

現象を観た上での判断を考慮せずに、どうしても<バビロンの状況>がすでに生起しているのだと主張したいのであれば、これはもう、フリーメーソン・イルミナティ陰謀論を採用するしかない、ということになります。つまり、日本国においては、表面上は<国家・社会・教会の一体化による悪鬼化>は観測されていないけれども、表面下の部分で、陰謀結社が国家と社会と教会を完全にコントロールしているのだ、という世界観的パラダイムです。こうなりますと、空想の世界へと入って行ってしまうことになります。

わたしは、このような観方は、<現経綸においては、不法の秘密の力を抑えているものがある>と言っている聖書テキストに反する世界観であると考えます。なぜなら、抑えているものである<教会>が、いまだ携挙されていないにもかかわらず、抑えの重石であるはずの教会が陰謀結社に占拠されて、もはや、重石としての機能を果たさなくなっている、と主張することになるからです。

これでは、聖書<のみ>に根拠した世界観ではなくなってしまいます。

次に、第二バチカン公会議と宗教多元主義の問題ですが、バチカン、プロテスタント及び諸宗教との対話路線に立ってはいらぬものの、<救いはカトリック教会を通してのみ与えられる>という立場は堅持し続けています。つまり、カトリック主義を放棄してはいらないので、その意味では、宗教多元主義ではないのです。

では、包括主義なのか？ということになりますが、カール・ラーナーの用語である「匿名のキリスト者」とは、包括主義を指しているわけではなく、キリストの受肉による<ケノーシス・キリスト論的・超自然的実存規定>によって、全人類が、キリストの救いへの召命に対する<応答可能能力>を獲得したのだ、と言っているに過ぎないのです。つまり、全的に墮落した人類が、福音に対して応答することが出来るようになったのは、キリストの受肉のおかげである、と、というのが<匿名のキリスト者>という用語の意味するところです。言い換えれば、<キリスト者になり得る可能性を、全人類が持っている>ということであって、非キリスト者が回心を経ずに自動的に救われる、ということの意味してはいません。

次に、北朝鮮、スーダン、中国、イスラム諸国におけるキリスト教迫害の状況ですが、これは、確かに、キリスト頭首権を濫用している、という意味では、＜国家の悪鬼化＞という状況であるわけですが、＜国家と社会と教会の一体化による悪鬼化＞という状況では、もちろん、ないわけです。なぜなら、これらの国々では、教会を締め出そうとしているわけですから。

そこで、現象を判断するにあたって、それが、単なる＜悪鬼化＞であるのか、それとも、＜準バビロンの状況＞に通じる悪鬼化なのかを、区別する必要があります。

このためには、「国家の悪鬼化」「社会の悪鬼化」「国家と社会の一体化による悪鬼化」「国家と社会と宗教の一体化による悪鬼化」「国家と社会と教会の一体化による世界規模での悪鬼化」を、すべて区別して判断する必要があります。

☐ 414 私は悲観論的であるかもしれない

けいじ - 2004/08/12 09:54 -

山谷さま

教会の悪鬼化についてのご回答、ありがとうございました。そして、ただのおじさんとの議論も読ませていただきました。

私は、その新約時代パラダイムにおいて、「終わりが近い」という信仰のゆえ、国家や社会の悪鬼化の側面をより強く見ていると思います。私は山谷さまと違って、WCCやローマ教皇は、中世のみならず現在においても、＜形を変えて＞準バビロンの状況を作っていると考えています。

第一に、彼らが唱えている教義的問題があります。第二バチカン公会議においては、ただのおじさんが言われるように、カトリック教理要綱が変わったわけではなく、むしろ、既存の要綱に加えて、宗教多元論がその中に浸透しました。このような状況の中で「キリストのみ」による救いを唱えれば、社会的制裁だけでなく、カトリックやWCCなどのキリスト教的組織からも、制裁を受ける圧力が、ますますかかっています。

第二に、現代諸国においては、政教分離を国是とする憲法による足かせがあるとのことですが、私はそのように世界的状況を把握していません。一つに、キリスト者の迫害状況のみに焦点を当てるにしても、前世紀ほど、殉教者が数多く出た時はありませんでした。北朝鮮、中国、スーダンなどなど、世界各国で、数百万単位でその信条ゆえに迫害、殺害されています。

もう一つに、見た目は、このような政教分離が行なわれている国々でさえ、信教の自由が保障されていない事例がたくさんあります。例えば、フランスでは、バプテスト系福音派神学校がカルト法の危険団体の中に加えられてしまい、徹底的な弾圧を受けました。そしてちょうど今朝も、ストックホルムの牧師が、同性愛が罪であると書かれている聖書箇所を引用したことで投獄された、というニュースを受け取りました。

そして今の日本の状況を見ましょう。足かせであるはずの憲法が改正されようとしています。改正自体は何ら問題ないですが、問題は中身です。S価学会もさることながら、自民党の憲法改正草案は、神道の非宗教化を行なっており、民主党の創憲草案の中間報告では、一神教の批判を公言し、多神教に基づく日本づくりを目指していることが分かります。

このような状況の中で、キリスト者が監視的、預言的声を挙げなければいけないのは、言うまでもありません。

私が気になることは、かつて宗教改革が、キリストのからだとしての監視的声が機能したと述べておられますが、戦時中の日本のキリスト教会ではまさに国家との一体化が行なわれました。ほんの数十年前の話です。そして現在も、そのような一体化が行なわれている国々が非常に多いことは前述の通りです。

空中携挙後のバビロンの状況は、全くその通りです。しかし、バビロンの台頭は、将来、先の話ではなく、今すぐにでも起こりえる、というのが、聖書的信仰ではないのでしょうか？主がまだ来られていない

けれども、今すぐにでも来られるかもしれない、という切迫的再臨信仰を持っていれば、です。

むろん、楽観的側面を無視してはいけないと私も思っています。日常の生活における国家・社会の神のしもべ的存在は、御言葉の中に書かれているように、最大限尊重しなければいけません。悲観的側面と楽観的側面の間で、常にバランスを保っていなければいけません。

□413 確かに日本でカトリックの影響は弱いかも知れない

ただのおじさん - 2004/08/12 07:51 -

>S価学会

日本においては、カトリックの悪鬼的状况は弱いものですが、S価学会はかなり悪鬼的存在であります。それより輪をかけて悪鬼的存在なのが、天皇制、国家神道であるというのが私の認識です。美濃ミッション事件の話をしたときに (msg 389)、日本国憲法を引用したのは、日本の憲法の中 (第1~8条) に、既に天皇制という明らかに悪鬼的な条項を入れているという点が問題なのだという意図を分かって欲しかったからです。もし日本の憲法に悪鬼化を防ぐ意味合いを持たせたければ、この8条までは全文削除しなければなりません。そうでなければ憲法の役割を果たせないからです。象徴天皇制という言葉には私は騙されません。これは明らかに国家神道に基づく天皇制を意味しております。そしてこの国家神道こそ、キリスト教国でない日本にとって最大の悪鬼なのです。厳重な注意と監視が必要です。日の丸君が代を学校において強制し、従わないものを行政処分にしたのはこの春でした。これこそ悪鬼そのものです。そしてこれらの悪鬼の働きに、カトリックの教えは賛同せざるを得ないのです。一部のプロテスタントもです。かつての美濃ミッション事件のように。ざっとこの位の意図程度は美濃ミッション事件を取り上げた理由として理解して欲しいです。カトリックの場合は日本ではそれほど強く悪鬼的な働きはしていません。

□412 カトリックの現状

HB - 2004/08/12 07:05 -

ただのおじさん、どうも

カトリック教会の現状はよく知らないのですが改革は現在も急速にされていると思います。しかし世界的陰謀の陰にカトリックやフリーメイソンなどの影があると聞くと二千年の歴史の中にそういう恐ろしいものが紛れ込んでいるような気がします。

世界のキリスト教会の約半分はカトリックですから直すべきものは直し正すべきものは正して欲しいものです。日本語の共同訳聖書はどのような方がどの程度詰めて出版されたのか知りませんが

不完全で不満に思っている人も多いですね。

政教分離については今日本ではS価学会の方が深刻な問題ですね。まさに悪鬼的状况になって来ていますね。キリスト教界はもっと発言し公明党を解散させ政界から追い出さなければいかんでしょう。言論の自由が守れるかどうかの正念場です。

□411 エペソ6:11

ただのおじさん - 2004/08/12 00:13 -

>そうではあっても<バビロンの状況>という言葉を使いたいのであれば、それは、もはや、ある特定の概念を指す用語としての役割を、果たせなくなってしまうでしょう。

それはあなたの概念でしょう。あなたが考える特定の概念を指す用語としての概念に過ぎません。その様な概念を表す用語としての役割を果たせなくなったからといってその様な表現を使うのは、同じ状況を指し示していることが前提になります。違う状況を同じ用語で使っていると考えるのが妥当でしょう。定義の確認をしてみるとどうやら指し示している現象が違うようですね。

結局、山谷さんは楽観的なのですよ。私の認識はもっと厳しいのです。

私の想定しているのはエペソ6:11以下です。

■410 日本の日常とバビロンの状況[山谷](#) - 2004/08/11 23:58 -

霊の戦い、あるいは、サタンの誘惑との戦い、という意味では、戦いは、キリスト者にとって日常的なものでしょう。

しかし、先に厳密に定義した<バビロンの状況>という意味においては、たとえば、<国家の絶対主権>について見れば、日本の政治は憲法に規定された政教分離で行われており、カトリック教会が支配の実権を持ってなどいません。<社会の分散主権>について見れば、朝日新聞も産経新聞もテレビ朝日もフジテレビも、何ら事前検閲や政治的規制を受けず、自由な報道を行っており、カトリック教会が言論統制を行ってなどいません。<キリストのからだ>について見れば、日本のキリスト教会の半分がカトリック、半分がプロテスタントで、プロテスタントのうち、アンチ・カトリックの保守的プロテスタントがある程度存在していますから、カトリック教会がすべての地方教会を支配してなどいません。

そうして、この状況は、ひとり日本のみならず、世界の大多数の諸国においてもあてはまることなので、わたしとしては、どう考えましても、カトリック教会が現時点において<バビロンの状況>にある、とは考えられないのです。

そうではあっても<バビロンの状況>という言葉を使いたいのであれば、それは、もはや、ある特定の概念を指す用語としての役割を、果たせなくなってしまうでしょう。

■409 物事を大きく見過ぎていませんか？[ただのおじさん](#) - 2004/08/11 23:38 -

私は、<バビロンの状況>や悪鬼化は何ら特別なものでもなく、『日常的なもの』であり、それらとの戦いの連続こそがクリスチャンの信仰生活であると考えています。

■408 国家権力に対する<楽観論>と<悲観論>[山谷](#) - 2004/08/11 23:06 -

国家権力の本質が、悪鬼的天使的勢力である、と見る点では<悲観論>であるわけです。

ところが、その悪鬼的天使的勢力が、キリストの出来事によって打破され、現経綸において、キリスト頭首権に服属させられ、キリストのしもべとして奉仕させられている、と見る点では<楽観論>であるわけです。

この、悲観論でもなく、楽観論でもない、言うなれば、<中間論>とでも言うべき観点。これこそが、<新約聖書神学の世界観的パラダイムに基づいた三位一体的統治の概念図・あるいは・メシア的中間時の中間領域>の、ユニークさなのではないかと思っています。

メシア的中間時においては、<キリストのからだ>が、国家権力の悪鬼化を阻止し、<憲法という「かせ」>を国家にはめることによって、国家がキリストのしもべとして奉仕し続けることを、保障しているわけです。それゆえ、わたしたちは、中間時においては、安心立命を得ることが出来るわけです。つまり、「いまだキリストの救いに与っていない、墮落した人類が、滅びることなく、秩序ある安寧な生活を維持することを保障する、神の恩恵」が、現経綸においては、提供されているのです。

確かに、中世期の国家権力と合体した教皇権など、<準バビロンの状況>というのは存在したわけですが、それは、<キリストのからだ>が阻止したことによって・つまり・宗教改革によって、歯止めがかかり、<新約聖書神学の世界観的パラダイムに基づいた三位一体的統治の概念図>に沿った国家・社会・教会の在り方へと、軌道修正されたわけです。

このように、メシア的中間時においては、わたしたちは、ある程度、心を安んじて楽観的でいられるわけですが、ただし、楽観的で居続けるためには、キリストの教会の世界的連帯による監視によって、常に、国家権力の悪鬼化を抑制し続けなければなりません。その絶えざる努力を払うことが、教会に課せられた、中間時のミッションであると思います。

もちろん、メシア的中間時が終了したならば・つまり・キリスト者が空中携挙されたならば、その時点以降、キリストが再臨するまでは、地上に残された人々は、もはや、楽観的で居続けることは出来ません。なぜなら、キリスト頭首権に服属していた悪鬼的天使的勢力が、その<かせ>すなわち、憲法による歯止めをかなぐり捨てて、露骨な悪鬼化を現し、<国家・社会・宗教の世界規模の完全一体化>というバビロンの状況を作り出すからです。

□407 厳密な定義でも

ただのおじさん - 2004/08/11 22:17 -

<バビロンの状況>であると思いますけどね。そしてその<バビロンの状況>をも神様は利用されているのです。

□406 楽観論

ただのおじさん - 2004/08/11 22:14 -

国家に対して楽観的に見ているというのが山谷さんの発言を見た第一印象。そんなにクリスチャンと自称クリスチャンに対する神様の篩い分けは生やさしくないでしょう。神様は悪魔すら利用なさるのです。人間が作った憲法くらい篩い分けに利用することなどわけのないことです。

□405 バビロンの状況を現実化するための条件

[山谷](#) - 2004/08/11 14:55 -

では、現代の国家・社会・教会をバビロンの状況に変えるためには、悪鬼的天使的諸力は、どのような条件をクリアすればよいのでしょうか？

まず、国家と教会を一体化させるために、政教分離を国是としている現代諸国家のほとんどすべての憲法を、改悪しなければなりません。

次に、社会と教会を一体化させるために、信教・言論・集会・結社・学問の自由を国是としている現代諸国家のほとんどすべての憲法を、改悪しなければなりません。その上で、物理的強制力を行使して、すべての宗教・学問・科学・マスコミを、国家教会の完全な統制下に置かなければなりません。

しかし、現代諸国家が<憲法>を定めている理由は、上記のような<国家権力の悪鬼化を阻止するため>であるわけです。

そうしますと、全世界の諸国家・諸社会・諸教会においてバビロンの状況を実現しようとするならば、ただちに<諸国家の憲法>が強力な歯止めとして機能して来るので、実現は、不可能ということになります。

ただし、<キリストのからだ>が携挙されるような状況になれば、国政・言論・学界・国内世論・国際世論におけるキリスト者の影響力が事実上皆無になるわけですから、立法府や憲法裁判所が<憲法改悪>を承認することが可能になり、こうして、世界規模でのバビロンの状況の進行が実現されると考えられます。

□404 <バビロンの状況>の厳密な定義

[山谷](#) - 2004/08/11 14:24 -

バビロンの状況、という言葉、今後、この掲示板では、次のような定義で使いたいと思います。

すなわち、「バビロンの状況とは、<国家・社会・教会>が、全世界規模において、完全に一体化し・かつ・悪鬼化している、すなわち、キリスト頭首権を濫用している状態を指す」。

この厳密な定義にあてはめた場合、現在のカトリック教会がバビロンの状況にあるということは、出来ないでしょう。

■402 カトリックは今でも<バビロンの状況>なのではないか？

ただのおじさん - 2004/08/11 05:15 -

今回は少し手厳しいです。

>カトリック側の自己改革

本当にそれはなされたのでしょうか？

下にリンクしたカトリックの公にされている教理を見る限り本当に意味では未だに改革されているとは思えません。

カトリックの人にも敬虔な人はいるでしょう。

でもそれと、カトリックがきちんとしたキリスト教に改革されているということとは無関係です。

聖書的には、黙示録の最初の方にある堕落した教会こそがカトリックであると堂々と主張している牧師先生はたくさんいます。しかしその状態が変わらないにも関わらず、カトリックの問題点を取り上げた本、批判した本はほぼ皆無です。これは危険な兆候です。

下のリンク先にあるカトリックの教理を見ると、第2の美濃ミッション事件が起きた時に、カトリックとカトリックと協力する教会は荷担して、その第2の美濃ミッションに非難を浴びせるでしょう。私の教会が第2の美濃ミッションになるのではないかと、というのが私の認識であり、それは当然のことであると考えています。

すなわち、カトリックは今でも<バビロンの状況>なのだという認識です。

そして一部のプロテスタントも<バビロンの状況>なのです。

かのロイドジョーンズはカトリックを、悪魔の最高傑作と呼びました（「キリスト者の戦い」より）。下の要理はそれを裏付けています。私にとって下のカトリック要理はキリスト教の教理とはとても呼べません。カトリックの<バビロンの状況>を明確に示したものです。

この点があるゆえに、私の教会はカトリックと新共同訳聖書を公に認めないのです。

[カトリック要理の友](#)

■401 教会の「躓き」の問題（2）

山谷 - 2004/08/10 23:29 -

キリストの教会が携挙された後に出現する<国家・社会・宗教>が一体化して悪鬼化した存在が「バビロン」であるわけですが、中世の教皇権の状態は、教会指導者が社会的指導者かつ国家指導者でもあるという、<バビロンの状況>であったわけです。

それゆえ、宗教改革者は、ローマ・カトリック教会を「バビロン」と名指しして非難したわけですね。

この宗教改革は、<国家と社会の悪鬼化を監視するキリストの教会の世界的連帯>として機能しました。宗教改革の進展により、政教分離が行われることとなり、プロテスタント諸教会においては、教会のバビロン化が阻止されることとなりました。カトリック教会も、対抗宗教改革を断行して体制を刷新し、これにより、バビロン化が阻止されることとなりました。カトリック側の自己改革は、「第二の宗教改革」と呼ばれる第二バチカン公会議において、大成されたと見る事が出来るでしょう。

つまり、中世において<国家・社会・宗教の一体化による悪鬼化>が、西欧において、ある段階まで進んだのだけれども、<キリストのからだ>が地上からまだ携挙されていなかったため、<キリストのからだ>による監視と抵抗権の行使によって、<国家・社会・宗教の一体化による悪鬼化>が、最終的段階に達する前で、阻止することが出来たわけです。

ここに、<悪鬼化を阻止する機能>としての、宗教改革、プロテスタンティズム、あるいは、御言葉による教会の刷新、の重要性を見ることが出来ます。

もし、＜キリストのからだ＞が携挙されてしまうと、歯止めなく、そのまま＜国家・社会・宗教の一体化による悪鬼化＞が、どんどん進んでしまうことになります。

■400 教会の「躓き」の問題

山谷 - 2004/08/10 22:48 -

確かに、西欧史を見るとときに、「キリストの教会もまた、悪鬼化したのではないか？」という見方が出て来るのは当然であろうと思います。

新約聖書の世界観的パラダイムに基づく三位一体的統治の概念図においては、＜ひとりの個人が、同時に、国民であり・市民であり・信者である＞となっています。

つまり、一個人が、＜国家の絶対主権＞に従属する主体としての＜国民＞であり、＜社会の分散主権＞に従属する主体としての＜市民＞であり、＜キリストのからだ＞に従属する主体としての＜信者＞であるわけです。

次に問題となるのは、＜社会の分散主権＞です。これは、＜宇宙論的な15の法領域＞（数的、空間的、運動的、物理的、生物的、感覚的、論理的、歴史的、言語的、社会的、経済的、美的、法的、倫理的、信仰的）に則して展開しており、その中のひとつに、＜信仰的法領域＞があります。

わたしは、改革派の神学者ヘンドリクス・ベルコフの『キリストと諸権力』からヒントを得て、＜社会の分散主権＞を司っているのは＜ストイケイア＞（宇宙の構成に関わる諸霊）であろう、と考えています。

そうしますと、＜信仰的領域＞とは、宇宙の構成に関わる諸霊（この世を支配する諸霊）によって支配されているところの＜諸宗教＞である、ということになります。パウロは、ガラテヤ書の議論において、キリスト教が律法主義に逆戻りすることは、この世の諸霊の支配下に逆戻りすることである、と述べていますから、＜信仰的領域のカテゴリーである諸宗教には、非キリスト教の諸宗教・ユダヤ教・律法主義に退落したキリスト教が含まれる＞と考えることが出来ます。

もう一つの問題は、パウロが新約聖書において、＜キリスト教会の指導者は、異教国家の支配下において、常に迫害を受ける存在＞であると考えていたのに対して、その後の歴史が進んだ方向は、（1）ローマ帝国がキリスト教を国教化し、教会指導者が社会的指導者となって、＜社会の分散主権＞に直接関与することとなり、（2）ローマ帝国が蛮族侵入によって滅亡し、教会指導者がゲルマン系諸国の政治顧問・行政官となって、＜国家の絶対主権＞に直接関与することとなり、（3）ローマ教皇が神聖ローマ帝国皇帝と政治的権力を巡って闘争したことにより、＜教会指導者が、社会的指導者かつ国家元首である＞という事態が生じたことです。

上記をすべて踏まえた上で、＜西欧史において悪鬼化したキリスト教会＞を分析するために、二つのアプローチが考えることが出来ます。

第一は、悪鬼的所業を行ったキリスト者が、＜国民としての従属主体＞か、＜市民としての従属主体＞か、＜信者としての従属主体＞か、いずれにおいて犯罪行為を行ったか、ということです。

第二は、悪鬼的所業を行うよう命じたキリスト教会が、＜キリストのからだ＞としてそれを命じたのか、＜国家の絶対主権＞としてそれを命じたのか、＜社会の分散主権＞として、すなわち＜信仰的領域のカテゴリーである諸宗教＞としてそれを命じたのか、ということです。

中世のポルノクラツィアを事例として見た場合、教皇がマロツィアという娼婦と関係を持ち、その間に生まれた子孫が次代教皇として着座し、マロツィアが「院政」という形で教皇の政治的・宗教的実権を握り支配した、という現象があったわけです。

＜キリストのからだ＞に即して見ると、教皇がマロツィアと断固とした継続的関係を持っていた時点で、パウロの手紙に照らして、すでに監督・長老としての資格を喪失していたわけであり、原則論として、教会は即刻教皇を免職しなければならなかったはずです。

ところが、そうはせず、＜キリストのからだ＞としての判断よりむしろ、＜国家の絶対主権＞としての判断、あるいは、＜社会の分散主権＞としての判断を優先させてしまった理由は、当時の教皇が、政治的指導者として、広大な教皇領を統治していたからです。新約聖書の世界観的パラダイムにおいては、ひとりの個人が同時に＜国民・市民・信者＞であるわけですが、中世的キリスト教のパラダイムは、これを上方向に逆転させて、ひとりの教皇が同時に＜国家元首・社会的指導者・教会指導者＞を兼ねる事態になってしまっていたわけです。

このような事態を、もういちど新約聖書の世界観的パラダイムの線にまで引き戻そうと試みたのが宗教改革であったわけであり、結果として、政教分離が行われたわけです。近代のドイツにおける文化闘争や、イタリアにおける教皇領廃止・コンコルダートも、同じ方向のものでしょう。

□398 キリストの独自性

けいじ - 2004/08/10 19:34 -

> そうして、また、民主主義の政体だから悪鬼的ではない、とか、立憲君主制だから悪鬼的だ、というのではなく、およそすべての国家権力は、潜在的に悪鬼的性格を秘めた天使的勢力であるのですから、どのような政体であれ、露骨な悪鬼化をする危険性を持っているわけであり、それゆえ、＜キリストの教会の世界的連帯による監視＞は、ある特定の政体だけでなく、およそ地球上のあらゆるすべての政体に対して、常に向けられていなければならないのです。

たぶん繰り返しの質問になってしまうかもしれませんが。あらゆる政体について世界的な教会の監視という概念は、「キリストの独自性」においてであれば、このことは非常にうなずけます。例えば、信仰の自由、特にキリストのご性質や働きの核心的部分を公に言い広めても、何ら国家的干渉を受けることはないことによって、その国家の悪鬼化が抑制されているリトマス紙になっている、という理解は、どうお考えになりますか？

□397 所謂"Christianity"と"Christendom"

けいじ - 2004/08/10 19:24 -

山谷さま

三つのご投稿によってかなり明快になりました、ありがとうございます。

さらにバビロンの出現のところで質問がありますが、私も、引き止めるものは教会を通しての聖霊の働きであるという解釈を取っています。つまり、キリスト教会が世の光、地の塩として地上で立てられている限り、不法の秘密が全開することはないと考えております。

ただ、宗教改革者らが取った解釈、また前説の聖書教師らが取っている解釈に、組織としての教会が形骸化し、世界宗教バビロンの中にその多くが取り込まれる、というものがありますが、それについてはどうお考えになりますか？

確かに、その宗教はキリスト教と名乗っていようと本質的な「教会」ではなく、社会領域での宗教にしか過ぎないのですが、主イエスの、天の奥義のたとえ（マタイ13章）に出てくる、毒麦のたとえとそれに続くからし種・パン種のたとえによると、いわゆるキリスト教世界に、悪いものが広がり肥大化すると考えられます。しばしば、キリストの花嫁である教会は「キリスト教」と呼ばれるのに対して、その肥大化した姿は「キリスト教界(Christendom)」と呼ばれます。

教会史を眺めれば、確かに悪鬼化の様相を呈している部分が非常に強く見て取れます。未信者の方から常に批判を受けるのはその部分であり、彼らが知らされている自然法に照らしても、常軌を逸した行為をキリスト教界が行ってきたことは事実です。そして現在も、同じ道を辿っていないとは決して言えず、むしろ大きな欺きがいわゆる「教会」の中で行なわれることは、テモテへの第二の手紙、第二ペテロ、ユダの手紙、ヨハネの手紙などで認めることができるものです。

この、聖書に内包されている教会内の諸問題は、山谷さんが提示されている新約世界のパラダイムでは、どのように説明されるのでしょうか？

396 国家の悪鬼化

山谷 - 2004/08/08 22:09 -

新約聖書の世界観的パラダイムに基づく三位一体的統治の概念図によるならば、ある特定の政体だけに悪鬼化の可能性があるのではなくて、およそこの地球上におけるすべての政体は、それが、代議制民主主義か、全体主義か、共産主義か、社会主義か、立憲君主制か、王制か、封建制か、プロレタリアート独裁か、開発独裁かを問わず、＜すべての国家権力に、悪鬼化の可能性がある＞ということになります。

さらにまた、すべての国家権力は、キリスト高举によって打破されて、キリスト頭首権に従属させられている天使的勢力（位・主権・支配・権威・ストイケイア）であるわけですから、＜すべての国家権力は、キリストのしもべであり、キリストの王権的統治を地上において代行する、神の代理人である＞ということになります。

ここに、国家権力は、＜神の代理人であり・かつ・悪鬼的である＞という、中間時の時制の特徴があるわけですね。

そういうわけですから、国家権力が法によって命じることは、その国家の政体が、代議制民主主義か、全体主義か、共産主義か、社会主義か、立憲君主制か、王制か、封建制か、プロレタリアート独裁か、開発独裁かを問わず、＜キリストが、その頭首権によって命じていること＞になるわけです。

たとえるなら、政体は何であれ、国家権力が法によって「赤信号を渡ってはいけない」と命じるのなら、それは、キリストが命じていることであるわけですから、「この政府は共産主義だから、赤信号を無視してもよい」とか「この政府は封建主義だから、赤信号を無視してもよい」ということは、わたしたちは言えないわけです。

つまり、民主主義の政体が命じることだから従うべきだ、とか、共産主義の政体が命じることだから従うべきではない、というのではなく、およそすべての国家権力は、キリスト頭首権に由来するものであるわけですから、わたしたちは、従うべきなのです。これが、ローマ書13章の＜中間時の中間倫理＞です。

そうして、また、民主主義の政体だから悪鬼的ではない、とか、立憲君主制だから悪鬼的だ、というのではなく、およそすべての国家権力は、潜在的に悪鬼的性格を秘めた天使的勢力であるわけですから、どのような政体であれ、露骨な悪鬼化をする危険性を持っているわけであり、それゆえ、＜キリストの教会の世界的連帯による監視＞は、ある特定の政体だけでなく、およそ地球上のあらゆるすべての政体に対して、常に向けられていなければならないのです。

395 バビロンの出現について

山谷 - 2004/08/08 01:40 -

黙示録で「獣」と言われており、テサロニケ後書で「不法の者」と言われているところの人物の出現は、テサロニケ後書2:6-8を読むと、＜彼を抑えているところのものが、取り除かれた時点以降＞ということになります。

聖書注解者によって、＜抑えているもの＞は、ローマ帝国を指すと考えるか、キリストの教会を指すと考えるか、見解が分かれるところですが、わたしは、「抑えているものとは、キリストの教会である」と考えます。

そうして、テサロニケ後書で＜抑えているものが取り除かれるとき＞とは、テサロニケ前書で言われているところの＜キリスト者の空中携挙＞であろうと考えます。

キリストの頭首権が、＜国家＞＜社会＞＜教会＞という三者に分岐することにより、キリストの祭司的王権的統治が地上に行われているという現経綸が＜中間時＞です。

この＜中間時＞においては、教会が＜抑えるもの＞として機能することにより、国家と社会の悪鬼化が抑制されることになります。

<中間時>が終了するのが、キリスト者の空中携挙の時点です。これにより、聖化のプロセスが完成して、すべてのキリスト者が、完全にキリストに似た聖なるものへと<栄化>されるからです。

空中携挙によって、地上から教会が取り去られると、<抑えるもの>がなくなった国家と社会は、その潜在的な悪鬼的性格を暴露させて、悪の極みの姿を現します。これが、<国家と社会が一体化したバビロン>です。

ところで、バビロンは、<国家と社会の一体化>であって、<国家と社会と教会の一体化>ではありません。

なぜなら、教会は、空中携挙されて地上から取り去られているのであり、地上には、もはや、<キリストのからだ>は残されていないからです。

そうして、<宗教>は、宇宙論的な15の法領域のひとつであるわけですから、<社会の分散主権>に帰属することになり、こうして、国家と社会と宗教の一体化という事態は、<国家と社会の一体化>という表現において含まれることになるからです。

□393 国家の悪鬼化と、人権・憲法・国際法

山谷 - 2004/08/08 01:16 -

「どの時点・段階で、国家は悪鬼化するのか？」という判断について、教会が誤る場合があるのではないかと、という御指摘がありました。

まず、大前提として、国家権力の本質をなす超自然的存在である<位・主権・支配・権威・ストイケイア>は、もともとが、悪鬼的天使的勢力である、ということがあります。

そうして、キリストが、受肉・贖罪死・復活・昇天の出来事によって、これら悪鬼的天使的勢力を全宇宙的に打破したわけです。

悪鬼的天使的勢力は、キリストの頭首権に服従させられて、キリストの再臨の日に滅ぼされてしまうのを、待っている状態に置かれています。これが、<中間時>という、現在の経緯です。

そうして、<中間時>において、悪鬼的天使的勢力は、いまだキリストの救いに参与していない人類が多く住む世界において、社会の秩序と安寧を維持するために、<キリストに仕えるしもべ>として、キリスト頭首権に由来する<国家の絶対主権>と<社会の分散主権>を使役して、神から与えられたミッションを遂行しているわけです。

そうしますと、国家権力が、神から与えられたミッションに違反する事柄を行い始めた時点・段階において、国家権力が<かせを脱ぎ捨てて、キリストに反抗し>（詩編2:1-3）その潜在的な悪鬼的性格を露見させたのだ、と判断することが出来ます。

では、具体的に、国家権力に課せられたミッションは何かと考えますと、それは、（１）社会の秩序と安寧の維持という目的のために、（２）主権領域において、（３）法を制定して、（４）物理的強制力をもって統治する、ということになるわけです。

（１）が、国家権力のミッションの中核です。

（２）は、ミッションを遂行する場所です。申命記32:8にあるように、神は地表を分割して、天使の数に従って割り当てられました。これが、国家権力が、キリストの頭首権に由来する領域主権を行使する場所としての<主権領域>（領土）であるわけです。

（３）は、<国家権力が、そのミッションの遂行のために、必要に応じて自由に国家の公法を定めることが出来る>（カルヴァン）ということですが、ただし、実定法は、必ず自然法によって批判されます。なぜなら、自然法は<盗んではならない・殺してはならない・偽証してはならない・姦通してはならない>など、時代や文化や民族の差異を超えて普遍的に共通する法であり、それは、神が人間の心に記した<神定法>であるからです。

（４）は、神が国家権力に対して与えた<剣>です（創世記3:24、ローマ13:4）。すなわち、法による統治を行うために、法に根拠し、法に規定され、法によって限定され、法に従って使用される、物理的強制

力・暴力です。

さて、国家がそのミッションに違反するという状況は、すべて、上記の（１）から（４）に関連する何か、であるわけです。

たとえば、国家が、社会の秩序の維持という任務を放棄する、とか、国家権力が社会の秩序を破壊し、市民生活の安寧を脅かす、というような場合。「国家権力による自国民の粛清・大量虐殺」が相当します。

また、国家が、その主権領域を越えて、他国の領域主権を侵すような場合。「国際法に違反した侵略行為」が相当します。

また、国家が、自然法に違反するような実定法を定めて、実行した場合。たとえば、他国船籍の商船を襲撃して他人の財産を奪取することを許可した大航海時代の「海賊法」や、他国民を拉致して強制労働に服させる・他国の紙幣を偽造して流通させる等、国家が自然法・国際法に反する行為を行うことを可能にさせるような法律です。

さらにまた、国家権力が、その物理的強制力・暴力を、法に根拠せず、法の限定を超えて、法の規定を無視して行使するような場合。「罰金を科す・財産を没収する・監禁する・拷問する・処刑する、などを、何ら法的根拠もなく行うこと」が相当します。

上記のいずれの場合も、国家権力が踏み越えた場合は、事態は明々白々であって、＜キリストの教会による世界的連帯による監視＞は、事実について正確な情報を得られてさえいれば、判断を誤ることは、ほばないであろうと思われます。

□391 ユダヤ人論

HB - 2004/08/07 13:44 -

明確なユダヤ人としての歴史はモーセに率いられての出エジプト、ヤハウエの選民教育からですね。ダビデ・ソロモン王朝の全盛期を経て、バビロン捕囚、帰還などを経て、ローマ帝国下のイエス・キリストの時代となり、マサダの要塞の抵抗を最後に世界に散らばり、20世紀の大戦争の世紀を経て現代に至っているのですよね。

それにしてもユダヤ人というのは不思議な民族ですね。日本人の十分の一ぐらいの人口しかいないのに、その中から世界史を大きく変えるような大科学者や大国際金融家を出しています。芸術家も多く出しています。超有名ユダヤ人の中でクリスチャンになった人、メシアニックジューはどなたかいるのですかね。

富井氏の日本・ユダヤ同祖論は面白いことは面白いのですが少し無理があるような気がします。

□390 もう少し具体的に話します

けいじ - 2004/08/07 08:59 -

時間を割いて、ご回答してくださり、本当に有難うございます。また質問、疑問を書かせていただきますが、お時間のあるときで結構です。

預言的な声についてのご説明、理解しました。二つの点で、質問・疑問があります。第一は、聖書的な観点からです。「現経緯」と言われているのは、具体的にどこまでを指しておられるのでしょうか？私も終末論は同じく前説に立つものですが、患難時代の世界では黙示録13章を読めば、獣（政治）と、もう一人の獣（宗教）、また額と手の刻印（社会）が一体となって、竜（悪魔）の支配下で統制されている状態が描かれていますが、その時代が来る時には、名目上の教会と国家と社会の一体化がなされています。

そして、もし終わりが近いという信仰であれば、その傾向や前兆は認めることができる、という立場になりますが、この点はどのようにお考えになっていますか？

第二に、具体的に挙げられたローマ教皇とWCCは、正直なところ、私ははたしていつも正しい判断を下しているのか分からないという疑念を拭えません。

「キリストを否む」ことについての憂慮や抗議は、絶えず預言的な声になることについてはすぐ理解できます。例えば、ただのおじさんが取り上げられている美濃ミッション事件については、私も、現在、戦後最大の危険な状況であると認識しています。

やはり、<人権>であるとか、<憲法>、<国際法>などの自然法については、人間に与えられている知識に限界がある以上、多様な解釈が出てきて当たり前ではないか？という思いが頭をもたげます。そうやって見れば、WCCの努力も認めることができるのですが・・・。

□389 美濃ミッション事件を忘れてはいけない
>国家の悪鬼化

ただのおじさん - 2004/08/07 06:47 -

天皇制にはその危険が含まれていると思います。クリスチャンは天皇制の危険性をしつこいくらい声を挙げ続ける必要があります。戦前の日本のキリスト教会が天皇制の取り扱いを誤ったのは歴史的事実ですし、今の日本の状況を見れば、戦後最大の危険な状況であると思われます。戦前、美濃ミッションを日本の教会が非難したのを忘れてはなりません。

[日本国憲法](#)

□388 一と多

[山谷](#) - 2004/08/07 00:55 -

新約聖書神学の世界観的パラダイムに基く三位一体的統治の概念図は、<一と多>という構造を持っています。

つまり、国家は、キリストの頭首権に対して自立していないが、社会と教会に対しては、自立している。社会は、キリストの頭首権に対して自立していないが、国家と教会に対しては、自立している。教会は、キリストの頭首権に対して自立していないが、国家と社会に対しては、自立している。

このように、キリストの頭首権において<一>であるのですが、国家は教会に対して自由であり、教会は国家に対して自由であり、国家は社会に対して自由であり、社会は国家に対して自由であり、社会は教会に対して自由であり、教会は社会に対して自由であるのです。

このような構造になっているわけですから、国家と社会と教会が、すべての問題について完全に一致した見解を持つということは、絶対にあり得ないことなのです。つまり、現経緯である<中間時>が続く限りは、国家と社会と教会が完全一体化して悪鬼化した<バビロン>のような存在は、出現し得ないのです。

ところで、国家も社会も教会も、キリストの頭首権について、それぞれ固有のミッションを課せられています。

国家のミッションは、社会の秩序と安寧の維持を、<国家の絶対主権>によって実現することです。社会のミッションは、社会の秩序と安寧の維持を、<社会の分散主権>（宇宙論的な15の法領域）によって実現することです。教会のミッションは、人類の救済と聖化を、<伝道・共同体の生活・奉仕>によって実現することです。

そうして、ミッションを見失う、あるいは、ミッションに反することを行ってしまう、という危険性が存在しているわけですから、国家と社会と教会は、お互いがそのミッションから逸脱することがないように、注意を払うわけです。このことは、カルヴァンも、その政治神学の中で触れています。

つまり、国家と社会と教会は、それぞれが、お互いに対して自由であるのですが、それぞれが、自分に課せられたミッションに対しては、つまり、キリストの頭首権に対しては、自由ではないわけです。そうして、三者のいずれかが、ミッションから逸脱した場合には、訓戒をし合うわけです。

教会が国家の悪鬼化に対して、抵抗権を行使するというのが、そのひとつであるわけですね。

しかし、キリスト者の共同体が、そのミッションから逸脱して、不法行為を行うような場合には、当然のことながら、国家がキリスト者の共同体を裁くことも、あるわけです。

ですけれども、＜中間時の中間倫理＞として、ローマ書13章に、キリスト者は国家権力に服従するよう命じられていますから、建前上は、キリスト者の共同体が不法行為を行うことは、ないはずなのです。

□386 預言的な声を上げるべき事態

山谷 - 2004/08/07 00:34 -

預言的な声を上げるべき事態というのは、限定されていると思います。

現経綸において、キリストの頭首権に服する天使的勢力（位・主権・支配・権威・ストイケイア）に課せられたミッションは、いまだキリストの救いに参与していない人々が、秩序ある安寧な生活を送ることが出来るよう保障すること、にあります。

このミッションを達成するために、国家は自由に国家の公法を制定することにより、領域主権をもって統治するわけです。

ところで、国家は、キリストの頭首権に服しているものであるのですから、その国家が、キリスト者に対して「キリストを否む」よう命ずるようなことがあれば、これは、国家の悪鬼化という事態に相当するわけです。

さらに、国家は、社会の秩序と安寧の維持を行うことが使命なのですから、その国家が、社会の秩序を乱し、市民の安寧な生活を脅かすようなことがあれば、これもまた、国家の悪鬼化という事態に相当するわけです。

これに加えて、国家が制定する実定法は、それに対して上位に位置する自然法によって批判されるわけですから、その国家が、自然権に反し、自然法に反する法を定めようとするようなことがあれば、これもまた、国家の悪鬼化という事態に該当するでしょう。

歴史的には、このような国家の悪鬼化が幾度となく起こって来たために、キリスト者は、＜国家と国民の間で結ぶ政治契約である憲法によって、国家権力を制限する＞というシステムを、確立して来た経緯があります。

ですから、現代国家はすべて、憲法によって、（１）信教の自由、（２）人権の尊重、（３）国際法の遵守、という三つの基本原則に必ず立っているわけです。

この三つの基本原則のどれかについて、著しく違反するようなことがあり、国際世論の批判によっても政策を改めようとしなない場合には、つまり、国家が憲法という＜かせ＞をかなぐり捨てようとするような場合には、その国家が悪鬼化しつつあると判断されるわけです。

明白な憲法違反が行われており、そのために、社会の秩序と市民生活の安寧が脅かされているような状態。これが悪鬼化の事態ですから、世界的な教会の監視のための連帯が、これについて＜判断を見誤る＞というようなことは、まずないであろうと思われます。

□385 補足

けいじ - 2004/08/07 00:30 -

下の投稿についての補足ですが、私が、世界的組織そのものが悪鬼化する懸念の聖書的根拠は、バベルの塔にあります。主が、人に「地に満ちよ」と命じられたのにも関わらず一つのところに集まり、天に到達しようとした、その動きです。

パウロはアテネにいる人々に、こう言いました。「神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出し

て、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。
（使徒17:26）」人々がローカルなところにおいて統一見解を出せない、この弱さが、逆に神の前でのへりくだりにつながっている、という見方です。

異論や別の視点が御座いましたら、ぜひ教えてください。

☐384 世界的な教会組織

けいじ - 2004/08/07 00:12 -

山谷さま、ご回答ありがとうございます。

さらに疑問が生じましたが、それは教会組織の聖書における位置づけです。

基本的な教理を学ぶときに、教会とは、「目に見えないキリストの体」と、制度や組織としての「目に見える教会」の二つがあると教えられますが、私もそのように信じています。目に見えないキリストの体は普遍的であり、既にキリストのうちにある者はすべて一つになっているけれども、組織として世界的に一つになることの意義が理解できていません。

そしてもう一つの質問は、その連動的動きの中でその見解自体に間違いが生じる可能性はないのか？ということです。どうしても、教会史に見るカトリック教会を中心にした政治関与に否定的な印象が付きまとうのですが、つねに預言的な声でいられる保証はどこにあるのでしょうか？

また教会は、一つでありかつ多様な存在です（1コリント12章）。すうすると、ニカイア公会議のような、キリスト論を中心にした基本教理一致なら理解できますが、政治領域においても一致を求めるとき、この多様性を殺してしまう危険が出てくることはないでしょうか？

一言でいえば、預言性よりも、政治性が強く出てくることへの懸念です。もっと肯定的、積極的視点があたりでしたら、ご教授していただけると幸いです。

☐383 パレスチナ問題と世界教会協議会

[山谷](#) - 2004/08/06 23:32 -

8月5日発行の世界教会協議会（WCC）ニュースによると、エルサレムのローマカトリック司教、ルーテル教会監督、ギリシャ正教主教が、ヨルダン西岸のキリスト者とイスラム教徒のコミュニティーを訪問し、そこで行われているWCCの地域開発支援プログラムを視察した、ということです。ナブルスでは、イスラエル及びパレスチナのキリスト者とイスラム教徒の平和的共存関係を築くためのプログラムが行われています。

こうした、現場の人道的プログラム担当者が、地域住民の声や情報を収集し、それらが、報告書として、WCCの委員会に上げられることになります。国際法や人権問題、人道支援の専門家が、そうした報告書を検討し、国家の露骨な悪鬼化というような事態が確認される場合には、＜預言者的な声＞としての抗議の声明の準備に取りかかることになるわけです。

[世界教会協議会 パレスチナ・イスラエル・エキュメニカル共同実行プログラム](#)

☐382 加筆訂正

[山谷](#) - 2004/08/06 23:11 -

けいじさまのログNo.379の指摘を受けて、小論中の事実誤認の部分を書き直しました。また、それ以外の部分にも、加筆しました。

[ユダヤ人問題について](#)

381 教会による監視について

山谷 - 2004/08/06 22:04 -

重要なのは、＜キリストの教会の**世界的な**連帯による監視＞であると思います。

そうしますと、教会の＜預言者的な声＞とは、ローマ教皇、世界教会協議会、世界福音同盟による、憂慮の声明というかたちをとることになります。これは、そのカバリングの下にある数十億人の人々に対して必ず何らかの精神的影響を与えますし、また、国際的世論の形成にも直接的に寄与しますから、悪鬼化した国家が「無視する態度」を決め込んでいるとしても、教会が預言者的な声を挙げ続けるならば、それはやがて、ブローのように、後からじわじわと効いてくることになると思います。

預言者的な声を挙げるにあたっては、教会が、キリストをかしらとする＜宇宙的なキリストのからだ＞であるゆえに、＜からだにおける一致＞をもって声を挙げるのが重要な意味を持つことになります。

残念ながら、キリストのからだは諸教派に分かれている現状ですが、それでも、ローマ教皇、世界教会協議会、世界福音同盟は、可能な限り最大の一致をもって、行動することを可能にするものです。

日本のキリスト教会だけの声明、あるいは、米国のキリスト教会だけの声明である場合は、ローカル・チャーチとしての独自の見解が色濃く反映されますから、当然、双方の声明が対立する場合があります、それは、＜世界的な、からだの一致＞における声明にはなり得ません。

380 考えさせられたこと

けいじ - 2004/08/06 09:20 -

続けての投稿、失礼致します。

ユダヤ人問題のご小論で、例話として、最後のウォッチマン・ニーの中立的（あるいはキリスト頭首的？）立場の祈りを読んで、いろいろ考えさせられました。現実の政治・社会の生活の中で、キリスト者の政治的立場はどのように取れば良いか、についてです。

「キリスト者にとっては、ユダヤ人国家も、アラブ人国家も、いずれも相対化され、キリスト者はそのどちらにも属せず、組せず、対等に取り扱う、ということになります。」について、そのとおりだと思いました。けれども、私たちが知りえる情報には限界があり、また、自分が依拠している情報のプールによって、自然法、自然権、人道などに照らしても意見が異なる場合は、どのように解決したらどうでしょうか？

キリスト者の間でも、例えば、フェンス分離問題は、イスラエル一般市民に対する無差別テロとその被害者の情報を得ている人は、これに賛同、同情する人たちがいます。そしてパレスチナ人一般市民の生活の不便の情報を沢山得ている人であれば、この問題に抗議の声を上げます。

けれども、教会組織がキリスト者の声として、一つの政治的意見を発表しています。かつての湾岸戦争にしても、イラク戦にしても、日本のキリスト教会と米国の教会では、正反対の発表が出ました。

そしてもう一つ、他の国々と同様、日本国民は民主主義国家の中に住んでいます。政党政治があり、国民主権が謳われています。自然法に従えば、どこかの政党や政治家に投票する権利、また義務があります。そこで同じキリスト者でも、その意思表示にかなり大きな幅があります。例えば、憲法九条を平和の原則としてとらえ、社会党などの政党に投票するキリスト者もいれば、北朝鮮などの脅威から、国民の生命・財産を守る義務が国家にあると考える人は、自民党などの保守政党に投票するキリスト者もいるでしょう。

かつてリバイバル新聞で、北朝鮮拉致被害者救出運動の中心にいる西岡力氏へのインタビュー記事が掲載されていました。彼は詩篇の箇所を取り上げて、「すべてのことを人間には知らされていない。知りえないことを謙虚に受け入れながら、かつ、神の義であると自分に知らされていることに忠実になる。」ということをおっしゃられていました。

また、彼の所属する教会は、彼のために祈ることを教会の週報に載せてお願いしていますが、彼の思想や

政治的立場については特に言及せず祈っているようです。私はこのような謙虚な姿勢にキリスト者の模範を見えています。

まとまりのない文章で申し訳ありませんが、山谷さまは、教会組織が監視的役割を果たすために抗議の声を挙げることに、それでも自然法などにある知識の限界から生じる意見や見解の違いが出てくることについて、どのようにお考えになっているか教えていただければ、と思ひまして投稿しました。

■379 ユダヤ人問題について

けいじ - 2004/08/06 08:21 -

「ユダヤ人問題」のご小論、ざっと読ませていただきました。示唆に富むものでした。ちょっと事実関係で確認したいのですが・・・

> ユダヤ人国家であるイスラエルの独立宣言が行われた翌日に、周辺のアラブ諸国が武力侵攻を行い、これに対してイスラエルが勝利して、アラブ人国家の領土を占領下に置きました。これが、「ヨルダン西岸」です。

1948年の独立戦争によってではなく、1967年の六日戦争によってイスラエルがヨルダンから西岸地域を取った、と記憶しています。領土地図のサイトをリンクしました。

<http://tokyo.mfa.gov.il/mfm/Web/Main/pic.asp?pic=29216.jpg>

■378 ユダヤ人問題

[山谷](#) - 2004/08/06 01:07 -

ユダヤ人問題についての小論を、アップしました。

[ユダヤ人問題について](#)

■377 憎しみには警戒しなければならない

3 3 4 - 2004/08/05 18:32 -

もう一言、投稿させてください。m(__)m

富井氏曰く・・・

「これまでの私の体験では、我々の働きに対して真っ向から反対したり、批判する人の身の上にはあまり良いことが起こらない。

8年前に、パソコン通信上で私の語るポスト・ミレを批判していたある人について、最近彼を知る人から入ってきた情報によればその後自殺したという。

友人のK氏のやることなすことに文句を言って困らせ、反抗していた奥さんは最近神経の病気になり、まったく体が動かせなくなった。

私の知り合いで、私の伝道活動に猛然と抗議した人が最近倒れて入院し、心臓が本来の30%しか機能していない。」

この手の話は、某新興宗教（キリスト教とは無関係）の教師が好んでしていました。新興宗教の教師の中には、退会しようとする者や、教えに異論を唱える者に対して、このようなことを言う人が少なくありません。

しかし、そういったことが事実であったとしても、そのことが富井氏や某新興宗教の教師の正しさを証明

することにはなりません。

彼らが病気になったり自殺したりするのは、それぞれに別の原因があったからだと思います。

そしてこの種の、いわゆる「裁き」は、山谷先生に悪意をもって猛反発する人にも起こり得る事です。

たとえば、ある人が山谷先生の意見に反対し、山谷先生に悪意を抱き、毎日いやがらせの電話を掛けたり、脅迫状を送り付けたりしていたとします。

その人がある日突然、事故で亡くなったとしても、不思議ではありません。心を憎しみで満たし、毎日特定の人間に対して悪意を抱き続ける異常な精神は、それをやめないかぎり、いつかは破滅する運命にあります。

そういう例を、私は教会でも見てきましたし、非キリスト教的領域（世俗の職場）でも見てきました。

「敵をも愛する愛」が、何を意味するにせよ、激しい悪意を持って人を憎むことは、常に悪い結果をもたらします。

しかし、山谷先生が再建主義を批判なさることは、「悪意」や「憎しみ」から行なわれているのではありません。

ですから、富井氏の「呪い」（笑）が、山谷先生に降りかかることはないのであります。

「批判すること」と「憎むこと」とは違いますのでね、富井さん！

ちょっと、流れと違うことを書いてしまいました。すみません。

■376 ユダヤ人の力

HB - 2004/08/05 12:19 -

>372.373

山谷さんのまとめ方のうまさにはいつも感心させられます。短時間でこれだけ要領よく、分かりやすくまとめる力は凄いですね。

ところで今

世界各地に居住しているユダヤ人の総人口は約1,400万人だそうです。そのうちアメリカ合衆国に約590万、次いでイスラエルに約340万、そしてソ連におそらく250万前後。この上位三国に続いてフランス・アルゼンチン・イギリスが50～40万、残りの70～80万がその他の世界各地に。日本にも約1,000人が定住していると言われています。

二千年かかってこのうちクリスチャンになっているいわゆるメシアニックジューは何%でしょう。10%もないでしょう。ユダヤ人が地球の未来の鍵を握っていることは間違いありません。金満ユダヤ人を中心とした想像を絶する911などの大陰謀があったとしても我々はただ神に任せておくしかないのでしょうか。黒幕は国際法廷に引き出して裁かないといかんでしょう。

気が遠くなるような難題ですが我々異邦人クリスチャンがやらなければならないことでしょう。

■375 貢献と弱点

けいじ - 2004/08/04 23:08 -

>メシアニックジューの新約解釈法は、新約聖書の複眼的構造をより明らかにすることになり、結果として、福音の豊かさがもっと認識できるようになる可能性があります。

>しかし、メシアニックジューの新約解釈法によって、<異邦人キリスト者宛ての文書9巻>までもがユダヤ的視点に沿って平板化されてしまいますと、パウロが常に悩んでいた「異なる福音に逸れていく」と

いう初代教会の問題が、現代において復活してしまう、ということになりかねません。

私も上の評価に同感です。福音に豊かさをもたらすという、キリスト教会への貢献がありますが、それ以上のものをこの運動に求めると、何かがおかしくなると感じます。

□374 陰謀と陰謀論の違い

けいじ - 2004/08/04 22:44 -

この掲示板をご覧になっておられるのでしょうか、富井さんが、陰謀論について馬鹿にするクリスチャンについての批判を加えておられます。

もちろん、陰謀は存在します。聖書の中に沢山、陰謀を企んでいる者たちが登場します。多くは、その背後に悪魔がいます。

けれども、聖書の世界観では、その悪魔でさえ、神の許可なしには何もすることができない、ある意味で神のしもべの存在です。神と悪魔は比類できないほど違います。悪魔の仕業は、圧倒的な神の主権の中で完全に組み込まれています。

陰謀論は、この聖書的世界観の悪の部分だけを敷衍化させ一般化させた世界しか提示しません。ここに間違いがあります。

このこと関連しては、山谷さまが下のリンクで既に論じておられますね。

http://www.salvos.com/makotoyamaya/historical_theoly.htm

□373 複眼的視座とメシアニックジュー（2）

山谷 - 2004/08/04 22:37 -

もし新約聖書正典に「複眼的構造」が存在するならば、キリスト教神学の課題は、＜異なる視点をいかに統合するか＞ということになるわけです。

おそらく、「二つの異なる視点を、異なるままに左右に配置して、神の栄光という一点でバランスを取ろうとする」というカルヴァンの＜アーチ構造の神学＞が、ひとつの回答であるのでしょうか。

また、「二つの異なる視点を、時間軸の上において、転機的聖化と漸進的聖化として展開させようとする」というウェスレーの＜聖化の神学＞が、もうひとつの回答であるのでしょうか。

そうして、二つの異なる視点を時間軸において展開させるという方法を、カルヴァンの神学に補足的に追加したのが＜契約神学＞であり、また、時間軸を前後にずっと引き伸ばしたものが＜ディスペンセーション神学＞であろうと思うのです。

新約聖書正典成立後、ユダヤ人キリスト者共同体は、エルサレム教会の弱体化と共に、歴史の舞台から姿を消して行ったわけですが、近年のメシアニックジューのリバイバルは、消滅したユダヤ人教会の現代における復活を意味することになるでしょう。

しかし、メシアニックジューは、当然のことながら、ユダヤ人キリスト者共同体の視点に立って新約正典を読もうとします。ですから、そこにどうしても、＜パウロの言葉を水で薄めて割り引くような解釈法＞が提示されて来ることになるのです。わたしはそのことを、『ハーザー』誌に掲載されたメシアニックジューのローマ書講解を読んで、強く感じました。

メシアニックジューの新約解釈法は、新約聖書の複眼的構造をより明らかにすることになり、結果として、福音の豊かさがもっと認識できるようになる可能性があります。

しかし、メシアニックジューの新約解釈法によって、＜異邦人キリスト者宛ての文書9巻＞までもがユダヤ的視点に沿って平板化されてしまいますと、パウロが常に悩んでいた「異なる福音に逸れていく」という初代教会の問題が、現代において復活してしまう、ということになりかねません。

神学の強固な伝統を持つ改革派諸教会が、再建主義に向かうことは、すでに、あり得ないことが、現時点において明らかになってきています。

しかし、神学的に弱い単立カリスマ系の教会が、現在、いとも簡単に再建主義に飛びついてしまっています。そうして、やはりカリスマ的であるメシアニックジューが、律法重視の視点から再建主義へと向かうのは、実に簡単なことだと思われます。すでに、その傾向が見られていると言ってもよいかもしれません。こうして、カリスマ系異邦人教会とカリスマ系ユダヤ人教会の協同による再建主義運動という勢力が、今後登場する可能性が大いにあるでしょう。これが結果としてもたらすものは、＜新約聖書正典の平板化＞と＜単眼化＞です。

この動きに対して論陣を張って抵抗する使命が、カリスマ的ウェスレアン・アルミニアンの前千年期再臨論者には、特に課せられていると思います。

■372 複眼的視座とメシアニックジュー（1）

山谷 - 2004/08/04 22:37 -

みなさまのログで、事象に対して＜複眼的視点＞を持つことの重要性が言われました。また、＜メシアニックジュー＞をどう捉えるかという問題提起が言われました。

以下、複眼的視座の問題と、メシアニックジューの問題を、関連付けて考えてみたいと思います。

わたしは、新約聖書正典の配列において「複眼的構造」を見ることが出来るのではないかと思います。新約聖書の複眼的構造に着目するなら、無理やり聖書を平板化して解釈して、それがためにあちこちで齟齬を来たすような事にはならないであろうと思うのです。

オーストラリアの聖書学者J・シドロウ・バクスターは、『旧新約聖書全解』において、新約正典の配列を、＜異邦人キリスト者に宛てられた前半の9巻＞と＜ユダヤ人キリスト者に宛てられた後半の9巻＞と、その間に挟まれた＜個人宛の4巻＞、これに四福音書と使徒言行録を合わせて、合計27巻を構成している、と見ています。

異邦人キリスト者宛ての文書と、ユダヤ人キリスト者宛ての文書を読み比べて見ますと、同じキリストの救いの出来事を見ているわけですが、視点の違いがあることが判ります。典型的に対比されるのが、ローマ書とヤコブ書です。

この視点の違いが、キリスト教神学における＜福音と律法＞、＜予定と自由意志＞、＜恩恵と自然＞、＜旧経綸と新経綸＞というような、対立的な論点を作り出している、と考えることが出来るのではないのでしょうか。

これは、聖書を「真理の命題の箇条書き」と見るよりは、むしろ、「ホログラム」のようなものとして見ようとする考え方です。

この問題については19世紀にチュービンゲン学派が、初代教会において＜異邦人教会の視点＞と＜ユダヤ人教会の視点＞が併置されることとなった、その正典成立過程を分析しています。現代カトリックでは、第二ヴァチカン公会議後の代表的な神学者であるジャン・ダニエル・枢機卿が、初代教会において＜異邦人教会の視点＞と＜ユダヤ人教会の視点＞がどのように編纂され正典化されたかを、教会史家として分析しています。

■371 ガラテヤ6章16節について

けいじ - 2004/08/04 15:22 -

下にリンクされている、富井氏のメシアニック・ジュー批判の投稿を読みましたが、解釈がかなり偏っています。

第一に、新約聖書において「イスラエル」という言葉が出てくる箇所にて、ユダヤ人・異邦人信者によっ

て構成される教会ではなく、全てが「民族的・国民的イスラエル」であります。

マタイ2:6;2:20;2:21;8:10;9:33;10:6;10:23;15:24;15:31;27:9;27:42

マルコ12:29;15:32

ルカ1:16;1:54;1:68;1:80;2:25;2:32;2:34;4:25;4:27;7:9;22:30;24:21

ヨハネ1:31;1:49;3:10;12:13

使徒

1:6;2:22;2:36;3:12;4:10;4:27;5:21;5:31;5:35;7:23;7:37;7:42;9:15;10:36;13:16;13:17;13:23;13:24;21:28;28:20

ローマ9:4;9:6;9:27;9:31;10:19;10:21;11:1;11:2;11:7;11:25;11:26

1 コリント10:28

2 コリント3:7

2 コリント3:13;11:22

エペソ2:12

ピリピ3:5

ヘブル8:8,10;11:22

黙示7:4;21:12

これだけ、というより、すべてが物理的なイスラエルを意味しています。

第二に、唯一、ガラテヤ6：16しか、イスラエルは霊的なクリスチャンを示すかもしれない箇所を見つけることはできないのですが、この箇所ですえ、教会であるという解釈になるかどうか疑問が生じます。

この箇所は新改訳などの日本語訳では、「神のイスラエル」の手前を「つまり」「すなわち」と訳していますが、ギリシヤ語の"kai"を文法的に同格であると考え根拠はありません。「そして」とか「また」と普通に訳して良いところです。

したがって、「この基準に従って進む人々と、また神のイスラエルの上に、平安とあわれみがありますように。」ということになり、ここの神のイスラエルは、ガラテヤ書で断罪されているユダヤ主義者のような者たちではなく、パウロのように、恵みによって選ばれた残された者たち（ローマ11:5）すなわち、パウロのようにユダヤ人であつイエスをメシヤであると信じている人たちを意味することになります。

☐ **370** 時足らずで誤解させてしまいました

けいじ - 2004/08/04 14:48 -

> 掲示板の上に書いてある注意書きをお読み下さい。真剣な憂慮を持つにはそれなりの理由があるので
す。

私が話しているのは、再建主義者の人たち（また共産主義、陰謀論者など）に一樣に見られる、攻撃性の
ことです。ここの掲示板で憂慮している人々の意見に同感・同意している者です。

したがって、下の文をこう訂正します。

「山谷さまや他の方々は、純粋な神学議論を展開されていますが、再建主義者らにある一種の攻撃性が、
その神学あるいは理論体系の中に内包されている、という点も見逃せないと思っています。」

☐ **368** メシアニックじゅーについて

ただのおじさん - 2004/08/04 12:59 -

山谷さんとは意見が違っても知れませんが私の見解を述べておきます。

私の立場はディスペンセーション主義ですので、イスラエルと教会は混同しません。簡単にはmsg 303
に書いてある通りです。

その立場からすれば、ユダヤ人もまずキリスト教の福音を信じて救われるべきであり、それに尽きると思
います。私の教派の大本は米国の団体ですが、ユダヤ人伝道にも力を入れているそうです。私たち人間が
救われるべき福音は1つであり、それはローマ書にもあるように異邦人、ユダヤ人の区別はありません。

■367 具体的に仰って下さい

ただのおじさん - 2004/08/04 12:51 -

>一種の攻撃性が

掲示板の上に書いてある注意書きをお読み下さい。真剣な憂慮を持つにはそれなりの理由があるのです。更に言えば、具体的にどのような攻撃性があるのでしょうか？ただ漫然と「一種の攻撃性」と言われてもそれだけでパッと何を言っているのか分かる人はなかなかいないと思います。私もあなたが「攻撃性」という言葉で何を示しているのか理解できません。具体的に何なのか仰っていただけないでしょうか？そうでないと話のしようがありません。

■366 神学者たちの見解は？

ただのおじさん - 2004/08/04 12:42 -

>セオノミーとは異なるセオクラシーの確立

この掲示板でも名前のあがった神学者たち、カイパー、ドーウィウェルト、シェイファー、ヴァンティル、フレイムといった神学者は、この点に関してどういう見解を持っているのでしょうか？

■365 メシアニックジューについて

HB - 2004/08/04 11:53 -

どうも、私は富井氏のキリスト教再建主義を勉強している者です。山谷さんはユダヤ人（イスラエル人）のクリスチャンをどう思われますか。今のイスラエルでどのような活動をしているのでしょうかね。シャロンには反対していると思いますが・・・。

<http://tak0719.hp.infoseek.co.jp/qanda3/462yWWEMQUXUA23699.htm>

■364 共産主義と再建主義

けいじ - 2004/08/04 10:34 -

はじめました、いつも聖書世界観の説明を読んで勉強しています。

ところで、投稿番号343の「再建主義と陰謀論」コメントに興味を持ちました。陰謀論にはまる人は元共産主義者が多い、とありましたが、最近の反米論調に陰謀論が多用されているので、なるほどと思いました。

一つの社会事象を見るときに、相対的、いや複眼的含みを持たせた見方ができず、数学や物理学のごとくすべてを白黒に分け裁断する傾向が、共産主義者、陰謀論者、そして再建主義者に特徴的に見るものです。

彼らが自らが義を行なっていると思っているため、自分に同意しない人を、とことんまで糾弾します。それを彼らは様々な理屈をつけて、自らが完全に正しいと証明できるまで行ないます。（例えば、スターリン・毛沢東・ポルポト、日本の学生運動にあった特徴ですが、陰謀論を受け入れてる人にも再建主義者にも特徴的で、一言異論を言えば、十倍の反論が矢のごとく飛んできます。）

けれども、山谷さまや、他の信仰体系を持っている人たちは、自分の信じていることは主張しますが、神の前での自分個人の説明責任としてそれを行なっているにとどまり、相手をねじ伏せるような議論は展開させません。中には334さまのように、サイレント・マジョリティーの声をあえて汲み上げる方もいらっしゃるようですが、大抵は、愛想を尽かしたり、ほおっておいたりするでしょう。

ここの掲示板を読んでいて、以上の感想を持ちました。山谷さまや他の方々は、純粋な神学議論を展開されていますが、一種の攻撃性が、その神学あるいは理論体系の中に内包されている、という点も見逃せないと思っています。

□363 自分が裁かれる人

3 3 4 - 2004/08/04 00:08 -

富井氏曰く・・・

《福音派であろうが、リベラル派であろうが、カリスマ派であろうが、御言葉からきちんとした議論ができない教派やクリスチャンに共通する性質は「わがまま」である。

彼らは自分の主張は「絶対に正しい」と考えている。だから、それと対立する主張については、議論は不要で、ただ断罪する以外にはないと考えている。

こういったコミュニケーションができない、また、そうする必要も感じない人間は格好は大人だが、内面は幼児なのだ。

大人というのは、相手を尊重するから、納得がいく説明をして、相手に理解させる努力をするが、幼児はただ泣いてわめくだけだ。》

これを読んで思ったのですが、これはどう考えても富井さん、あなたのことじゃないですか。この描写は、富井さんそっくりですよ。

さらに富井氏は続ける・・・

《こういった幼児が牧師なんぞなれるわけがないから、我々に対して「ヒット・アンド・ラン」（攻撃して逃げ去る）ばかりやっている「聖職者」は、人間からだけではなく、神からも愛想をつかされる。》

これも富井さんのことでしょう。もうみんな愛想をつかして、富井さん（先生とは呼びたくない）と話をする気もなくなっているんじゃないでしょうか。

エホ証を攻撃するのならまだしも、我々クリスチャンを呪うのはもういい加減やめていただきたい。富井さん、あなたは「クリスチャンに対して行なうことは、キリストに対して行なうことと同じだ」と言って自己正当化をしていましたが、あなたの「誘導尋問」にひっかかって、非聖書的なことを言ってしまったクリスチャンも、あなたと同じクリスチャンなのですよ。兄弟姉妹を言葉の罠にかけて、彼らの失策を喜ぶあなたは、本当に聖霊に満たされたクリスチャンなのですか。はっきりいましょう、あなたは真のクリスチャンではない！

□362 二元論の克服

山谷 - 2004/08/01 21:39 -

「自然」をどう位置づけるかによって、シェファアが問題としたような＜自然vs恩恵＞の二元論の図式にもなるわけですし、また、＜自然のみ＞の一元論の図式（現代的世界観）にもなるわけですし、また、＜恩恵のみ＞の一元論の図式（ヴィザンチン的世界観）にもなるわけですね。

再建主義というのは、従来のキリスト教神学の在り方が、＜自然vs恩恵＞の二元論の図式で来ていることを問題としているわけであり、この二元論の克服を図るために、＜司法律法を適用して『自然を支配する』ことを目論む＞わけです。

これに対して、＜自然のみ＞の一元論（現代的世界観）は、再建主義テーゼとの接合点がないわけですから、再建主義としては、何らかの世界規模のカタストロフが起きて、現代文明が一旦崩壊し、その上で、再建主義社会の構築を目指す、ということを行うのでありましょう。

さらにまた、＜恩恵のみ＞の一元論（ヴィザンチンの世界観）も、やはり、再建主義との接合点がないわけですから、ロシア正教やギリシャ正教など東方正教会の文化圏では、再建主義というのは、受容される可能性がゼロだと思われます。

さて、＜自然vs恩恵＞の二元論の図式で来ているキリスト教神学が、現在、再建主義からの直接的な挑戦を受けているわけですが、これにしても、＜本来の新約聖書神学は、『神・天使的諸力・自然』という三項図式の世界観的パラダイムに立っている＞という原点に回帰するのであれば、これもまた、再建主義との接合点は解消されてしまうのです。

つまり、この掲示板で何度も述べて来ましたように、キリスト教神学が、新約聖書神学本来の三項図式の世界観的パラダイムに立つことによって、再建主義からの挑戦をことごとく退けることが可能になるのです。

この場合の「自然の位置」とは、C.S.ルイスが言うように、＜神が、天使的仲介という鎖を用いて、自然を宙に支えている＞というような位置づけになります。

つまり、自然は、純然たる自然ではなく、神に対して自律・自立している自然でもなく、天使的諸力の仲介によって支えられている自然であるのです。この天使的諸力は、キリストの頭首権に服しているのですから、その意味では、＜キリストが自然を支えている＞わけです。ところが、この天使的諸力は、悪鬼的でもあるわけですから、天使的諸力がその潜在的悪鬼的性格を露見させた場合に、それと連動して＜自然が悪鬼化する＞ということもまた、起こるわけです。

これにより、＜キリストが自然を支配しておられる＞と同時に、＜なぜ、自然が悪であることがあり得るのか？＞（地震・洪水・ペスト・エイズ・飢饉など）という問いに、明快な回答が出せるようになるのです。

■ 360 創造からの逃走

ただのおじさん - 2004/07/31 20:05 -

>問題は、＜神から完全に独立した純粋な『自然』というようなものが存在し得るのか、どうか＞ということではないでしょうか？

>この点について、わたしは疑問を持っています。

その様な、

>神から完全に独立した純粋な『自然』というようなものが存在し得る

のであれば、神が主権者であるとは言えないのではないのでしょうか？

ヨブ記のサタンですら神の権威のもとにあるのに、その様な独立した『自然』なるものが存在することはおかしいと思います。

この様な想定は、もっとリベラルな神学の方に多く見られるのではないのでしょうか？

最近のキリスト教の動きは、キリスト教を救済論に、個人レベルの心の中に、キリスト教を限定しようとしていて、創造論から逃げようとしているのが明白であり、ゆゆしき事態です。これは明白に二元論であり、二元論をとって世からクリスチャンたちが逃げようとしているのです。

■ 359 自然の問題

山谷 - 2004/07/30 09:28 -

問題は、＜神から完全に独立した純粋な『自然』というようなものが存在し得るのか、どうか＞ということではないのでしょうか？

この点について、わたしは疑問を持っています。

たとえば、オランダの神学者ファンルーラーは、キリストの出来事以降、贖罪の力が全宇宙に働き、＜自然もまたキリスト教化された＞ということを言っています。つまり、この考え方に立てば、現経緯におい

ては、自然もまたキリストの宇宙的な頭首権の支配下に服している、ということなのです。

ファンルーラーは、<だからこそ、神政政治が可能になる>という意味のことを言っているようです。この場合の神政政治は、セオクラシーであり、再建主義者の言うようなく司法法律法の社会への適用を目指すセオノミーとは別のものです。

つまり、一般恩恵を肯定し、<贖われた自然>あるいは<贖いの賜物としての文化>を肯定した場合に、セオノミーとは異なるセオクラシーの確立を目指すことが可能になります。

キリストの受肉以前の経緯においては、恩恵と自然が対比的に図式化されていたわけですが、いまや受肉したキリストにおいて、<恩恵と自然が統合された>わけであり、その影響は、全被造世界に波及しているを見るわけです。その文脈において、世俗政治を神政政治化することが可能だと考えるわけです。

このようなパラダイムを、「サクラメンタルな世界観」と呼んでもよいのではないかと思います。

■ 358 ただのおじさんより

ただのおじさん - 2004/07/29 19:18 -

間隔が開いてしまっていますねm(_ _)m

さて、

>ヴァンティルの前提主義には、それが拠って立つための<前提>が存在しています。前提の前提、とでも言ったらよいでしょうか。

その様な前提は、キリスト教徒誰もが承認できるものではありません。彼と同質の神学を持った人のみが承認できるものです。

その様な前提主義は特定の神学に依存した特定の神学の一部でしかなく、そもそも、聖書のみ、というキリスト教の基本的な考え方と折り合いません。

そしてその折り合わなかった結論を正当化するために、

>こうして、再建主義による理性の完全否定が完成されることになります。

となるのですが、これではシェイファー図式そのままじゃないですか。理性からの逃走、か、ヴィザンチン文化、の世界になってしまう。

この図式は解決されるべきものであり、それで良いのだと開き直られては対話の余地がありません。

>この意味での前提主義に立つならば、宇宙論的な15の法領域に即した人類の文化・社会・経済を、<純粋に聖書のみに基づいた決疑論によって、一からすべて構成し直さなければならない>という結論になります。

彼らの創造論（創造科学）に対する立場も、この様な立場であるならばある程度納得がいきます。

創造論（創造科学）の人たちともやりとりをした経験から、創造科学の人と、再建主義の人との間には、違いがあると感じていましたが、この点に違いがあるのですね。

創造科学の人の科学観の根底には、科学も神様の恵みの産物（一般恩恵）という考え方があり、その様な科学観のもと、科学の成果を受け入れてきているのです。ですから創造科学の立場は、大文字のPで始まる前提主義ではなく、一般恩恵つきの前提主義なのです。

本来、創造論（創造科学）は、聖書の字義通りの解釈を強調するという意味で、ディスペンセーション主義的な聖書理解を基本に持ちます。

ですから、地球の歴史も、聖書から確実に読みとれる6000年であるという主張になるのであり、その点で彼ら（再建主義者）は創造論（創造科学）当事者から見れば厳密には別個の創造論なのです。

さらに創造科学の根底には、反自然主義、反自然神学、という考え（啓示論）が存在します。

創造科学の支持者は、自然主義を前提に持つ非キリスト教徒の科学には前提主義に立って反対しますし、自然神学的なエリクソンの神学も承認しません。

□357 対話は難しい

ストリーム - 2004/07/26 22:35 -

<再建主義の人と対話しても結局激しい議論だけで終わるような気がします。>ウーン、私も、相手が頭から、幕末の「尊皇攘夷」「外国船打ち払い令」のような態度で臨んでくるとい、そういう経験は多少ありますので、そういう気はするのですが・・・・。顔だけでも見たいという思いはあるのです。以前は、富井氏はホームページにご自分の顔写真を掲載しておられたと思うのですが。

□356 対話・・・

334 - 2004/07/26 21:55 -

山谷大尉の小論文は、たいへんよくまとめられていて、素晴らしいですね！

さて、再建主義者との対話ですが、私の所属する教会では以前、言葉の端々にこだわる正統主義的な長老がおり、長老会はしばしば紛糾していました。その長老は、若くして亡くなりましたが、再建主義の人と対話しても結局激しい議論だけで終わるような気がします。もちろん、ストリームさんのおっしゃるように、対話は無駄ではなく、別の新しい展開も期待できないわけではありません。

でも、富井氏の、あの噛み付くような雰囲気では、まともに対話が成り立つのかどうか・・・とも思いません。

□355 対話

ストリーム - 2004/07/26 21:04 -

掲示板は掲示板としての存在意義はあるのですが、どうも、掲示板というのは便利なツールなのですが、例の小学生殺人の時もチャットや掲示板の持ちマイナス面が取り上げられましたが、相手の顔や表情が見えない分、誤解や偏見も生み出すような気もします。実際に会って話せば、考え方や神学は違いますが、お互いフツターのオッサンであったりして、また別の展開もあるかもとは思いますが、現状では中々そういう直接対話の可能性はないですかね。米国などでは、キリスト教再建主義者と立場を異にするキリスト者が、パネルディスカッションのように、同じテーブルについて、直接顔と顔を合わせて、討論、議論をするというようなことはあるのでしょうか？

□354 キリスト者と歴史観の問題

山谷 - 2004/07/25 16:59 -

「キリスト者にとっては、歴史がどの方向に進むもうと、関係がない」という富井氏の歴史観。
「歴史とは、陰謀の歴史である」というラッシュドゥーニーの歴史観。
「歴史とは、宇宙理性の顕現である」というヘーゲルの歴史観。

以上に対して、キリスト教神学は第四の回答を提出することが可能であると思います。そこで、小論を作成してみました：

[キリスト者と歴史観の問題](#)

□353 的外れな恐怖心

334 - 2004/07/24 17:58 -

富井氏は、以下のように言った。

「山谷氏は、神の恐ろしさを知らない。
神の言葉を弄ぶ罪の恐ろしさ、そして、その刑罰がどれほどのものであるかを知らない。
我々は、人間の言葉を扱っているのではないのだ。」

神の言葉を自分で捻じ曲げることがどれほど自分に呪いを招くかを知らない。」

では、その証拠を示してみなさい。

ブルトマンを見よ。彼は呪われただろうか。むしろ、成功し、おまけに長命であった。彼は自由主義の権化みたいな人だから、富井氏からすればサタンに憑依された人にしか見えないだろう。

だが、彼は呪われず、むしろ救われて、今、天国にいるはずだ。彼もまた、一風変わってはいるものの、真のクリスチャンなのだから。

まして、ファンダメンタリストの山谷氏が呪われるはずがない！

一番問題なのは、富井氏がそうやって、兄弟姉妹たちを呪っているということである。

ミレニアムHPを読んで思うことは、富井氏はクリスチャンとして、また一市民として、まともに付き合える人間なのか、非常に疑問である、ということである。

こういって良ければ、彼はほとんど精神病に近い状態なのではないかと私は想像している。

□352 揚げ足とりですが・・・

334 - 2004/07/24 01:02 -

「この世界に、異常で醜い罪が入ったのは、人間が自分に与えられた自由意志を悪を選択するために用いたからだ」・・・と富井氏は言い、

「酒鬼薔薇が生首を校門の上に飾ったのは、神がそのようにプログラムしたからだ、ということが正しいならば、神はその罪を裁くことはできませんし、神そのものが混沌の主であるということになり、人生や世界から意味は完全に消え去ります。」・・・と富井氏は言ったが、別の箇所では、

「だから、神の計画にしたがって、動く以外にはないのだ。」・・・とのたまひ、

「それでは、神に対して罪を犯し、歴史的な大犯罪を犯したヒトラーやスターリンや麻原のような人間を神は責めることはできないではないか、ということになるのだが、それは、被造物として発してはならないのだ。」と結論した。

富井氏は、摂理や運命に関しては、何も知らないのではないか。

□351 歴史・・・

334 - 2004/07/24 00:16 -

「クリスチャンにとって、歴史は神ではない。それゆえ、時代の流れがどちらに向かっているかが関係ない。」・・・と富井氏は言い、

「とくにヘーゲルからこの「歴史の神格化」が顕著になった。歴史は絶対精神の自己発展の過程と位置付けられたので、歴史の過程そのものが絶対であり、「聖書」となった。」と富井氏は言ったが、その舌の根も乾かぬうちに、

「異端に共通するのは、「歴史の否定」である。」と言う。

都合のよいように、色々言い換えるのがお上手ですね。

□350 再建主義と日本の文化

[山谷](#) - 2004/07/21 22:34 -

通常のキリスト教神学であれば、日本の歴史と文化は、神の与える一般恩恵によって成立して来たものですから、そこに「善」なる要素を見ることが可能であるわけです。

ところが、「大文字のPで始まる前提主義」に拠るならば、聖書から決疑論的に思考して構成された文化だけが、善なるもののなのであり、そうでないものは、すべて、「悪魔的」ということになるわけです。

そうしますと、日本の文化と歴史は、再建主義の立場からすれば「悪魔的」ということになり、救いようがなくなってしまうわけです。聖霊派で言われているところの「あがないの賜物としての文化」ということなどは、特に、神学的に成立し得る根拠が消滅してしまうわけですね。

しかし、実際には、富井氏は日本を愛しているので、このような再建主義の過酷な結論を受け入れることは不可能なわけです。

そこで、唯一可能な道は、「日本の文化と歴史が、聖書に起源を持つ」と考えることなのです。これがすなわち、＜日本の民族と文化と霊性の起源は、失われたイスラエルの十部族の古代日本移民団に由来する＞と考える、日ユ同祖論なのです。

この、日ユ同祖論を採用した場合にのみ、「大文字のPで始まる前提主義」と「再建主義」を奉じつつも、「日本の文化と歴史」を肯定することが、可能になるわけです。

■ 348 キリシタンの殉教

3 3 4 - 2004/07/21 19:52 -

富井氏は、そのHPで、長崎の殉教者の血は決して無駄になることはないと書いていますが、なぜでしょうか？

彼の再建主義によれば、カトリックは偶像礼拝の輩であり、非聖書的なので、いくら殉教したといっても、地獄に行くのではないですか？

それとも、非聖書的な信仰でも、殉教すれば少々の逸脱は大目に見られて、天国に行けるのでしょうか？

確か、彼はマザー・テレサには批判的であったと思いますが・・・。

あと、日本におけるキリスト教禁制は、プロテスタントのオランダ人が豊臣や徳川にカトリックを中傷するようなことを言ったことが発端ではなかったのでしょうか。そしてそういうことを平気で行なうのが、現代で言えば、再建主義精神なのであります。彼の、立場の異なるクリスチャンに対する憎しみと敵意を御覧なさい。これこそ、教会を荒らすものにほかなりません。

■ 347 再建主義は、狂信のやからである

3 3 4 - 2004/07/21 19:05 -

きょう、ミレニウムHPを見てみましたら、そこには「天皇家には御名が隠されています云々・・・」みたいなことが書かれてありました。

天照大神がイエスキリスト？

だれがそんなことをまともに信じるのでしょうか？

陰謀論といい、特殊な天皇観といい、富井氏のハチャメチャな神学には辟易します。

富井氏のセンスで伝道して、「すばらしい、私もクリスチャンになりたい」と思う人はいるのでしょうか。むしろ、その背後に過激派特有の凶暴性を嗅ぎ取るのではないのでしょうか。

[「再建主義大論争を回顧する」へ](#)